

治罪法草案註釋

○此書ハ佛蘭西法律大博士ボアソナード氏起稿日本治罪法草案註釋ヲ翻譯シ事務上參考ノ爲メ之ヲ印刷ニ附スル者ナリ

一此書ノ譯者人名左ノ如シ

第五篇	第四篇	第三篇	第二篇	第一篇	至自
事項振録表	至自	至自	至自	至自	至自
至第六百二十八條	至第五百八十三條	至第三百一十條	至第三百六條	至第三百一十條	至第三百一十條
一項	一項	一項	一項	一項	一項
一條	一條	一條	一條	一條	一條

- 森 順 正
- 岩野新平
- 小山田銓太郎
- 森 順 正
- 森 順 正
- 小山田銓太郎
- 小山田銓太郎
- 岩野新平

治罪法草案註釋

○目次

上書	一	丁
自叙	一	數
緒論	一	
總則	九	
第一篇 責罰裁判所ノ構成及ヒ管轄		
通則	九	
第一章 違警罪裁判所	一四九	
第二章 輕罪裁判所	二五四	
第三章 控訴裁判所	二六五	
第四章 重罪裁判所	二八八	
	三〇三	

第五章 大審院
第六章 高等法院

自第九十三條 三五
至第九十七條 六一
自第九十八條 三六
至第一百零五條 六六

目次

治罪法草案註釋

傑、博散德 著
森 順 正 譯

XB620
B 10
2 2

參議兼司法卿大木喬任公閣下ニ白ス
參議尊公

余ハ本篇ノ首メニ於テ閣下ノ尊名ヲ掲ルハ余カ本務ナリト信ス又余ハ豫メ閣下ニ對シ近日將ニ上梓セントスル書ニモ亦等シク尊名ヲ掲クルヲ許容セラレシヲ請願ス
謹テ惟ミルニ日本國ニ於テ民刑諸法ノ改正及ヒ編纂ニ着手セラレタルハ實ニ閣下ニシテ其着手以來既ニ六年ノ久キニ亘リ且ツ百般ノ困難アルニ拘ハラス能ク其業ヲ繼續セラレタルノ功亦偉ナリト謂フ可

上書

シ今ヤ新刑典ハ實行セラル、所トナレリ
 該刑典一タヒ修正ヲ經タル後ハ當初編纂ノ際及ヒ閣下ヨリ政府ニ上
 呈セラレタル時ト多少ノ變更ナキニ非スト雖モ日本往昔ノ刑律ト大
 ニ相異ナル所即チ刑罰ノ大ニ寛宥ナルト被告人辯護ノ自由ヲ保障ス
 ルトノ趣旨ハ之ヲ保存セラレタリ
 右ノ如ク修正ノ際多少ノ變更ヲ加ヘラレタルニ拘ハラズ閣下ハ其基
 礎尤モ廣大ナル草案及ヒ其初メ草案ニ就テ作ラレタル註解トノ佛文
 チ世ニ公ケニスルハ新法實施ノ際之カ參照ニ必要ナルコトノ見ヲ起サ
 レタリ

其第一冊ナル治罪法ノ部ハ今之ヲ閣下ニ上呈ス
 該篇ニ就テ考レハ日本ニ在テ今尙ホ早キニ似タルニ因リ廢棄セラレ
 タル諸點彼ノ陪審制度ノ如キモ時機ノ來ルニ於テハ更ニ採用スルコト

有ル可キヲ以テ豫メ之ヲ熟察玩味スルノ手段ヲ得可シ

若シ日本諸法典ノ編纂全ク其功ヲ竣ヘルニ及ンテハ佛國ニ所謂ル「其
 國ニ益シテ至レル者」トハ其レ實ニ閣下ナル可キ歟佛國民法編纂委員
 ノ一人ナリシ彼ノ有名ナル破智耶ノ言ニ曰ク良法ハ人ノ授與シ及ヒ
 享受シ得可キ最大ノ幸福ナリト良哉此言

余ハ佛國人トシテハ我國法カ此日本ノ鴻業ノ基礎トセラレタルヲ喜
 ヒ又一己人トシテハ閣下ノ輔佐タリシコトノ名譽ヲ得タルヲ感ス
 余ハ余カ靡涯ノ感激ト余カ深厚ナル誠忠トチ茲ニ公表ス希クハ容レ

千八百八十二年七月三十一日于東京

傑、博、散、德

自叙

夫レ日本帝國諸法典草案ノ編纂順序ニ據ルニ今將サニ發行セントスル所ノ者ハ最モ先ニ成功セシ者ニ非ス之ニ先ツコ一年即チ治罪法草案ノ編纂中ニ於テ刑法草案ハ既ニ其功ヲ竣ヘリ
此草案ノ編纂ハ司法省ニ於テ千八百七十七年七月(明治十年七月)ニ其業ヲ起シ千八百七十八年ノ末ニ至テ全ク成功セリ

〔附言〕 日本ニテハ皇統ノ開基タル神武天皇即位二千五百四十二年ナル紀元ノ外新帝ノ即位毎ニ元ヲ改メラル今上ノ年號ハ千八百六十八年ヨリ起テ明治ト曰フ

委員ハ大審院長岸良君カ長ニシテ司法官更六名及ヒ本文記者トチ以テ組織セラレ司法卿大木公之カ總裁タリ

註解ハ理由説明書ニ代ヘ歐洲ノ立法委員ノ報告書ニ彷彿タル者ニシ

テ法文脱稿ノ末月急遽ノ際之ヲ編纂シ僅々數週間ニ過キスシテ其功
ヲ竣リ直ニ翻譯ヲ爲セシ者ニ係ル

此時ニ當リ刑典ノ兩草案トモ日佛兩様ノ文ヲ以テ之ヲ印刷シ司法卿
ヨリ太政官ニ上呈セラレ幾クモ無クシテ太政官ヨリ元老院ヘ下付セ
ラレタリ

是ニ於テ乎更ニ委員ヲ置キ修正及ヒ確定案ノ具中ヲ命シタリ委員ハ
太政官大書記官及ヒ元老院議官トナリ以テ組織シ且ツ司法省草案編纂
委員ヲ之ニ附屬セシメ以テ其原案ヲ辯護セシメタリ只、本文記者ノ之
ニ干預セサリシノミ

然シテ此混淆委員ノ爲メ兩草案ノ蒙リタル許多ノ變更削除ノ性質及
ヒ其當否ヲ評スルカ若キハ我輩ハ勿論何人ト雖モ得テ爲ス可キ所ニ
非ス

加旃當時我輩ハ刑典ノ兩草案ニ比スレハ計畫頗ル完全ナル民法草案
ノ編纂ヲ命セラレタルハ我輩ノ身ニ在テハ毫モ刺撃アルコトナキノミ
ナラス我輩カ曾テ取ラサリシ佛法典ノ條款ヲ採用セラレタル場合數
多アレハ決シテ佛法ノ精神ニ反對スルノ意ナキコト疑ヒ無クシテ(是レ
我輩ノ爲メニハ最大ノ關係ヲ有スル者ナリ)二様ノ満足ヲ得有セリ故
ニ草案ノ辯護者タル者ハ其レ獨リ我輩ノミ我輩ハ彼ノ破壊ノ業ニ干
セサレハ大岡ノ裁斷ニ擬シ草案ノ親タル者ハ我輩ナリト斷言スルモ
敢テ憚ル所ナシ然レヒ我輩ハ司法省編纂委員トノ論議ニ因リ大ニ輔
翼セラレタルコトハ欣然公言スル所ナリ嗚呼若シ之カ輔翼微セハ其細
目ニ至ルマテ我輩ノ業焉ソノ能ク其全キヲ致サソヤ

〔附言〕 聞ク大岡ハ撒羅孟^{サロモン}ト同趣向ナル裁判ヲ行ヒ日本ニ於テ其名
高シト謂フ

以上言フ所ハ暫ク措キ註釋ハ特ニ我輩一己ノ著作ナリトス
 修正案既ニ國典ト成テ實行セラル、ノ今日ニ方リ政府ハ原案ノ再板
 及ヒ其初メ草案ニ附シテ日本譯文ノミチ公ニセシ註解ノ佛文ノ印刷
 チ命シ以テ其眞理ヲ探究スルニ公平ナルノ證ヲ示シタリ
 抑此舉タル佛語ニ通曉セル日本壯年ノ法學士輩ニ在テハ大ニ裨益ア
 ル可ク又司法卿ノ命ニ依リ翻譯成ルニ及テ新法ト草案トノ差異ヲ明
 晰セハ新法施行ノ爲メ一般裁判所ニ在テモ幾分カ裨益ナシトセサル
 ナリ

又此事タル新法ニ就キ老練ト謂ハンヨリ寧ロ偏向者ノ筆ニ成リシ無
 數ノ註解ニ因リ釀生セル弊害ヲ矯正スルニ適切ナリト信ス

〔附言〕 日本ニ於テ兩刑典ニ就キ註解書ノ夥多ナル僅カ千八百八十
 年七月明治十三年七月其頒布以來時尙ホ淺キモ已ニ百有餘種ノ多

キニ及ヘリ

然ルニ此註解ト雖モ起初倉卒ノ際ニ成リタル餘臭アルコトハ我輩ノ敢
 テ掩ハサル所ナリ蓋シ此註解ヲ編述スルヤ嘗ニ三閱月ヲ以テ脱稿ス
 可キノミナラス尙ホ日々草稿ノ儘譯者ニ交付スルヲ要シ謄本タモ坐
 右ニ備ヘ置クコト能ハサリシニ因リ其不便甚ナカラサリキ是レ同一ノ
 原則現出スル毎ニ二三ノ重複ヲ免カレサリシ所以ナリ此重複タル印
 刷ノ時ト雖モ其全體ヲ通閱シテ改ムルニ非サレハ削正ノ全キヲ得ル
 コト能ハサル者ナルニ我輩ハ不幸ニモ他ノ業務ノ爲メニ阻セラレ遂ニ
 初志ヲ達スルコト能ハス唯僅カニ印刷ノ次序ヲ整ヘ辭句ヲ正シ處々ニ
 二三ノ引例ヲ加ヘ且ツ一部類ヨリ他ノ部類ヘ參照ヲ附シタルニ過キ
 ス

又我輩ハ自カラ許シテ草案ニ二三ノ増補ヲ爲シタリ是レ蓋シ異日新

法改正ノ時ニ際シ其用ニ供センカ爲メナリ是等ノ改正ハ一々附言ヲ設ケテ之ヲ説明ス

〔附言〕 一條ヲ追加シタル時ハ前條ノ號數ニ第一第三ノ數ヲ附記ス第九十六條第二、第二百五條第二及ヒ第二百五條第三、第七十二條第二、第三百五十九條第二、第五百九十七條第二及ヒ第五百九十七條第三等ナリ但、第二百四十六條第二ハ既ニ千八百七十九年ノ草案中ニ現存セリ

加旃讀者ノ搜索ニ便ナル可キ事ハ一モ忽ニセサリシナリ故ニ

第一 草案各條ノ法文ニハ欄外ヲ設ケ主旨ヲ略記シ條末ニ三个ノ對比ヲ附シタリ即チ新法ノ正條互ニ關係ヲ有スル草案中ノ條項及ヒ佛法中多少模擬若クハ修正シタル條項看第一條附言)

第二 註解ニハ每章若クハ每款ノ首メニ於テ其要旨ヲ列記シ之ニ各

條ノ符號ヲ附シ其論定スル事柄ト其答辭トヲ略記ス

第三 總體ニ關シ三个ノ表ヲ設ケタリ其利益ノ若キハ蓋シ一目瞭然タル可シ

〔附言〕 新法ト草案トノ比較表ハ草案ト新法トノ比較ト對峙スル者ナリ茲ニ一奇事アリ此送リニハ草案中削除ノ條項ニ應スル百五十有餘ノ零字ヲ見ルモ比較表ニハ纔カニ増補ノ條項ニ應スル四个ノ零字ヲ見ルノミ是レ蓋シ審査委員ハ勃阿羅カ詩中ニ云ヘル格言ヲ法律ニモ適用ス可シト思ヘルニ因ルニ似タリ其言ニ曰ク時ニ加ヘテ屢減シヨト

我輩今回ノ機ニ臨ミ國文社ヲ稱揚セサルヲ得サルナリ國文社ハ此難雜ナル印刷ノ業ヲ成スニ方リ其注意實ニ賞賛勸勵スルニ足ル可キ者アリ抑、本篇ハ該工場ノ印刷ニ係ル該工場ニ於テ佛籍ノ印刷ヲ

爲セシハ蓋シ此書ヲ嚆矢トス而ルニ其精巧ナルヲ佛國ノ印刷師ト雖モ猶ホ三舍ヲ避クル者アリ是レ余カ賞賛スル所以ナリ此草案ヲ編纂スルヤ刑法ト異ナリテ外國法典ヲ引用スルヲ少カリキ何トナレハ獨乙及ヒ伊太利ノ法案ハ未タ公布セラレス或ハ既ニ公布セラレタルカハ之ヲ知ラスト雖モ當時日本ニ在テハ未タ之ヲ得ル能ハサリシ故ニ其有セシ所ノ者ハ佛法ト少差異アルノミニシテ當時修正ノ爲メ討議中ナル白耳義法典ト陪審ニ關スル問題ニ就キ多少有益ナル條項アレトモ總テ之ヲ摸倣セサリシ煥太利翁加里ノ法典之カ參照ニ供セシノミ是故ニ法文中往々缺點アルニモ拘ハラヌ日本法案ノ基礎トナセシ者ハ則テ佛國法ナリ(該法モ亦現時修正ノ計畫中ナリ)然リト雖モ草案中ニ摸倣シタル佛國法ノ條項ニシテ著シキ修正ヲ加ヘサル者ハ二三條ヨリ多キヲ見ルヲ能ハサル可シ

近日刑法及ヒ民法ニ就テモ亦同様ナルヲ見ル可シ實ニ佛法典ノ歐米ニ於テ屢法典ノ摸範ト仰カレ爲メニ我輩佛國人ノ誇色アルハ誠ニ然ル可キヲナレトモ今日ニ至テハ最早總體ヲ舉テ近世ノ學術ト世俗ノ需要トニ應ヒシムル能ハサルヲハ敢テ爭フ可カラサルナリ殊ニ其不完全ニシテ且ツ法律ノ講習解釋及ヒ適用等ヲ容易ニシシムル所ノ順序ト方法トニ乏シキハ亦掩フ可カラサルノ痕跡ナリトス是ヲ以テ草案中之ヲ摸擬スルニ方リ古來ノ經歷ニ由リ善良公正且ツ有益ナリト認メタル者ハカメテ之ヲ保存シ瑕瑾アル者ト認メタル所ハ之ヲ變更シ自カラ淺思急躁ニ流ル、ノ弊ヲ防キタリ加旃是等ノ新法ハ異日日本在留ノ外國人ニモ適用セラル可キ者ナレハ特リ一國法ノ精神ニノミ偏ヒス一己人ト等シク一國ト雖モ免カレ難キ因襲ノ迷誤ト世俗ノ誹議トニ罹ラサル可キ普通公法ノ如キ體裁

ヲ有スルハ頗フル益スル所アル可キナリ
 此點ヨリ觀察ヲ下セハ今ヨリ幾ハクモナク實驗ニ因リ修正案ト原案
 トハ孰レカ能ク今日ノ需要ニ應スルカ殊ニ孰レカ速ニ日本在留ノ外
 國人カ專有スル治外法權ナル過當ノ特權ヲ廢棄スルノ力ニ富ムカヲ
 知ルヲ得可シ

夫レ治外法權ハ通義ニ反スルノ特例ニシテ尤モ憂フ可キ者ナリ他ノ
 時勢他ノ邦國ニ在テハ或ハ允當ト爲ス可キモ日本ニ在テハ然ラス况
 ソヤ方今猶ホ固ク此不當ノ特權ヲ採リ離サ、ルハ所謂ル狐疑ノ致ス
 所ト謂フ可シ是レ日本國民ノ其廢止ヲ論シテ已マサル所以ニシテ其
 決意ハ極メテ堅ク其要求ハ極メテ慎重ニシテ且ツ中平ヲ得タリ
 往時修交條約ヲ締結スルニ當リ内訶頻リニ起リ中央ノ權柄襄替シタ
 ルト古來孤立セシトニ因リ諸外國ト同等ノ地位ニ立ツヲ能ハサリシ

加旃海外諸國ト雖モ壹ニ自己ノ利益ノミ是レ擅ニシタルニ非ス義勇
 不羈ノ人民ニ對シ敬禮ヲ厚フセサルニ非サルヲハ之ヲ認メサル可カ
 ラス然レハ其國民ノ過ニ因リ咎ム可キ行爲アリシヲ以テ治外法權ヲ
 ル特權ヲ獲、以テ國內主權ノ一ヲ殺キ日本人ノ原告又ハ告訴人タル際
 ニ於テハ自國外ノ地ニ在テ自國ノ法ヲ施スノ權ヲ得有シタルニ過サ
 ルナリ

日本ニ於テハ正シク條約ヲ恪守遵奉ス蓋シ約ヲ守テ叛カサルハ其固
 有ノ一德ナリ然レハ亦之カ改正ヲ得ルニ周旋シテ孳々倦ムヲ無シ凡
 ソ原因滅ヒテ果効存シ之カ際限ナキハ道理ニ背馳スル所ナリ彼ノ治
 外法權ノ廢止モ其期必ス遠キニ在ラサル可シ夫レ不當ノ處分ハ假令
 ヒ多少ノ利益アルモ到底其不當タルヲハ之ヲ免ル、ヲ得ス况ソヤ其
 利益既ニ存セサルニ及テハ如何ソ之ヲ正當ト看做スヲ得ソ果シテ

然ラハ日本ノ時勢即チ人ト物ト此十五年以來變化シタルハ尠少ナラ
ス國內ノ形勢及ヒ經濟ノ改良ハ實ニ以テ驚愕スルニ足レリ文明史中
無前ノ珍事ト謂ハサル可カラス

又斯ノ如ク新奇ヲ尙フノ人民ニシテ二十五期以降國內ヲ統御セル朝
廷ヲ奉戴シテ能ク誠忠ヲ盡セルハ頗フル觀ル可キ所アリ是レ蓋シ朝
廷能ク時勢ノ進歩ニ從ヒ之ヲ幫助シ之ヲ調和シテ其宜ニ適シ加之民
利ノ爲メニハ先鞭ヲ打ツテ開明ノ美域ニ進ムニ因ルニ在ルノミ

日本人民ノ能力泰西ノ思想ニ感染スルニ速カナル法律學等形而上ノ
學ニ於ケルモ藝術工業ノ若キ形而下ノ學ニ於ケルモ亦人ヲシテ驚愕
セシムルニ餘リ有リ海陸軍人醫學士及ヒ工學士等ニ在テハ既ニ其能
ク歐制ニ摸倣シテ業ヲ卒フルヲ得可キノ證ヲ顯シ法學士中ニモ亦新
鮮ナル思想ヲ抱懷セル者ヲ生スルニ堪ハタリ

日本ノ法學士ハ歐洲ヨリ傳習セル教則ニ就キ實利ヲ收得シ日々我輩
ヲ詰テ曰ク我輩カ嘗テ課シタル事實ハ我輩カ書籍ニ論シ言語ニ説キ
タリシ公法ノ主義ト猶ホ相ヒ背馳シテ止マラサルカト
國民モ其他數ハ却テ異域ト相ヒ睽離シタルノ尙キヲ憾ニ開明諸國ト
等シク自國ニ於テ其裁判權ヲ全フスル以上ハ條約ノ諸禁ヲ解弛セン
ヲヲ望メリ

此問題タル一旦公法ニ據リ眞ノ地位ニ置キ歐米諸國ノ公議ニ附スル
ニ至ラハ日本ヲ擁立スル者ハ啻ニ兩大陸ノ法學士ノミナラス必スヤ
亦博識自由方正ナル公法學士及ヒ參政家ノ輔翼スル所トナル可シ
公義ト天理トノ原則ヲ日本法律ニ輸入スルヲ猶ホ之ヲ其少年輩ニ教
授セシカ如クシ以テ日本審判ノ全權ヲ回復スルノ地ヲ爲サントスル
ハ余カ此刑法治罪法ヲ草シ又民法ヲ草スルニ當テ終始目的トスル所

ノ大主旨ナリ公義ト天理ノ原則ハ實ニ近世文明ノ光華ニシテ之ヲ採
擇施行セハ治外法權ノ論據ヲ拔キ其口實ヲ絶ツ期シテ俟ツ可キナリ

治罪法草案註釋 治罪法原語、コト曰フ刑事訴訟法ノデユール、クリ

傑、博散德 著

森 順 正 譯

緒論

要旨

第一號 治罪法ノ目的、其利益

第二號 事實若クハ法律ニ附キ裁判ノ錯誤ニ對スル用意及ヒ上

訴

第三號 本法ヲ五篇ニ分チタル事

第四號 日本ニ關スル改正

第五號 陪審

第六號 佛國法典ノ題號ヲ改正シタル事

緒論

〔第一號〕 此新法案ハ現今元老院ニ於テ審査ニ附セラレタル刑法草案ヲ補填スル者ナリ

〔附言〕 此註解ハ明治十二年(千八百七十九年)ノ編纂ニ係ル者ト知ル可シ

刑法ハ刑罰ノ一般ノ原理ヲ示シ及ヒ罰ス可キ所爲ヲ定ム○治罪法コードベナルベイスハ約言スレハ刑法ヲ活用スルノ具ナリデナリ

治罪法ハ原理ニ關スル規則ヨリ管轄履行ス可キ法式及ヒ遵守ス可レキ期限ニ關スル規則ヲ示スレ多シト雖モ其重要ナル處ハ刑法ト同一ナリデレ

實ニ豫審、公判、擅横ニ涉リ各裁判所其固定ノ職掌ナク又豫審中人身エンストリノクレヨン、シユエニマンノ自由ニ對シテ充分ノ保護ヲ表セス或ハ之ヲ貴重シテ其極端ニ奔

リ社會ノ安寧ヲ擾亂シ又論告、辯護、法廷ニ於テ充分同等ノ位地ニ置トリビユナル

カレス又上訴ノ途ヲ開クヲ遲ク又ハ塞クヲ急ナル時ハ罰ス可キノルクル所爲法律ニ於テ詳細ニ定メラレ刑罰各罪ニ應シテ精密ニ制限サル

ルトモ被告人ニモ社會ニモ毫モ益スル所無カル可シエンキユルベ

故ニ新法ハ成ル可ク公平ナル刑事裁判ニ必要ナル是等ノ條件ト其エンスチニス、ベナル他牧擧ニ違アラサル諸要件トニ適スルヲ期スエツクシエ

〔第二號〕 然レ其全體ノ性質ハ事實及ヒ被告人罪科有無ノ裁判トエンビコヒリツ刑律適用トニ附キ終始裁判上ノ錯誤ヲ防クヲ慮カルニ在リトスシユザシエ

是ヲ以テ犯罪ノ第一ノ搜索ヨリ裁判執行ニ至ルマテ刑事訴訟ノ履シユザシエ行ス可キ手續ハ逐一法律ニ據リ宣示規定セララル、者トスシユエニマンエキセキニシヨ

若シ是等ノ用意アルニモ拘ハラス事實上ニ誤謬アリト認ル時ハ本シユエニマン法ニ於テハ充分擴張セラレタル再審ナル非常法ヲ以テ之ヲ矯正スレヒシヨ

擬律ノ錯誤及ヒ法律規則ノ違背ニ對シテハ法律ニ規定セル手續ニフ、フロワー

緒論

從ヒ破棄院^{カール、ド、カッサシヨ}ニ於テ最上ノ審理ヲ爲ス

又破棄院ノ上ニ皇帝ノ敕典ナル者アリ即チ減等若クハ恩赦ヲ施シ

テ特別ノ場合ニ於テ通常ノ場合ノ爲メ設ケラレタル法律ヲ用フル

ハ嚴ニ過キテ較^レ穩當ナラス又必要ナラサル時ニ於テ刑罰ヲ輕減シ

若クハ赦免シ又ハ翻然悔悟シ行狀ヲ悔改シタルノ證ヲ表セシ被刑

者ヲシテ其嘗テ失フタル權利ノ全部ヲ以テ復權ニ依リ再ヒ邀得セ

シムル是ナリ

〔第三號〕是等ノ事タルヤ固ヨリ多岐浩濶ナルヲ以テ五篇ニ分テ之

ヲ規定ス其各篇ニ定ムル所左ノ如シ

第一篇 責罰裁判所^{トリスヒコナリ、ド、レフ、レ、シ、シ、ヨ}刑事直譯所^{ナリ}意ヲ按シテ譯セハノ構成及ヒ

管轄^{コルベタンス}豫審^{エリス、トリ、ユクシヨ、ン、フ、レ、バ、ラ、ト、ワ、ル}

第三篇 公判ノ法廳

第四篇 破棄院^{此字亦直譯ナリ}意譯セハ大ノ職掌

第五篇 裁判ノ執行

〔第四號〕茲ニ日本往昔ノ裁判制度ニ比シテ此法ノ重要ナル改正ヲ

示スハ益ナキニ非サルナリ然レニ帝政復古以來多少外國ノ法制ニ

摸倣シタル裁判ノ新例制定セラレタレハ此比較ハ維新以前ニ溯ル

ニ非サルヨリハ沿革上ノ利益タモアルヲ無シ然レニ此事タル我輩

ノ與知ス可キ所ニ非ス○故ニ犯罪ノ舉リタル後若干ノ時日ヲ經過

シタルニ因リ起訴ノ妨碍ト爲ル可キ彼ノ期滿免除ノ如キモ古法ニ

比スレハ新制ナレトモ現行律ニ比スレハ敢テ新制ナリトス可カラ

ス唯、新法ニテハ一層其條件ト効力トヲ精細ニシタルノミナリ○檢

察官ノ制モ亦日本ニ於テハ數年前ヨリ既ニ行ハレタル者ニシテ新

法ニテハ其職掌ヲ補綴規定シ裁判官ノ職掌ト其區別ヲ詳ニセシノ
 ミ○書記モ亦新法ニ於テハ較重要廣大ナル職掌ヲ有ス○上訴ノ方
 法ニ至テハ頗ル之ヲ擴充セリ殊ニ豫審處分ニ關スル者ノ如キハ則
 十眞ノ改正ニ係ル者トス○出廷セサル被告人ハ若干ノ期限内更ニ
 裁判セラル、ノ權アルモ先ツ一旦之ニ對シテ闕席裁判ヲ爲スヲチ
 准シタルハ亦重要ナル改正ナリトス

〔附言〕

日本ニ於テ封建制度ヲ顛覆シタル千八百六十八年ノ政事
 上ノ大變革ニ革命ノ名ヲ附スル者アリト雖モ是レ眞ニ七百年來
 ノ舊政ニ回復セシ者ナレハ我輩ハ之ヲ名ケテ帝政ノ恢復ト云フ
 且ツ是レ大政復古(大政ノ古ニ復スル)ナル日本語ニ恰フ
 〔第五號〕然レモ最モ至大ナル改正ハ重罪事件ヲ裁判スルニ陪審官
 ヲ設ケタルト是ナリ

此制度タル歐米諸國ノ法典ニ載スル所ニシテ或ル論者ハ日本ニ於
 テハ恐ラクハ尙ホ早カラント思考セシモ是レ日本ノ法制ヲ他國ノ
 法制ト同等ノ地位ニ置クニ於テ必要ナルカ如シ○新法ハ早晚日本
 在留ノ外國人ニモ適用セラル可キ者ナリ然ラハ是等外國人カ本邦
 ニ在テモ亦自國ニ於テ公平ナル刑事裁判ノ最上ナル擔保ナリト認
 メラレタル法制アルヲ知ルハ必要ナリ

〔第六號〕

此新法典ニ附セラレタル題名ハ佛國ニ於テ同一ナル事項
 ノ爲メニ設ケラレタル法典ノ題名ト至ク同シカラス
 「コード、デノストリユクシユン、クリミナール」(刑事豫審法典)ノ稱ハ屢非
 難ヲ被ムリタリ○此稱タル佛ノ古法ニ於テ刑事ノ辯論及ヒ裁判ニ
 毫モ公式ナク法律ニ據リ規定セラレタル法式ニ從ハス搜索、證據ノ
 提出及ヒ辯論ヨリ裁判ニ至ルマテ都テ豫審ト稱セシ時ニ在テハ適
 切ナリ

緒論

然ルニ其後千七百八十七年大革命ノ時ニ至リ豫審ト辯論トヲ二ツニ分チ豫審ハ豫メ罪ノ輕重ヲ量ル爲メニシ辯論ハ本案根底ヲ裁判スル爲メニス刑事訴訟ノ初歩ノミニ豫審ノ秘密ニ限リ辯論ニ公開ノ式ヲ用ルニ及テモ尙ホ此二者共ニ「エンストリユクシヨ」ノ名ヲ保存シタリ○然レニ此二者ニハ「プロセヂユール」(訴訟手續)ノ名ヲ附ス可キ者ナリ何トナレハ此二者毎ニ其手續ヲ明白ニ定メテ在昔「エンストリユクシヨ」ノ性質トモ謂ツ可キ裁判官ノ擅横ヲ防ケハナリ日本ノ新法典ハ前説ノ如キ非難ヲ受シルヲ無カル可シ其題名ヲ見レハ其刑法ト關係スルヲ恰モ訴訟法ノ將來民法ニ於ケルカ如クナルヲ知ルヲ得可シ即チ彼ハ法律ノ原則ヲ定メ此ハ其活動即チ適用セシムル者ナリ

總則

要旨

第七號 此總則ノ目的

第八號 通則、其利益

〔第七號〕 此總則ハ新法全體ヲ總括支配スル者ナリ

其關係スル所左ノ如シ

- 第一 一ノ犯罪ヨリ生シ又ハ犯罪ノ際ニ生シタル訴權即チ起訴ノ權及ヒ其消滅ノ方法(自第一條至第二十條)
- 第二 訴權若クハ上訴ノ行ハレ得可キ期限若クハ一ノ訴訟手續ト他ノ訴訟手續トノ間ニ遵守ス可キ期限ノ算計法(自第二十一條至第二十三條)
- 第三 訴訟關係人ニ書類ヲ送達スル法式(自第二十四條至第二十二條)

總則

第四 訴訟書類ノ正本及ヒ謄本ノ書式(第二十八條)

第五 舊法ヨリ新法ヘノ更迭條例(第二十九條及第三十條)

〔第八號〕 法典ノ他ノ部類殊ニ第一篇及ヒ第三篇ノ首ニ於テハ幾ン
ト汎博ノ性質ヲ有スル條例ヲ載セタリ然レモ是等ハ唯其一篇ノ目
的タル事項ニ關スルノミ所謂ル通則ノ稱ヲ下ス者是ナリ
其利益トスル所ハ別異ニ似テ同種ナル場合ニ於テ同様ナル規則ノ
重複ヲ避ルカ爲ナリトス

公訴ノ目的

第一條 犯罪ヲ證明シ及ヒ該當ノ刑罰ヲ適用スルヲ以テ目的トシル
依リ行ハル、公訴ハ法律ニ據テ定メラレタル區別ニ循ヒ檢察官吏ニ依ツテ行ハル
〔治、第一條○草、自第三十三條、至第三十五條及第三百五十一條○佛治、第
一條、第二十二條以下〕

私訴ノ目的

第二條 犯罪ニ因リ一己人ニ及ホシタル損害ノ賠償及ヒ一己人カ不
正ニ奪ハレタル物件ノ返還ヲ要ムルノ私訴即チ民事ノ訴ハ民法ノ規
則ニ循ヒ犯罪ノ爲メニ害セラレタル者ニ屬ス〔治、第二條○草、自第百二
十五條至第百二十八條、第三百五十條、第三百八十六條、第四百七十四條
○佛治、第一及二條〕

公訴ノ獨立

第三條 公訴ハ法律ニ據ツテ特定セラレタル場合ニ非サレハ被害者
ノ告訴ニ關セラレス又其告訴若クハ訴權ノ拋棄ニ因リ消滅セラレス
〔治、第三條○草、第百六條、第三百八十六條第五項、第三百九十條○佛治、第
四條〕

私訴ノ管轄

第四條 私訴ハ何程ノ金額ニ上ホルモ法律カ其審理ヲ特別ノ裁判所
ニ命スル場合ヲ除キ公訴ニ附帶シテ刑事裁判所ニ起サル、トモ得可シ〔治、第四條○草、自第
私訴ハ又別ニ民事裁判所ニ起サル、トモ得可シ〔治、第四條○草、自第

五條至第七條、第十九條、第三百九十六條第三項、第四百二十四條第三項
○佛治、第三條

二箇ノ裁判所
ノ順序

制裁

第五條 若シ二箇ノ訴カ同時ニ刑事裁判所又ハ相異ナル二箇ノ裁判
所ニテ審理中ナル時ハ私訴ハ公訴ノ先キニ裁判セラル、ハンダントトテ得ス若
シ之ニ背ク時ハ兩裁判共無効タル可シ但シ民事ノ處斷アリシ後刑事
ノ處斷アリタル時テ除クニユリケ治、第六條○草、第五百三十二條第五項○佛治、
第三條第二項

民事ノ訴ノ願
下

第六條 其訴ヲ刑事裁判所ニ起シタル所ノ被害者ハ之ヲ民事裁判所
ヘ轉スル爲メ願下ヲ爲ス_ト能ハス然レモ被告_ハ他人ノ故障若クハ本案
辯論ノ手續ヲ爲シタル時ハ該裁判所ヘ其不受理ナル可キ_トテ訴フル
デッファンズ、モソイヤント能ハス

裁判所ノ變換 若シ被害者カ其訴ヲ最初ニ民事裁判所ニ起シタル時ハ若シ公訴カ已

ニ檢察官ニ依リ起サレタル時ニ非サレハ願下ヲ爲シテ之ヲ刑事裁判
所ヘ轉スル_ト能ハス

二个ノ場合ニ於テ棄却サレタル訴ハ更ニ願下ヲ爲シタル裁判所ヘ全
キ者トシテ起サル、エカルテトテ得治、第七條○草、第二百二十七條○佛治、第四百

新訴 二條第四百三條

無罪免訴ノ言
渡民事ノ賠償

第七條 被告人ヲ起訴ノ外ニ置ク免訴ノ言渡、放免無罪ノ言渡若クハ
其罪ヲ問ハサル不問ノ言渡ハ民法ノ規則ニ從ヒ被害者ノ要求シ得可
アツキツトマンキ賠償若クハ返還トニ害セス

管轄

前記ノ賠償若クハ返還ハ像審廳ニ由リ免訴ノ言渡アリシ時ハ民事裁
判所ノ前ニ非サレハ請求セラル、シユリヂクシヨンプンストリユシヨトテ得ス治第八條○草、第二百四十三
條、第三百五十五條、第三百五十六條、第三百九十三條、第四百十七條、第四
百八十五條、第五百十五條、第五百二十三條○佛治、第二百二十八條、第二百

十九條、第五百五十九條、第九十一條、第二百十三條、第三百五十八條、第三百五十九條、第三百六十六條

公訴ノ消滅

第八條 公訴ハ消滅ス

第一 被告人ノ死去ニ因リ

第二 若シ公訴カ被害者ノ告訴ニ關スル時ハ其私訴ノ拋棄又ハ私

和ニ因リ

第三 破棄ス可カラサル者ト爲リタル裁判上ノ決斷ニ因リ

第四 犯罪後ノ法律ニ於テ刑罰ノ廢止ニ因リ

第五 特赦ニ因リ

第六 期滿免除ニ因リ(治、第九條○草、第十條自第十三條至第十七條

○佛治、第二條、第三百六十條)

私訴ノ消滅

第九條 私訴ハ消滅ス

第一 犯罪ニ因リ生シタル損害、財産ニ及ホサ、ル時ハ出訴前、被害者ノ死去ニ因リ

第二 被害者ノ棄權若クハ私和ニ因リ

第三 破棄ス可カラサル者ト爲リタル裁判上ノ決斷ニ因リ

第四 期滿免除ニ因リ(治、第十條○草、自第十一條至第十七條○佛治、

第二條)

公訴ノ期滿免

第十條 犯罪ヨリ生スル公訴ノ期滿免除ハ期滿ス

第一 違警罪ナル時ハ六箇月ニ依リ

第二 輕罪ナル時ハ三箇年ニ依リ

第三 重罪ナル時ハ十箇年ニ依リ

新法

若シ期滿免除ノ期限カ犯罪ト起訴トノ間ニ布告セラレタル新法律ニ據リ増伸又ハ減縮セラレタル時ハ新法カ起訴ニ適用セラレ(治、第十一

總則

條○草、第二十九條、第四百八十四條○佛治、第六百三十七條、第六百三十八條、第六百四十條

私訴ノ期満免

第十一條 犯罪ヨリ生シタル私訴ハ其無能力者ニ屬スル時ト雖モ又民事裁判所ニ起サレタル時ト雖モ公訴ト同様ナル期限ニ依リ免除スル者トス

然レモ公訴ニ就キ却下サレタル裁判ニ因リ處刑アリタル時ハ私訴ハ則チ通常民事ノ期満免除ニノミ從フ者トス(治、第十二條○草、零○佛治、同上及第六百四十二條)

通常民事期満免除ノ場合

第十二條 公訴ノ期満免除ニ拘ハラズ通常民事ノ期満免除ノ期限滿チタル間ハ被害者民法ノ規則ニ循ヒ損害ノ賠償及ヒ返還ノ爲メ訴權ヲ保存ス然レモ舉ル所ノ過失ニ犯罪ノ性質ヲ附スルコト能ハス(治、零)

期満免除起算ノ點

第十三條 期満免除ノ期限ハ犯罪ノ行ハレタル日ヨリ其日ヲ込メ又

若シ犯罪カ連續セル時ハ其止ミタル日ヨリ其日ヲ込メテ起算スル者トス(治、第十三條○草、第二十一條○佛治、第六百三十七條)

期満免除ノ中斷

第十四條 公訴及ヒ私訴ノ期満免除ハ未ダ發覺セサルトモ犯罪ノ正犯及ヒ從犯ニ對シ及ヒ民事上責任アル人ニ對シ檢察官又ハ刑事裁判所ノ前ニ民事原告人トシテ訴へ出テタル被害者ノ起訴ノ總テノ手續ニ因リ又ハ豫審若クハ訴訟ノ總テノ手續ニ因リ中斷セラル可シ(治、第十四條○草、零○佛治、同上)

續キ

第十五條 若シ起訴、豫審若クハ訴訟ノ總テノ手續カ其法式ニ於テ無効ナル時ハ中斷ノ効ナキ者ト看做サル可シ然レモ檢察官豫審判事又ハ掛リ裁判所ノ管轄違ハ其手續ノ期満免除ヲ中斷スルヲ妨ケス(治、第

十四條○草、零○佛民、第二千二百四十六條及第二千二百四十七條)

續キ最長期限

第十六條 中斷ノ場合ニ在テハ期満免除ノ期限ハ確定ノ日附ヲ有ス

總則

ル起訴若クハ豫審ノ最後ノ手續ノ日ヨリ其日ヲ込テ何レノ場合ニ在
テモ第十條ニ定メラレタル期限ノ二倍ヲ超過スルヲ得ルヲナク起算
スル者トス(治、第十五條)

何時何人
續キ立ラリ申
ヤ

第十七條 公訴ノ期滿免除及ヒ犯罪ニ基ク私訴ノ期滿免除ハ訴訟ノ
如何ナル形状ノ時ニテモ確定裁判ニ至ルマテハ大審院タリトモ總テ
ノ裁判所ニ申立ラル、ヲヲ得

該期滿免除ハ檢察官ニ依リ被告人ニ依リ及ヒ民事上責任アル人又ハ
其代權者ニ依リ申立テラル、ヲヲ得

職權ヲ以テ許
與スル事

又掛リ裁判廳ニ依リ職權ヲ以テ許與セラル、ヲヲ得(治、零〇草、零〇佛
民、第二千二百二十三條及第二千二百二十四條)

被告人ノ損害
賠償

第十八條 免訴又ハ無罪ノ場合ニ在テ被告人ハ告發人、告訴人若クハ
民事原告人等ニ於テ若シ惡意又ハ重過失アル時ハ之ニ對シ損害ノ賠
償ヲ要ムルヲ得

償ヲ要ムルヲ得

處刑又ハ不問ノ場合ニ於テモ告訴人若クハ告發人ノ過失、犯罪事件ノ
重大ノ程度ヲ過度ニ致スニ在ル時ハ亦同シトス

若シ民事原告人、故障、控訴若クハ上告ニ依リ豫審若クハ公判ニ對スル
上訴ニ就キ敗訴シタル時ハ被告人ノ請求ニ因リ不當ナル該上訴ノ各
件ニ附キ被告人ニ及ホシタル損害ノ故ヲ以テ損害賠償ヲ科セラル、

百五十九條、第四百三十六條) 〇草、零〇佛治、第三百三十六條、第二百十二條、第三
十九條 前條ノ場合ニ在テ被告人損害賠償ノ訴ハ確定裁判ニ至ル

續キ、管轄

マテ刑事裁判所ニ起サル、ヲヲ得

該裁判後ニ在テハ無罪、不問若クハ處刑ノ言渡ヲ受ケタル被告人ノ訴
ハ民事裁判所ニ非スンハ起サル、ヲヲ得ス

總則

續キ

民事原告人ノ棄權ニ因リ起訴ノ拋棄若クハ事件ヲ繼續ス可キ理由ナ
 キ豫審判事ノ言渡アリタル時モ亦同シ（治、零〇草、第四條、第二百四十三條）
 第二十條 被告人ハ放免サル、トモ司法警察官吏、檢察官吏又ハ裁判
ナフヒシエ、ドボリフ、シエヂシエ、ルニミヌ、ツルヒエ、アリツグ、シユ
 官吏ニ對シ該官吏被告人ニ對シ刑法ニ據リ規定セラレタル犯罪ニ據
シユ
 リ有罪タルカ又ハ法律ニ據リ責任アリト認定セラレタル場合ニ非ス
 ンハ損害賠償ヲ要ムルコ能ハス（治、第十七條〇草、第五百七十五條、第五
 百七十六條〇佛治、第百十二條、第百六十四條）

訴訟期限計算
法

第二十一條 現法典ニ據リ定メラレタル期限ノ計算ニ附テハ前記期
カキユール
 滿免除ノ期限ニ關スルノ外期限ノ起算日ヨリ日子ヲ計算セス
 若シ最後ノ日カ適法ノ休日カ又ハ適法ノ定例若クハ臨時ノ祭日ナル
レザール、シユール、ド、ルボ
 時ハ期滿免除ニ關スルノ外期限ハ一日ヲ増展ス
ナルシール、エグストラール、シユール、シユール、ヘ、エ、エ
 若シ法律カーノ手續ト他ノ一ノ手續トノ間ニハ一日又ハ數日ノ期限

距離期限ノ
増展

ヲ守ル可キヲ命シタル時ハ日子ヲ計算スルニ齊整ナルヲ要ス
 一日ノ期限ハ二十四時ナリトス
 一箇月ノ期限ハ三十日ナリトス
 一箇年ノ期限ハ適法ノ曆ニ從ヒ計算ス（治、第十八條〇草、第十三條〇佛
 訴、第千零三十三條）
レザール、カラン、ドリ、エ
 第二十二條 適法ノ期限ハ期滿免除ノ期限ノ外日本ノ地内ハ陸地十
 里並ニ十里ノ端數ニ附キ一日ノ割合ヲ以テ距離ニ從ヒ増加ス
デ、ス、メ、ン、ス
 島地ナル時渡海ノ距離ハ航海ノ通常線路ニ從ヒ一日ニ附キ陸地里程
デ、ム、タ、ン、ス、フ、ラ、ン、シ、ル、リ、ギ、ユ、チ、ル、チ、ル、ド、ナ、ヒ、カ、シ、ヨ、ン
 五里ノ割合ヲ以テ計算ス
 若シ人又ハ書類ノ爲メ往復アル時ハ期限ハ二倍セララル可シ
ベル、ソ、ン、ヒ、エ、ス
 日本ト海外諸國間トノ距離ノ期限ハ特別ノ法律ニ據リ規定セララル可
 シ（治、第十九條〇草、零〇佛訴、第六十三條、第六十四條、第千零三十三條）

總則

第二十三條 訴權及ヒ上訴ノ執行ノ爲メ現法典ニ據リ定メラレタル期限ハ法律ニ據テ掲ケラレタル特例ノ外失權ヲ惹起ス(治第二十條)○草自第三百六十二條至第三百六十四條○佛訴、第千零二十九條

書類送達、書記ノ管轄

第二十四條 總テ現法典ニ訴訟關係人ニ向ヒ爲ス可キ書類送達ノ爲メ毫モ特別ノ管轄ヲ定メサル場合ニ在テハ該書類ハ書記ニ依リ作ラレ其交付ハ書記又ハ其責任ニテ書記局員ノ一人ニ依リ爲サル可シルミーズ若シ送達カ書類ヲ作リタル書記ノ管轄地外ニ爲サル、ヲ要スル時ハ之ヲ通常ノ法式ニ循ヒ交付セシムル爲メ其地方ノ書記ニ附託セラル可シ(治第二十二條)○草、第七十三條、第百四十七條

續キ起案交付

第二十五條 送達書類ハ二通ノ正本ヲ作り其一通ハ其所在何處タリトモ關係人ニ又ハ眞實若クハ撰定ノ住所ニ若シ其處ニ一人ノ親族、姻族或ハ雇人住居スル者アル時ハ交付セラル可シベルンヌ、エンブレツセー、レエール、エリニー、ドミンール、セルヒツトール

書類ノ交付ヲ受ケタル人ハ二通ノ正本ニ署名ス可シ而シテ署名ヲ拒絶シ若クハ不能爲ナルヲ認定シタル場合ニ於テハ此旨ヲ其書面上ニ記載ス可シ

若シ現住所不分明ナル時ハ送達ハ分明ナル最後ノ住所ニ有効ニ爲サル、可シエンコンニユー、コンニユー

若シ書類上ニ指名セラレタル人々ノ一人ニ交付セラレ得サルカ又ハ其之ヲ受取ルヲ拒絶シタル時ハ使丁ハ之ヲ其地ノ戸長ニ交付ス可シホルトヴィル戸長ハ之ニ其認印ヲ捺シ而シテ期限ナク之ヲ關係人ノ許ニ到着セシムル爲メ其權限内ニ於テ總テノ方法ヲ用フ可シモアイヤン

使丁ハ正本二通ニ書類ヲ交付シタル人並ニ交付ノ場所、日子及ヒ時刻ヲ附記ス可シリユー、シユール

都テ之ニ背ク時ハ無効タル可シ

第二ノ正本ハ送達書類ヲ宛タル人ノ需メニ應スル爲メニ保存セル所ノ書記局へ還付セラル可シ(治、第二十三條)

續キ、祭日

第二十六條 休日又ハ適法ノ祭日若クハ日出前又ハ日没後ニ爲サレタル送達ハ關係本人ニ爲シ是ニ由リ承諾セラレタル時ノ外無効タル可シ(治、第二十四條)○草零○佛訴、第千零三十七條

起案日、附、印

第二十七條 總テ公ケノ官吏ニ依リ作ラレタル書類ニハ其作ラレタル年月、日子ト場所トヲ記載ス可シ背ク時ハ無効ナリトス每葉ハ花押、番附セラル可シ

該書類ハ官吏之ニ署印シ其所屬官署ノ官印ヲ捺シ又ハ印紙ヲ貼付ス可シ

然レモ若シ書類カ公務外ニテ作ラレ又ハ印章毀壞喪失シタル時ハ押印ヲ妨ケタル原因ヲ記載セハ印章ナキモ無効ヲ致ス可シ無カル可シ

續キ、添記、塗抹

一己人ノ作リタル書類中ニハ印章アルモ其人署名スルコト能ハス若クハ欲セサルコトヲ認メタルニ非サレハ署名セサル可カラス此場合ニ於テ書類、公ノ官吏ノ面前ニテ作ラレサル時ハ一个ノ證人ヲシテ署名セシメ書類中ニ其介入ノ理由ヲ説明ス可シ(治、第二十五條)

第二十八條 豫審又ハ訴訟書類ノ正本若クハ謄本中ニハ公ノ官吏ノ作リタルト一己人ノ作リタルトヲ問ハス文字又ハ數字ノ添記ヲ爲ス可カラス轉行、轉字及ヒ塗抹ハ起案者ノ花押若クハ認印アル可シ否ラサレハ改竄ハ無効ト看做サル可シ

制裁

塗抹ノ文字ハ讀得可キ様ニ存シ而シテ其字數ヲ記載ス可シ都テ背ク時ハ起案者若クハ謄寫人公ケノ官吏ナレハ二圓以上十圓以下ノ罰金及ヒ訴訟關係人ニ對シ民事上ノ責任ヲ科セラル可シ以上ノ規則ノ違背ノ爲メニ不規則ナル書類ノ謄本ニハ特別ニ該不規則

要旨

更迭條例

則ヲ記載ス可シ(治、第二十六條)

第二十九條 現法典ノ布告前ニ行ハレタル犯罪ハ其條例ニ循ヒ審案
裁判セラル可シ ザスホシシヨ

然レモ既ニ適當ニ爲サレタル訴訟ノ手續ハ維持セラル可シ(治、第五條、

第二十七條○草、第十條、第五十八條○佛民、第二條佛刑、第四條)

特別犯罪
特別法律

第三十條 豫審公判共特別ノ法律ニ據リ規定セラル、所ノ特別ナル
犯罪ハ之ニ循フヲ繼續ス可シ

新法

特別ノ犯罪ニ就キ將來制定セラル可キ新法ニ至テハ若シ該法中明白
ニ改正セラレサル時ハ現法ノ條例ニテ補填セラル可シ(治、第二十八條
○草、零○佛治、第六百四十三條)

要旨

第一條

第九號 犯罪

第十號 公訴附往古羅馬ノ民訴ノ事

第十一號 檢察官附日本ニ於テ之ヲ設ケタル事

第十二號 公訴ノ提起ト其實行トノ區別

第二條

第十三號 私訴即チ民事ノ訴ノ二箇ノ目的

第十四號 返還及ヒ賠償ハ刑罰ニ非サル事

第三條

第十五號 公訴ノ獨立附其理由

第十六號 例外ノ場合附其理由

第四條

要旨

第十七號 刑事裁判所ノ民事ノ管轄附其理由

第十八號 例外ノ場合附其理由

第十九號 民事管轄ノ制限ニ附キ二箇ノ例外

第五條

第二十號 刑事ハ民事ヲ中止スルトノ規則

第二十一號 規則ノ制裁、三個ノ設例

第六條

第二十二號 一路撰擇云々ノ古法言附佛國ニ於テ其餘波ノ及ヒタル點

第二十三號 日本ニ於テ之ヲ斟酌シタル事、二箇ノ適用

第二十四號 制裁及ヒ種々ノ設例

第七條

第二十五號 民刑二個ノ責任ノ不羈ナル事

第二十六號 免訴、放免、不問

第二十七號 右三者ハ民事上ノ責任ニ餘地ヲ遺ス事

第二十八號 刑事上ノ寛宥ナル決定民事上ノ寛宥ナル決定ヲ惹

キ起ス場合

第二十九號 民事裁判所ノ特別ナル管轄

第八條

第三十號 公訴ノ消滅及ヒ其結果〇六個ノ制限

第三十一號第一 被告人ノ死去附刑罰ノ一身上ニ止マル事並ニ

瘋癲ノ場合、有夫姦ノ場合附共犯ノ死去

第三十二號第二 被害者ノ棄權若クハ私和

第三十三號第三 既決裁判ノ効力

第三十四號第四 刑罰ノ廢止

第三十五號第五 特赦

第三十六號第六 期滿免除

第九條

第三十七號 私訴ノ消滅ノ四个ノ原因附被害者死去ノ場合ニ附
テノ區別

第十條

第三十八號 期滿免除ノ期限

第三十九號 新法ノ効

第十一條

第四十號 公私兩訴ノ期滿免除ノ同一ナル事

第四十一號 幼者犯罪ニ因リ害セラレタル場合

第四十二號 刑事ノ處斷ノ後私訴ノ期滿免除ノ事

第十二條

第四十三號 通常民事ノ期滿免除ニ循フ可キ特別ナル場合

第十三條

第四十四號 起算ノ日、結算ノ日

第四十五號 繼續犯罪、連續犯罪

第十四條

第四十六號 期滿免除ノ中斷附其中止ト異ナル所以ノ事

第十五條

第四十七號 前條ノ續キ、法式ニ於テ無効ナル手續管轄違ノ爲メ
無効ナル手續

第十六條

第四十八號 前條ノ續キ、最長期限

第十七條

第四十九號 期滿免除ノ公安ニ基ク事、其結果

第十八條

第五十號 免訴、放免、不問ヲ言渡サレタル被告人ノ損害賠償並ニ告發人又ハ告訴人ノ惡意、重過失ノ事、故ナキ上訴ノ事

第十九條

第五十一號 此種ノ損害賠償ニ就キニ様ノ管轄

第二十條

第五十二號 惡意若クハ重過失ノ場合ノ外裁判官ノ民事上責任ナキ事

第五十三號 書記ノ責任

第二十一條

第五十四號 訴訟期限ノ計算附時刻、整日、祭日ノ事

第二十二條

第五十五號 距離ニ從ヒ期限ヲ増展スル事、日本地内並ニ外國地方ノ事

第五十六號 期滿免除ノ事、期限ノ増展ナキ事

第二十三條

第五十七號 期限ハ概シテ精密ニス可キ事

第二十四條

第五十八號 書類送達ノ爲メ擔保ノ必要ナル事附佛國ノ使吏ノ事

第五十九號 日本ニ於テ書記ヲ用フル事、例外ニ公力者ヲ用フル

事

第二十五條

第六十號 正本二通タル可キ事、其一通ヲ交付スル事附種々ノ場合
第六十一號 制裁則チ無効並ニ書記ノ責任

第二十六條

第六十二號 扣除ノ時日

第二十七條

第六十三號 日附、署名、公私ノ印章

第二十八條

第六十四號 書類變造ニ對スル防備

第二十九條

第六十五號 更迭條例、訴訟ノ法律ハ其布告ノ時ヨリ起ツテ實施

スル事附刑法ト異ナル事

第三十條

第六十六號 特別ノ犯罪ニ附テハ舊特別法ヲ用フ可キ事○新法

第一條

〔第九號〕 刑法ハ其第一條ニ於テ犯罪ヲ義解セリ○故ニ此ニハ唯、犯
罪トハ法律上明カニ刑罰ノ制裁ヲ規定シ以テ禁止シタル總テノ所
爲ナリト謂フヲ以テ足レリトス エンブラクシヨシ
バイマ サンクシヨシ
犯罪ナル語ハ其意義汎博ナリ法律ニ於テ重罪、輕罪及ヒ違警罪チ一
語ニ約言セント欲スル時ニ此語ヲ用フルナリ
〔附言〕 犯罪ノ語ハ元ト拉丁語「エンフランジュレ」(破フル)ニ由來ス
蓋シ法律ヲ犯シ之ヲ破フルノ義ナリ

以下新法トアルハ總則ノ誤

新法

總テ犯罪ハ必ス社會ヲ傷害スル者ナリ然ラサレハ法律之ヲ刑セサル可シ○若シ其爲事多少道德ノ規範ニ悖戻スルノミニ止マリ敢テ社會ノ害惡ナキ時ハ法律ハ其制裁刑罰ヲ犯人ノ本心ト公衆ノ貶黜凌辱トニ任ス可キノミ○然レハ社會即チ公衆ノ利益ヲ傷害シ世安ヲ騷擾シ秩序ヲ攪亂シ惡徳ヲ流布シ民庶ヲ恐怖セシムル時ハ則チ法律ハ犯罪ノ輕重ニ應シテ外部ノ刑罰ヲ施シ犯人ノ爲メ再ヒ同一ノ所爲ヲ致スヲ防キ併セテ之ニ倣ハントスル者ヲ警戒ス

此旨趣タル既ニ刑法註釋ノ卷首ニ於テ其理由ヲ説明スルニ方リ充分ニ敷衍續釋セリ

〔第十號〕凡ソ一罪ヲ犯ス者ハ法律ニ據テ定メタル刑罰ヲ受ク可シ然レハ此刑罰タル裁判ニ依ルニ非スンハ犯人ニ科スルヲ能ハス而シテ此裁判ハ管轄裁判所ニ依ルニ非サルヨリハ其言渡有効ナルヲ

得ス又概シテ此裁判ニ先タツニ特別ノ裁判官ニ任シタル審理即チ

豫審ヲ以テシ論告人ト被告人トノ間ニ自由ナル對辦ヲ爲サシメ犯

エンストリニシヨシヨシトワール アツキニザトワール アツキニエ

罪ノ證據ヲ提供シテ之ヲ論議シ又屢駁撃ヲ爲サシムルヲ要ス

此刑事ノ訴訟ハ一ノ訴權ニシテ之ヲ行フヤ社會ノ名義ヲ用テシ之

カ爲メニスル所ハ社會ノ公益ナリ故ニ之ヲ名ケテ公訴ト謂フ

往昔諸邦中殊ニ希臘及ヒ羅馬ノ如キニ於テハ公訴ノ權ハ其國民ニ

屬シ各人之ヲ行フヲ得タリキ是ヲ以テ此訴ヲ稱シテ民訴ト謂ヘ

リ○是時ニ當テヤ近世ノ歐洲諸國ト異ナリ今日日本ニテ設定シタ

ルカ如キ公衆ノ名義ヲ以テ此權ノ執行ヲ專任セラレタル裁判官ハ

未ダ曾テ有ラサリキ是レ此裁判官ニ「ミニステール、ビユブリツク」ニ

ノ職掌ト云フノ意ナリ之ヲ邦語ニ譯シテ檢察官ト謂フノ名アル所

以ナリ○然ルニ此民訴ニハ二箇ノ危險ナル弊害アリ一ハ則チ國民

ノ疎畧畏懼若シハ私情ニ因リ訴訟ヲ起サ、ルト一ハ則チ私利ニ出
テ猜疑ニ因リ報讎ニ基ツキ誣告ヲ行フニ非サレハ則チ輕忽ニ因テ
庸愆ヲ行ヒタルト是ナリ

又暴行ヲ用ヒサル盜罪、罵詈、所有權ヲ害スル罪等ノ如キ至重ナラサ
ル場合ニ在テハ訴權ハ民有チ離レテ私訴ト成リ特ニ被害者ノミニ
屬シ刑罰モ亦都テ贖罪ニ止リ之ヲ利スル者亦被害者ノミナリキ
其後羅馬帝國瓦解スルニ及テ其跡ヲ襲キタル蠻民モ亦撰テ此贖刑
ヲ採リ遂ニ其極端ニ走り私罪ナレハ極メテ至大ナル者ト雖モ猶ホ
之ヲ贖フヲ得セシメ施體ノ刑ヲ適用セシハ唯^{バイヌコルボレル}支辨シ難キカ又ハ公
安ヲ害スルノ罪ノ場合ノミニ限リタリ
是等ノ場合ニ在テモ其所爲確的ナル時即チ現^{セル}行^{フラクラン}犯ナル時ハ何人タ
リトモ告發スルヲ許シ加之裁判官ノ職權ヲ以テ訴ヲ起スヲ允

セリ

〔第十一號〕 歐洲諸邦就中佛國ニ於テ檢察官ノ創設アリシハ耶蘇紀
元十六世紀ノ頃ナリ

英國ニ於テハ未ダ此制度有ラサレトモ既ニ其法律ノ瑕瑾ナルヲチ
覺リ之ヲ補填セントスルノ氣運ニ趣ケリ

日本ニ於テモ亦近時此制度ヲ創設シ其趣旨歐洲ニ於ケル者ト同一
ノ職ヲ行ハシメントスルニ在ルカ如シ則チ該官吏ニ委任シタル公
訴ハ之ヲ行フヤ被害者ノ訴訟ヲシテ不當ナラシム可キ私情、私利ヲ
離レ不羈鞏固タル可キ者トス

第一條ニ曰ク公訴ハ法律ニ據リ定メラレタル區別ニ循ヒ檢察官吏
ニ依リ行ハルト

其所謂ル區別ナル者ハ以下順次ニ之ヲ見ル可シ

故ニ今此ニハ只一言ス可キ者アルノミナリ即チ該官吏タル諸裁判所ニ附屬シ其裁判所ノ等級ニ應シ各等級アツテ各自其裁判所ノ管轄區域ト追躡ス可キ犯罪ノ性質トニ依リ定メラレタル其行權ノ範圍ヲ踰越ス可カラサル者トス

法律ハ今故ラニ或ル特殊ノ事件就中税關或ハ租税ニ關スル犯罪ノ如キ公訴ヲ行フ者國庫ノ特別ノ官吏タル場合ニ就キ例外規則ノ事ヲ謂ハス○蓋シ法律ノ此ニ規定スル所ノ者ハ普通法ナリ若シ夫レ現法典ト牴觸スル特別法ノ適用ノ如キハ第三十條ニ至テ之ヲ規定セリ

〔第十二號〕 猶ホ此ニ一ノ較困難ナル論點アリ即チ公訴ノ提起ト其實行トノ區別是ナリ

公訴ノ提起トハ公訴ヲ裁判所ニ附シ之ヲ其裁判ニ任スルノ所爲ヲ

謂ヒ實行トハ公訴ノ趣旨ヲ貫徹セシメテ目的トスル訴訟ノ諸手續ヲ總稱スル者トス

法律ノ今此ニ規定スル所ノ者ハ公訴ノ實行ニシテ未ダ實行セラレズ止タ提起セラレタルノミノ場合ハ以後ノ條項ニ至テ自カラ明晰了然スル所アル可シ(就中第二百二十五條以下ニ就テ見ル可シ) 裁判所ノ公訴ヲ受ケルヤ四个ノ主タル方法ニ依ル

〔附言〕 茲ニハ送付ノ言渡ニ依リ裁判所ニ訴ヲ附スル場合ヲ記載セス是レ既ニ訴ヲ受ケタル裁判所アリテ只管轄ヲ定ムルニ過キサレハナリ

第一 檢察官ノ起訴ニ依リ○抑檢察官ハ犯罪ヲ訴ヘ併セテ之ヲ證明スルノ手續ヲ行フカ故ニ此場合ニ於テハ公訴ノ提起ト實行ト並ヒ生スル者トス

第二 犯罪ニ因リ害ヲ被リタル者ノ民事上要償ノ訴ニ依リ○此場合ニ於テハ公訴提起シラレテ裁判所ニ於テハ犯罪ヲ證明スルノ任アリト雖モ檢察官被告人ニ對スル其意見ヲ陳シテ裁判ニ干涉セサル以上ハ未ダ公訴ノ實行アラサル者トス

第三 現行犯罪即チ裁判官其任ヲ受ケサルモ之ヲ覺知スルニ於テハ自カラ受理スルコトヲ得可キ事件ニ依リ○此場合ニ於テモ亦公訴ハ未ダ實行シラレス止提起シラレタルノミ其實行ハ前段ノ場合ト等シク檢察官ノ意見ヲ開陳スルヲ待テ起ル者トス

第四 檢察官ノ起訴ヲ爲サス而シテ其事件ノ重大ナル時ハ控訴裁判所ノ彈劾ニ依リ○該處分タル眞ニ例外タル者ニシテ其詳細ト理由トノ若キハ第二卷第四章(第二百九十二條及第二百九十三條)ニ至テ説明セン○此場合ニ於テハ公訴ノ提起ト實行ト並ヒ生シ起訴ノ

ハ控訴裁判所ヨリ其裁判官ノ一人ニ委ヌル者トス

〔附言〕 高等法院モ亦其管轄内ノ事件ニ附テハ彈劾ヲ行フコトヲ得

(第百條)

以上第二及ヒ第三項ニ規定セシ場合ニ在テモ檢察官ハ他ノ場合ト等シク必ス其意見ヲ披陳ス可シ假令ヒ自カラ之ヲ陳ヘサルモ訴訟審理中若シハ其將ニ之ヲ終結セントスルニ方リ裁判官ヨリ其意見ヲ諮問スヘケレハナリ然レモ該陳述ハ多少被告人ニ不利ナル時ニ非スンハ敢テ公訴ノ實行ヲ生スルコト莫シ○若シ之ニ反シテ檢察官免訴又ハ放免ス可キ旨ヲ決スル時ハ則チ公訴ノ理由ナキ者トスルヲ以テ亦其實行アラサルナリ○又事件落着ニ附テ裁判所モ賢察ト着實トモ信任スル旨ヲ申立ル時ハ亦公訴ノ實行ナキ者トス
都テ此等ノ場合ニ在テハ公訴ハ敢テ實行セラレサレトモ既ニ提起

セラレタルヲ以テ必ス之ニ對シ裁判ヲ言渡ス可キ者ナリトス

○ 第二條

〔第十三號〕 時ニ依リ毫モ私利ヲ害セス止タ公益ノミヲ害スルノ犯罪アリ彼ノ國事犯ニ係ルノ罪即チ暴動及ヒ叛逆ノ如キ又ハ公益ニ關スル重輕罪ノ過半即チ官命抗拒貨幣贗造ノ如キ及ヒ刑法第二卷ニ規定シタル官吏ノ或ル犯罪等是ナリ○是等ノ犯罪ハ單ニ一ノ公訴ヲ生スルノミナリトス

然レモ犯罪ニハ私益ヲ併シ害スル者多シトス一個人ノ身體若クハ財産ニ對スル重輕ノ諸罪ハ即チ此場合ニ屬スル者トス故ニ是等ノ犯罪ハ二个ノ訴權ヲ併シ生ス其一ハ則チ法律ニ定メタル刑罰ノ適用ヲ旨トシ且ツ社會ノ爲メハ只一ノ満足ナリトシテ之ニ屬シ其名義ヲ以テ檢察官ノ行フ所ノ公訴トシ又其一ハ則チ犯罪ニ因リ害ヲ

受ケタル一己人ニ屬シ其人ノ行フ所ノ私訴ナリトス

夫レ此私訴ハ何レノ點ニ就テモ大約チ民法ノ規則ニ循フヲ以テ之

ヲ稱シテ民事ノ訴ト謂フ

アウシヨシ、シヒール

私訴ノ目的ハ一言以テ其本旨ヲ示スニ足レリ曰ク釀生シタル損害ハ賠償ト然レモ法文ニハ更ニ告訴人ノ不正ニ横奪セラレタル物件ハ返還ノ一句ヲ加ヘタリ○然レモ此事タル贓物其體質ヲ變セスシテ現存スル場合ヲ慮リタルニ因ル若シ其既ニ現存セサルニ於テハ相當ノ價銀ヲ以テ其損害ヲ賠償ス可シ

凡ソ何レノ時代何レノ邦國ヲ問ハス一般ノ習慣ニテ身體財産ニ及ホシタル損害ハ勿論榮譽上ノ損害ニ於ケルモ猶ホ之ヲ償フニ金銀ヲ以テスルヲ簡易確的ノ者トセリ蓋シ是等ノ損害ハ其歸スル所概チ金銀上ノ損害トナルヲ以テ之ヲ抵償スルニモ亦等シク金銀ヲ以

テスルハ勢ノ然ラシムル所ナリ○其評定估計ノ如キニ至テハ較_ト困
難ナル可シト雖モ是レ裁判所ニ於テ審カ_ニ訴訟關係人相互ノ辯論
ヲ聰明シテ然ル後チ行フ所ノ職掌ナリトス

〔第十四號〕抑_ト民事上損害ノ賠償ハ之チ一ノ刑罰ナリト看做ス可カ
ラス若シ羅馬時代ノ如ク許多ノ場合ニ於テハ罪人ハ其醸生シタル
損害ニ二倍三倍若クハ四倍シテ賠償ヲ爲ス_トチ要スル者トセハ則
チ之チ刑罰ト謂フチ得可シ○然レモ今日ニ至テハ被害人其被リタ
ル横奪ニ應シ精確ニシテ且ツ適當ナル價格ヲ要ムルチ得可キノミ
夫レ其賠償ヲ要ムルノ權ハ凡_ソ他人ニ損害ヲ加フルノ所爲アラハ
則_チ之チ醸生シタル過アル者チシテ之チ賠償スルハ責任ヲ負ハシ
ムト云ヘル彼ノ有名ナル民法ノ元則ニ依ル者ナリ(歐洲諸法典中摸
倣セシ者多キ佛民法第千三百八十二條チ看ル可シ)

第三條

〔第十五號〕本條ハ公訴ノ獨立ト稱シテ有名ナル原則チ揭示ス
實際上ヨリ觀察チ下スニ一個人ニ對スル犯罪ニ附テハ概チ被告人
ノ官ニ告訴スルコ_ニ賴ツテ始メテ能ク檢察官之チ覺知シ公訴チ行フ
ノ方法チ得ル者トス然リト雖モ若シ檢察官ニ於テ他人ノ告發現行
犯公衆ノ風評等ノ如キ他ノ方法ニ依テ犯罪アリシ_トチ覺察シタル
時ハ則チ公訴チ提起シテ結局ニ至ルマテ之チ實行スル_トチ得○是
レ即チ本條ニ定ムル所ノ規則ナリトス(看第百六條)○此規則タル已
ニ前段ニ開陳シタル如ク社會ハ一個人ト等シク犯罪ニ因リ害チ受
クル者ナリ左レハ被害者畏懼若クハ愛情等ニ因リ暗黙隱庇シ若ク
ハ其訴權チ拋棄スレハトテ決シテ之カ爲メ社會ノ訴權チ湮滅セシ
ムル如キハ有ル可カラス是レ此理由チ推シテ之チ考フレハ自カラ

其趣旨ヲ明ニスルヲ得可シ
然レモ檢察官ノ公訴ヲ行フニハ必ス告訴ヲ俟ツヲ要スル場合アリ
本條之ヲ豫定ス

蓋シ或ル場合ニ於テハ社會ノ損害實ニ些少ニシテ起訴ノ公行却テ
徒ラニ衆庶ノ奇ヲ好ミ譏ヲ喜フ者ノ口實ヲ爲シ隨テ一家親族ノ安
穩ヲ傷ヒ其損害ヲシテ一層大ナラシムルニ至ルヲ顧慮シタレハナリ

〔第十六號〕 刑法草案中該變則ノ最モ著シキ場合ハ猥褻(第三百九十
條)有夫姦(第三百九十三條)讒謗(第四百三條)財產ニ對シ僅少ナル二三
ノ損害(第四百七十三條)及ヒ罵詈(第四百七十六條)第二十項並ニ第二
十一項ノ重輕罪等ナリトス

尙ホ一個ノ告訴ヲ要スル場合アリ其理由ハ前段ト同シカラス則チ
外國ニ在テ犯シ日本法ヲ以テ罰ス可キ重輕罪ノ場合はナリ(刑法第

五條第四項)蓋シ此場合ニ於テハ被害者ノ告訴ナケレハ或ハ證據ニ
乏シク或ハ處斷ノ理由トスルニ必要ナル明白ヲ缺ク有ルヲ恐ル
ルカ故ナリ

日本ニハ是等ノ變則ヲ設クルコト多カラスト雖モ諸外邦ノ新法殊ニ
伊太利ノ如キハ較之チ増加スルノ傾向アリ

〔附言〕 獨リ獨乙法ノミ始メ此變則ヲ設ケテ其度ニ過クルカ如ク
ナリシモ近時ニ至テハ却テ稍之ヲ減少スルニ至レリ
以下公訴消滅ノコトヲ論スルニ方リ是等例外ノ場合ニ附テ更ニ說ク
所アラントス(第八條)

第四條

〔第十七號〕 夫レ私訴ハ原ト刑事ノ訴ニ非ス民事ノ訴ナルカ故ニ民
事裁判所へ起スハ本然至當ノコトナルノミナラス亦該裁判所へノミ

起ス可キ者ナルカ如シ然レモ實際上事務處分ノ速了及ヒ簡單ト費用節減トノ利益ヲ量カリ刑罰ノ適用ヲ命セラレタル裁判所即チ刑事裁判所ニ起スヲモ允准シタリ○蓋シ刑事裁判所ニテハ犯罪事件ノ諸證左チ採聚シ併セテ其加重減刑ス可キ模様ヲ熟知スルカ故ニ被害者ニ與フ可キ民事上賠償ノ多寡ヲ評定スルニ必要ナル諸元素^{エレメン}ヲ有スレハナリ

加旃民刑裁判所合併ノ結果トシテ同一ノ裁判官民刑兩事ヲ併セ裁判スレハ(第三十一條)二个ノ利益ヲ裁判スルニ之ヲ分ツテ止メ之ヲ共コスルモ毫モ患フ可キノ障礙アルコトナキハ後段ニ至テ會得スル所アル可シ

且ツ又被害者ハ其民事上ノ利益ノ爲メ犯罪ノ成立ト其輕重トヲ證明スルノ任アルニ因リ公訴ノ爲メニ頗ル助ヲ爲ス可シ○然リト雖^{グラヒエ}

モ被害者ハ決シテ刑罰ノ適用ヲ請求スルノ權アルコトナク若シ公訴實行中濫リニ此種ノ干渉ヲ爲スコトアラハ直ニ之ヲ禁止ス可シ被害者ノ公訴ニ關係スルハ單ニ附帶附從ノ所爲ニ過キササルノミ然リト

雖モ公ケノ損害ヲ賠償スルニ於テ裨益ナキニ非サルナリ

斯ノ如ク民刑兩訴ノ合併スルハ立法官及ヒ裁判官ニ對シテ頗ル困難ナルコト有リ○草案ニハ成ル可ク此事柄ニ關シテ優美ナル良法ヲ決定メンコトヲ勉メタリ○是ヲ以テ諸外國ニ於テ研究セル所ヲ斟酌セリ○殊ニ民事原告人ノ任ハ秋毫モ晦澁疑惑ヲ遺スコトナキニ注意シタリ○此事ニ就キ以下復タ之ヲ説明スル時機アル可シ

〔第十八號〕本條ニモ亦私訴ヲ刑事裁判所へ起スコト能ハサル例外ノ場合アルコト言ヘリ○其場合ハ民律、軍律中ニ在リ又恐クハ行政法中ニモ之レ有ルナラン

佛國ニ於テハ人ノ身分ニ關スル諸件ハ重罪又ハ輕罪ニ關係スルモ
 民事裁判所ニ依ルコト非スベルソンヌ、エグ、シビールハ裁判スルコトヲ得サル者トス○例之ハ
 幼者ノ身分ニ附キアシユ（其年齡其血統又ハ其國籍）詐欺又ハ刪除ニ因テ簿
 籍ノ變更セラレタルコト方リ其真正ノ身分ニ復歸セシムルハ刑事裁
 判所ノ與テ言渡スコトヲ得ル所ニ非ス（民法第三百二十六條、第三百二
 十七條）○又海陸軍ノ裁判所ニテ審判ス可キ重罪ニ由リ常民ヲ害シ
 タル時モ民事上ノ賠償ニ就テハ刑事裁判所之ヲ判定スルノ權力ナ
 シ蓋シ該裁判所ヲ組織セル海陸軍ノ士官ハ軍律ノ背反ヲ審理スル
 ニハ固ヨリ當然ノ管轄ヲ有シ其科スルニ刑罰ヲ以テスルハ實ニ容
 易ナル可キモ民事上損害賠償ノ評定ヲ爲スニ至テハ自カラ特殊ノ
 知識ヲ要スル者ナルコト是等ノ官吏ハ間、此才識ニ乏シキコトアレハナ
 リ

行政事務ニ係ル犯罪トハ國庫ノ會計吏、官金竊取ノ罪ノ類ヲ謂フ
 佛國ニ於テ會計官吏其所管ノ事件ニ關シ罪ヲ犯ス時ハ其職掌ノ故
 ナリテ該管ナル會計法院ノ審案辦理ヲ受ク○故ニ該官吏官金竊取ノ
 訴ヲ被フルコト方リ其果シテ政府ニ對シ負債者ナルカ又其金額ノ幾
 何ナルカヲ斷定スルハ輕罪裁判所ノ任ニ非サルナリ○右ノ場合ニ
 於テハ二個ノ變則アリ則チ右ノ問題タル行政裁判所ニ於テ決スル
 ノミナラス起訴ニ先テ豫メ之ヲ斷定スルヲ要スルコト是ナリ是レ第
 五條ニ公訴ハ最先ニ裁判ス可シト謂ヘル普通法ノ一變則ナリトス
 右ノ例外タル未タ日本ニ於テハ明カニ規定スル所ニ非スト雖モ其
 他ノ變則ト等シシ私訴ノ裁判ヲ專ラ刑事裁判所ニノミ任スルヲ以
 テ定則トセサルハ是レ尤モ緊要ノコトナリトス
 （第十九號）本條ノ解釋ヲ終ルニ臨テ一ノ注意ヲ喚起ス可キ者アリ

即チ本條ニ據ルニ刑事裁判所ニ民事ノ管轄ヲ屬スルヤ要償ノ多寡
 ヲ問ハサル旨ヲ示セリ是レ通常民事ノ制限ニ比スレハ二个ノ例外
 タル者トス○治安裁判官ハ控訴ヲ允シタル事件ニ附テモ猶ホ民事
 ニ關シテハ其權限甚ク狹少ナルニ違警罪裁判官ノ名義ニ就ク時ハ
 一層重大ナル要求ニ附テ裁斷スルヲ得可シ然レモ要償ノ額通常
 民事ノ終審裁判タル可キ金員ニ超過スル時ハ則チ其裁判ニ對シテ
 控訴スルヲ得アン、ブルニエー、ルソール第四百三條第三項○又犯罪ノ賠償タル以上ハ些少
 ノ金額タリトモ輕罪裁判所ニ於テ裁判スルヲ得可シ但シ此際ニ
 在テハ控訴ヲ爲スヲ能ハサル者トス

第五條

〔第二十號〕 前條ヲ敷衍シテ其結果ヲ考フルニ一犯罪ヨリ生シタル
 二个ノ訴ニシテ或ハ共ニ同一ノ裁判所即チ刑事裁判所ニ起サル、

トアリ或ハ分レテ二个ノ各異ナル裁判所ニ起サル、トアリ○是チ
 以テ二个ノ訴其孰レチカ先ニ裁判ス可キハ法律ニ於テ明カニ定メ
 サル可カラサル所ナリトス
 若シ刑事裁判所獨リ二个ノ訴ヲ併セ受理シタルニ於テハ公訴ヲ先
 ニ裁判ス可キハ蓋シ言ヲ待タシテ明カナリ之ニ反スル如キアラハ
 結果ヲ以テ原因ニ先タ、シムル者ニシテ條理ニ背馳スルノ所爲ナ
 リト謂ハサル可カラス抑、被告カ損害ヲ賠償スルノ任アルハ偏ヘニ
 犯罪ヲ行フタルニ因ル○故ニ犯罪ナル者ハ必ス私訴ニ先テ之ヲ證
 明シ之ヲ認定シ之ヲ裁判セサル可カラス
 然レモ二个ノ裁判所各自一个ノ訴ヲ受理シタル時ハ最先ニ受理シ
 タル者コソ最先ニ裁判ス可キニ似タリ○然リト雖モ法律ハ被告ノ
 利益ヲ量テ之ヲ禁止セリ蓋シ私訴先ニ裁判セラレテ其末原告ヲ直

トスル時ハ刑事裁判所ニ於テ被告ニ對シ有罪ノ推測ヲ下シ犯罪ノ嫌疑ヲ被ラシメ檢察官ハ之ヲ以テ一ノ證據トナシ殊ニ同事件ニ就テ下シタル裁判タルノ故ヲ以テ其力モ一層強大ナルノ弊アル可キナリ○是レ刑事ハ民事ヲ抑止ストノ有名ナル法言ノ由テ來ル所以ナリ蓋シ之ヲ中止スルヲ謂フ

〔第二十一號〕抑本條ノ制規ハ原ト被告保護ノ便利ヲ旨トシテ設ケタル者ナレハ則チ亦公益ヲ旨トシタル者ト看做サ、ル可カラス然ラハ則チ其結果タル檢察官及ヒ被告ヨリ原告ニ至ルマテ何人ニテモ之ヲ申立ツルヲ得ルモノトス又民事裁判所ニ由リ職權ヲ以テ適施スルヲチモ得可シ

然リト雖モ民事裁判所其申立ヲ受ケス又ハ同事件ニ就キ既ニ公訴ノ審判中ナルヲチ知ラスシテ私訴ニ就キ敢テ猶豫ヲ爲サス遂ニ其

裁判ノ宣告ヲ先ニスルヲ有ル可シ○此際ニ於テハ法律ノ制裁如何ナル可キカ本條ニ其答案ヲ掲ケ一ハ直接ニシ一ハ間接ニセリ

〔甲〕民事上ノ罰アリタル後刑事上ノ罰アリシ時ハ二者共ニ無効タル可シ蓋シ刑事ノ罰ノ無効タルハ或ハ民事ノ罰ノ影響ヲ被ムリ又ハ之ヲ被ムルヲ有ル可キノ恐アルニ因ルナリ又民事ノ罰ノ無効ニ屬スル所以ハ假令ヒ一旦刑事ノ處斷ヲ破棄スルモ若シ之ヲ保守スルニ於テハ同一ナル影響ヲ及ホシ同般ナル弊害ヲ生シ前ノ刑事ノ破棄ハ空シク徒勞ニ歸スルノ患アルカ故ナリ○斯ノ如ク法律ノ趣意ニ戻リタル民事並ニ刑事ノ兩處斷ハ其犯罪違警罪裁判所カ又ハ輕罪裁判所ニ於テ裁判セラレタル時ハ控訴ニ依リ又重罪事件ニ涉ル時ハ上告ニ依テ無効トナスヲ得ル者ナリ(參看第五百三十二條第五項)

以上法律カ直接ニ下ス所ノ答議ナリトス

又反對ノ場合ニ就テハ反對辯難ヲ設ケス間接ノ答議ヲ得左ノ如シ

アルキユマンア、コントラリオ

〔乙〕刑事上ノ罰アルモ民事上ノ罰ナケレハ刑事上ノ罰民事ノ處斷ト共ニ維持セラル可シ何トナレハ民事ノ處斷被告人ニ利ナルカ故ニ毫モ被告ニ損害ヲ及ホスヲ能ハサレハナリ

〔丙〕民事上ノ罰アリタル後公訴ニ附キ放免ノ言渡アリタル場合ニ在テハ亦兩裁判共ニ相因テ維持セラル可シ蓋シ放免ノ言渡タル其初メ影響ヲ受クルノ恐アリシモ後却テ正當ニ宣告セラレ又民事ノ判決ハ充分獨立ノ位地ニ在テ宣告セラレタルニ因ルナリ

第六條

〔第二十二號〕 本草案ハ佛國其他諸邦ニ於テ今日ニ至ルマテ尙ホ論辯シテ已マサルノ諸問題ノ總體ヲ此ニ明說斷定ス
アンソラブル

抑、被害者ハ其民事ノ訴ヲ起スニ附キ二个ノ裁判所中之ヲ擇取スルノ權ヲ有スレトモ決シテ二个ノ裁判所へ同時ニ起スヲ能ハサルナリ然レモ一旦其採擇ヲ爲スニ及テハ復ヒ之ヲ翻轉スルヲ能ハサルカ是レ論定セサル可カラサル所ナリ

古ヨリ羅馬法ヲ模範トシシ諸國ニ於テ行ハレタル古法言ニ採擇ハ翻轉スル能ハサル旨ヲ謂テ曰ク被害者一途ヲ擇メハ復ヒ他ノ途ニ就クヲ能ハスト

佛國ニ於テハ此法言ハ僅ニ其一部ノミヲ採用シタリ○蓋シ法律ニハ正條ナシト雖モ裁判事例ニ於テ見ル所下ノ如シ訴訟ヲ起スヤ先キニ刑事裁判所ニ於テシタル時ハ普通法ニ適シ且ツ被告人ニ對シ較寛ナルノ裁判應ナリトシテ猶ホ之ヲ民事裁判所へ移スヲ得之ニ反シテ訴ヲ起スヤ先キニ民事裁判所ニ於テシタル時ハ反對ノ理由

ニ據リ復ヒ之ヲ刑事裁判所へ移スヲ得ス但、當初被害者ニ於テ賠償ヲ請求スルノ事爲犯罪ノ性質アルヲ知ラサリシ時ハ格別ナリトス

〔第二十三號〕 第一ノ點ニ就テハ日本法案ハ佛國法ト全ク其趣旨ヲ異ニシテ佛法ノ許ス所ヲ禁止シ第二ノ點ニ至テハ其例外ノ性質ヲ變シ大ニ之ヲ擴充シタリ左レハ

第一 被害者先キニ刑事裁判所へ起訴シタル時ハ復ヒ民事裁判所へ出訴スルヲ能ハス何トナレハ斯ノ如ク裁判廳ヲ變換スルハ當ニ被害者ニ於テ毫モ正當ノ理由ナキノミナラス徒ラニ訴訟ノ延、難雜ト被告ノ爲メニ費用ノ増夥ヲ致スノ弊アリト看做スカ故ナリ且ツ又民事裁判所ニテハ或ハ情實ノ明徹セサルヲ無キニシモ非サレハナリ唯、此ニ宜シク注意ヲ要スヘキ者アリ則チ法律ハ敢テ悉

トク刑事裁判所ヨリ民事裁判所へ私訴ノ移轉ヲ禁シタルニハ非ス只、特ニ願下ノ方法ヲ以テ移轉スルヲ禁シタルノミ蓋シ願下ナル者ハ原ト隨意ニ之ヲ爲スヲ得ルヲ以テ一時ノ發意ニ誘ハレ一朝ノ憤懣ニ激セラレタルヲ有ル可キナリ○是ヲ以テ豫審若シハ公判ニ於テ公訴不受理トナリタル時ハ禁制ノ適用ナシ蓋シ此際ハ刑事裁判所ニ於テ最早私訴ニ附キ裁判スルヲ能ハサルニ因リ民事ノ一路ヲ取ルアルノミ其他ニハ亦取ル可キ者ナシトス○後段復タ此點ニ就キ二个ノ條項アルヲ見ル可シ(第七及第十九條)

第二 被害者先キニ民事裁判所ニ出訴シタル時ハ當初其事件犯罪ノ性質ヲ具ヘタルヲ知リタルト否トヲ問ハス其訴ヲ刑事裁判所へ移スヲ得ルト雖モ斯ノ如ク民事ノ訴ヲ刑事裁判所へ移スニハ其裁判所ニ於テ既ニ檢察官ノ起訴アリタル時ノミニ限ル可シ故ニ

被害者若シ嘗テ民事裁判所へ其訴ヲ起シタルヲナケレハ則チ刑事裁判所へ起訴スルヲ得ヘカリシニ最早豫審判事ニ訴ヘ民事原告人トナリ刑事裁判所へ起訴スルヲ能ハス○草案ニハ佛法ト異ナリテ民事裁判所ヨリ刑事裁判所へ私訴ヲ移スコ附キ純然絶對ナル禁止ナキモ亦此點ニ附キ無極無限ノ權利アルヲナキヲ見ル可シ被害者其事件犯罪ノ性質ヲ帶ヒタルヲ知ラサル時ニモ亦上ノ制限ヲ受クルヲ憾ム者ナキニ非サレトモ其嚴格ナル制規タル數多ノ理由アツテ之ヲ説明スルヲ得可シ

先ツ一事實ヲ知ラサル旨ヲ證明スル程困難ナル者ナケレハ被害者ニ於テ犯罪ノ性質ヲ帶ヒタルヲ知リタルヤ否ヤヲ見ルハ實ニ容易ナラサルヲ多カル可シ

又原告ニ於テ此證ヲ舉グルヲ得ルニ至ルトスルモ多クハ其之ヲ識

ラサルハ自己ノ懈怠ナリトシテ之ヲ責ムルヲ得可シ

第三 時ヲ經テ發露シタル犯罪重大ナル時ハ民事裁判所ニ附屬セル檢察官ニ於テ必スヤ起訴ヲ爲サ、ルヲ無カル可シ然ル時ハ刑事裁判所ニ於テ私訴ヲ起スノ途モ亦自カラ闡通スルニ至ル可シ

〔第二十四號〕日本草案ハ佛國ニ於テ此點ニ就キ以上論下シ來リタル二様ノ規則ニ比シ一層判決例中ニ於テ摸稜牴牾タルヲ免レサル數多ノ附從ノ問題ヲ擧テ之ヲ斷定セリ

蓋シ被害者タル未タ必スシモ第六條ノ禁ニ背クヲナシトセス左レハ法律ノ制裁如何ナル可キカ又法律ノ遵奉ヲ堅全ナラシムルノ方法如何ナル可キカヲ知ルコソ實ニ緊切ノヲナリトス

第一 法ニ違フテ訴ヲ受ケタル裁判所ニ於テ其違法タル旨ヲ申立ル者ハ何人ナルカ

第二 右ノ禁アルニ拘ハラス之ニ背テ言渡シタル裁判ハ特ニ此原
由アルノミニテ改正レホルム若クハ破棄スルヲ得可キ乎

第三 若シ故障モライヤン、ド、デフアンズ、フ、ヘン、ド、不受理ノ申立カウゼー定期内ニ行ハレテ認可セラレタル時
ハ原告ハ曾テ其願下ヲ爲シタル裁判所へ復ヒ出訴スルヲ得可キ
乎

第一 第一問ハ其答議ニ於テ之ヲ分割ス

[甲]刑事裁判所二個ノ訴ヲ二ナカラ併セ受理シタルニ被害者其訴ヲ
民事裁判所へ移シタリ○之カ法律ノ趣意ヲ揆ルニ被告ノ爲メ無用
ノ失費ト時日ノ遷延トヲ避ケ且ツ凌虐ヲ防クニ在テ敢テ直接ニ公
益ノ影響ヲ蒙ムルヲナシトス故ニ民事裁判所へ故障ノ申立ヲ爲ス
可キ者ハ獨リ被告人ノミナル可キハ自然ノ結果ニシテ該裁判所附
ノ檢察官モ亦之ヲ爲スヲ得ス裁判所モ亦職權ヲ以テ之ヲ爲スヲ得

ス○加之法律ハ期限ニ關シテハ被告ノ權利スラ尙ホ大ニ制限シタ
リ蓋シ右故障ノ申立トテモ原ト單ニ管轄違ニ附テノ故障ニ過キサ
レハ被告ヲシテ竟ニ之ヲ以テ自己ノ負擔ス可キ賠償ヲ全ク避シ
ルカ爲メノ奸策ト爲スヲ得セシム可カラサルナリ○是故ニ私訴
移轉ニ基クノ故障ハ都テ其他ノ故障若クハ辯護ニ先テ申立ツ可シ
○否ラサレハ以下ノ結果ヲ生スルニ至ル可シ即チ前條ニ據ルニ凡
ソ公訴ハ私訴ニ先テ裁判ス可シ就中私訴ノ民事裁判所ニ起リタル
際ノ如キハ一層此ノ如クセサル可カラサルヲ以テ被告ハ必ス最初
ニ公訴ニ附キ裁判アランヲ請求シ而シテ一旦公訴裁判セラレタ
ル後ニ至テ民事裁判所へ故障ノ申立ヲ爲スナル可シ然ル時ハ刑事
裁判所ハ既ニ公判結了シタル故ニ訴訟ノ關係ヲ離脱シタルヲ以テ
更ニ該裁判所へ私訴ヲ起スヲ能ハス遂ニ被告ハ之ニ因リ全ク私訴

ヲ免カル、ニ至ル可シ○是ヲ以テ願下ニ因ルノ故障ハ其他ノ故障
 ニ先テ申立テサル可カラサル者ナリ○是ニ於テ乎原告ハ法律ノ餘
 裕即チ更ニ刑事裁判所へ出ルヲ得可キナリ

〔乙〕民事裁判所最先ニ訴ヲ受ケ檢察官ニ於テ未タ起訴ノ手續ヲ爲サ
 サルニ被害者續テ告訴ヲ爲シ民事原告人トナリ豫審判事ニ訴ヲ起
 サント欲シタルノ時豫審判事ノ召喚ヲ受ケシ被告人直ニ告訴ノ棄
 却ヲ請求スル時ハ民事ノ訴訟既ニ起リタル旨ヲ證明シテ其請求ヲ
 聽カサル可カラス又豫審判事ニ於テ其他ノ事柄ヨリ自カラ己ニ民
 事訴訟ノ存在セルヲ識ルナラハ亦職權ヲ以テ被告ヲ放釋セサル
 可カラス

然リト雖モ檢察官若シ民事ノ訴訟又ハ豫審判事へノ告訴ニ因リ犯
 罪ヲ發覺スルアラハ必ス起訴ヲ爲スナル可シ是ニ於テカ公訴既ニ

起ルヲ以テ私訴モ亦之ニ附帶シテ起ルヲ得可キ者トス○加之上
 ニ述ヘタル如ク豫審判事ニテ既ニ被告ヲ放釋シタル時ニテモ均シ
 シ其訴ヲ起スヲ得

第二 第二問ニ至テハ前段ノ論理ヲ推究セハ自カラ其答議ヲ得可
 シ即チ被告人定期内ニ在テ法律ノ保護ヲ利用スルヲ怠レリ此際
 言渡シタル裁判ハ其前後ノ順序ニ附キ前條ノ條例ニ背馳スルヲナ
 キニ於テハ決シテ此原因ノミヲ以テ駁撃スルヲ能ハサル者トス
 之ニ反シテ被告人未タ其他ノ辯論ヲ爲サ、ルニ方リ裁判所ニ故障
 ノ中立ヲ爲シ而シテ其中立聽許セラレサル時ハ該裁判ハ控訴若ク
 ハ上告ニ因テ改正セラル、ヲ有ル可シ

第三 第三問ハ法律ニ於テ明瞭ニ其答議ヲ掲ケ而シテ其結果原告
 ノ爲メニ頗ル利得アル者トス○則チ原告ハ嘗テ不當ニモ移轉セン

ト試ミタル私訴ヲ最初出訴ニ及ヒタル裁判所へ復ヒ起スヲ得ル
 是ナリ○蓋シ原告ヲシテ本案事件ニ至ルマテ其權利ヲ喪失スル者
 トセハ道理ニ背馳シ公義ニ悖戾スル者ト謂ハサル可カラス原告ハ
 曾テ其訴權ヲ拋棄シタル者ニ非ス只之ヲ移轉セント欲シタルノミ
 ○之ヲ禁スルハ即チ可ナリト雖モ其嘗テ占有シタル地位ハ之ニ復
 與セサル可カラス○其輕忽ノ過チ有ル如キハ其願下ヲ爲シタル最
 初ノ訴訟入費ト却下サレタル再度ノ訴訟入費ト併セテ負擔セシ
 メラル、ニ因リ既ニ相當ノ責罰アリトス尤モ原裁判所へ復歸シ第
 三回ノ訴訟ヲ爲シタルニ附テノ入費ニ至テハ普通法ニ從ヒ結局敗
 訴シタル者ニ於テ之ヲ擔當ス可シ
 此ニ法律ニ違フテ一旦民事裁判所へ移シタルノ故ヲ以テ却下サレ
 タル訴ヲ復ヒ刑事裁判所へ出スヲ能ハサル場合アルヲ示サン則

チ訴訟棄却ト再願トノ間ニ刑事裁判所ニテ公訴ニ附キ裁判ヲ言渡
 シ隨テ訴訟ノ關係ヲ脱シタル際是ナリ○此場合ニ於テハ民事廳へ
 過失ニ出タル願下ヲ爲シタルト此反則チ補フニ遲滯シタルトノ二
 事ヲ以テ訴權拋擲ト看做スニ足ル可キノ理由ナリトス

第七條

〔第二十五號〕抑、刑事ノ訴訟タル公訴ハ其結局被告ノ爲メニ或ハ利
 トナルヲアリ或ハ不利トナルヲアリ利トナルトモ之カ爲メ未タ必
 シモ被告人ノ全ク民事上ノ賠償ヲ免カル、能ハス又不利トナルト
 モ未タ必シモ被害者ナリト稱スル者ニ賠償ヲ與フルヲ要スルニ非
 ス况ンヤ要求スル所ノ全額ノ如キニ於テオヤ
 公訴ノ歸結被告ニ不利トナリタル際ニ就テハ固ヨリ本然至當ノヲ
 ナレハ法律ハ敢テ之ヲ明言セス

其歸結利トナルノ際ニ至テハ之ト異ナリ或ハ被告人之ニ責ヲ歸シタル事實ニ附テ有罪ナラサル時ハ民事上ニテモ亦責ニ任セスシテ可ナリト誤認スル者ナキニ非ス〇然レモ之ヲ性法ト純然タル公道トニ照スニ恐ラクハ其誤謬ニ屬スルコト多カル可シ之ヲ成文律ニ照スニ至テハ必然誤謬タルコト免カレサル可シ

〔第二十六號〕 第一茲ニ着目ス可キコトハ法律ハ公訴ノ決定ニシテ被告ニ利トナル三个ノ場合ヲ採用シタルコトナリトス其場合トハ何ソ放免、免訴、不問、則チ是ナリ

今此ニハ右三者ノ本質ノ差異ヲ敷衍スルヲ要セス〇唯以下ノ數事ヲ知ルヲ以テ足レリトス抑、放免トハ完全ナル審理ヲ遂ケ本案ノ裁判ヲ下シタル後ニ至テ被告人無罪ナリト認定セラレタル場合ヲ謂フホシヒ免訴トハ有罪ノ證據不充分ニシテ本案ノ裁判ニ及ホス能ハス若

クハ次條ニ列記セラレタル原因ノ一个ニ因リ公訴消滅ニ歸スルカ又ハ其行爲刑法ノ規定スル所ニ非サルノ故ヲ以テ公訴不受理トナリタルノ場合ヲ謂フ放免モ亦免訴ト同一ナル場合ヲ謂フト雖モ(證據不充分ノ場合ヲ除キ)只、異ナル所ハ被告人事實裁判官ノ爲メニ有罪ト認識セラレタレトモ而モ法律ノ裁判官ニ於テ處刑ヲ行フニ足ル可キ法律ノ根據ナキヲ以テ刑罰ヲ科スルコトナク之ヲ解放スルニ在リトス(參看第二百四十三條、第三百五十五條、第三百五十六條)〇但シ右事實裁判官ト法律ノ裁判官トノ區別ニ至テハ陪審制度ノ現出セル重罪事件ノ部ニ至リ綿密ニ説明ス可シ

〔第二十七號〕 此ヨリ以下ハ如何ナル場合ニ在テ被告ニ利アル裁決ニテモ民事上ノ責任ヲ存シ如何ナル場合ニ在テ之ヲ免スルカヲ討究セン蓋シ之ヲ存スルハ則チ第七條ニ定メタル規則ニシテ之ヲ免

スルハ則チ例外則ニ屬スル者トス
 先ツ原則ニノミ據テ之ヲ觀レハ全ク刑罰ヲ免カル、トモ民事上ノ
 義務ハ存在スルヲ得可キ者トス○夫レ釀生シタル損害ヲ賠償スル
 民事上ノ義務ハ過失^{フオートチクリシヤンス}懈怠^{エムブレユダンス}不注意アルヲ以テ之ヲ生スルニ足レリ○
 之ニ反シ罰ス可キ犯罪ハ其過失較重大ナル性質ヲ具ヘ就中害スル
 ノ意アリテ行フカ若クハ少クモ釀生シタル害惡ヲ識リ故ラニ之ヲ
 行フノ心アリタルニ非スンハ成立スル者ニ非ス無心ニシテ其不注
 意ヨリ生シタル損害ヲ法律ニテ之ヲ罪トシ罰スル場合ハ甚タ罕レ
 ニ見ル所ナリトス
 是ヲ以テ其所行無心即チ惡意ニ出テサルニ因リ被告人放免セラ
 ルトモ然レモ民事上過失ノ責ニ至テハ往々之レ有ル可シ就中他人
 ノ物ヲ竊取橫奪シタルノ訴ヲ受ケタル際ノ如キ其實例ヲ見ルコトア

リ若シ此際ニ在テ其人該物件ヲ掌握シ全ク其過誤ニ出ツル旨ヲ證
 明スルニ於テハ刑罰ヲ蒙ムルコト無カル可シト雖モ其物件ハ之ヲ返
 還ス可ク又若シ既ニ之ヲ讓渡シ又ハ消耗シタル時ハ則チ之カ代價
 チ支辨セサル可カラス
 又豫審ニ於テ惡意ノ嫌疑全ク氷解シ免訴ノ言渡アリテ公判廳ヘ送
 致ナキノ場合ニ在テモ亦其決定ハ同一ナル者トス○又特赦ニ因リ
 公訴消滅シタル時モ亦同シ蓋シ君主權ハ人心撫安調和ノ主旨ニ基
 テ法律上犯罪ノ痕跡ヲ湮滅シ之カ^{フイボワイモストブレシ}忘失^{オウシツ}ヲ命スルヲ得可キモ爲メニ
 民事上賠償ノ權利ヲ傷害スル若キアラハ其權限ヲ超越シテ純乎タ
 ル公義ニ悖戻スル者ト謂ハサル可カラス
 唯^{シヨウズシユシエ}既決裁判若シクハ期滿免除ノ効ニ因リ公訴不受理トナリタルノ
 場合ニ於テハ私訴モ亦不受理タル可シト雖モ是レ他ニ其理由アル

カ故ナリ後段其所ヲ得テ更ニ論究ス可シ

不問ノ場合ニ於テハ被告人有罪ナリト認メラレタルナレハ本論ニ
關シ更ニ疑議ノ容ル可キ者ナシ○蓋シ被告人ハ刑罰ヲ免カレ其原
因豫審中ニ發見セシナラハ則チ免訴ノ言渡ヲ爲ス可キ者ナリシ左
レト其民事上ノ責任ニ至テハ依然存在セサルヲ得ス

〔第二十八號〕 以下刑事上利アルノ裁決ハ民事上ニテモ亦利トナル
可キ例外ノ場合ヲ說カン○是レ此場合タル其實原則ノ結果ニ過キ
サルヲ以テ法律ニハ敢テ之ヲ明記セス

其所謂ル原則トハ第一刑事ノ裁判ト民事ノ裁判トハ互ニ相ヒ牴觸
ス可カラスト云フニ在リ○蓋シ事實之レ無キカ又ハ被告人其本犯
人ニ非サルニ因リ至當ナル無罪ノ言渡アリタルニ於テハ此被告ニ
シテ決シテ民事上罪セラル可キノ所以ナキナリ○左レハ裁判所ニ

テハ能ク無罪ノ理由ヲ明瞭ニ陳述シテ以テ民事ノ裁決ト刑事ノ裁
決ト相牴觸スルノ弊ヲ避ケサル可カラス

民事ノ賠償ヲ妨礙スル原則ノ第二ハ則チ或ル場合ニ在テハ私訴公
訴ニ附着シテ共ニ消滅ス可キト是ナリ○則チ期滿免除ニ因リ公訴
消滅シタルヲ以テ免訴若クハ不問ノ言渡アリタル際ニ於テハ私訴
モ亦共ニ消滅セル等ノ如シ(看第十一條及第十二條)

凡ソ第七條ノ規則並ニ前述ノ原則ニ基テ例外タルノ規則ハ公訴私
訴併セテ同一ナル刑事裁判所へ起リタル際ト二个ノ別異ナル裁判
所へ起リタル際トヲ問ハス均シシ適施ス可キ者ナリトス

〔第二十九號〕 本條第二項ヲ按スルニ刑事裁判所ニテ公訴ヲ裁判ス
ルヲ能ハサル場合ニ於テハ民事裁判所ニ非スンハ損害賠償ノ訴ヲ
起スヲ能ハサル旨ヲ謂ヘリ是レ刑事裁判所へ事件ノ送付ヲ爲サス

シテ豫審終結シタルノ際ニ在ル者ナリトス(免訴、訴訟ヲ引キ繼ク可キ理由ナキノ命令、第二百四十三條ヲ參看セヨ)○公訴チルドンナンス、ドノンリユ不受理ノ言渡刑事裁判所ニ由ル時ハ之ト同シカラス(參看第三百五十六條)○此場合ニ於テハ刑事裁判所ニテ二訴共ニ併セ受理シタルヲ以テ民事ノ詞訟ヲ裁斷スルモ亦其掌トル所ナリトス○然レモ眞ニ所謂ル管轄違ナル場合ニ於テハ裁判所ノ訴ヲ受ケタルハ適法ニ非サルヲ以テ此際ニハ民事ノ詞訟モ亦之ヲ裁斷スルノ權ナシトス

第八條

〔第三十號〕本條ハ原ト受理シ得可キ公訴ノ最早受理ス可カラサル者トナリ裁判所へ起ストモ無益ナル場合ヲ列記ス
其場合ニ在テ訴訟ノ起ルアラハ訴訟出訴人ヲ始メ其他ノ關係人悉ク其受理ス可キ者ニ非サル旨ヲ申立ルヲ得又其中立ハ訴訟審理

中公判ニ至ルマテ何時ニ拘ハラス之ヲ爲スヲ得可シ加旃裁判所ヨリ職權ヲ以テ訴訟ノ却下ヲ爲スヲ得若シ本案ニ附キ誤テ裁判アル時ハ此一事ヲ以テ破棄スルヲ得可シ
其場合六個アリテ敢テ其限外ニ及ホスヲ能ハス○各個毎ニ特ニ解説スルヲ要ス

〔第三十一號〕被○告○人○ノ○死○去○〔第一〕モール○夫レ罪惡ナル者ハ原ト一身上

ノ所爲ニ出ツルヲ以テ刑罰モ亦一身上ニ止マラサル可カラズ若シ罪犯ノ後嗣ニ對シ或ハ最近ノ親族ニ對シテ刑ヲ用フルアラハ實ニ不正不公ノ甚シキ者ニシテ痛嘆スルニ勝ヘサル所ナリ
凡ソ字内諸邦國ノ史乘ヲ考フルニ矇昧野蠻ノ時代ニ在テハ人未タ右ノ原則ヲ知ラス罪ノ死ニ當ル時ハ一家親族擧テ之ヲ主長ト共ニ夷滅シ敢テ其共犯ナリシヤ否ヤヲ糺サ、リシヲ少ナシトセス○其

後漸ク悟テ刑罪ハ一身上ニ限ル可キノ原則ヲ遵奉スルニ至リシト雖モ被告人ノ死去スルニ於テハ其名譽ニ就キ訴訟ヲ爲シ剩ヘ其屍骸ニ就テ訴ヲ行フ有リタリ○是レ實ニ痛ム可ク悲ム可キノ誤見ニシテ世運開明ニ赴クニ及テハ人皆ナ舉テ擯斥スル所トナレリ實ニ躬自ラ辯護スルヲ能ハサルノ人ヲ裁斷スル程嫌忌ス可ク又不正ナル者アル可ケンヤ○假令ヒ代理人ヲ選ンテ以テ其名譽ヲ辯護セシムルモ其代理人ニ於テ被告ノ冤枉無辜ヲ感セシメ冤枉ヲ氷釋スルニ足ル可キ情狀ヲ盡ク識ルヲ保ス可ケンヤキラトツール
インツサンス
シルコンスタンス
本論ニ關シ一ノ注目ス可キヲ有リ後段復ヒ詳説ス可キモ今此ニ之カ要ヲ示サン(參看第三百六條及第三百七條)則チ瘋癲ナル者ハ假令ヒ其極度ニ達セル時タリトモ敢テ公訴ヲ消滅スル者ニ非ス唯其精神知覺ヲ復スルニ至ルマテ其執行ヲ停止スルノミナルヲ是ナリ其

理由ニ至テハ亦前ノ場合ト等シク他人ニ辯護ヲ任シテ被告本人之ヲ指揮スルヲ能ハサル時ハ必ス不充分ナルヲ免カレサルト云フニ在リ

若シ其瘋癲難治ノ症タル時ハ私訴ハ被告人ノ死去ニ因リ又ハ期滿免除ニ因リ之ヲ中斷スルノ手續ヲ行ハサル時ハ消滅スルニ至ル可シ

被告人ノ死去ニ因リ公訴消滅スルニ附テハ有夫姦ノ罪ノ時婦ニ於テ死去シタルノ場合ニ在テ特殊ナル困難ヲ現出ス○則チ共犯ニ對シテモ公訴等シク消滅ス可キヤ否ヤノ問題ナリトス之ヲ考フルニ然ラサルヲ得サル者アリ何トナレハ若シ之ニ反シ共犯罰ス可キ者トセハ最早躬ヲ辯護スルノ力ナキ婦ノ紀念ニ恥辱ヲ及ホスニ至ル可シ○或ハ現行犯罪書信ノ若キ確實ナル證據アルヲ

ナシトセサルヲ以テ反對説ヲ唱フル者アル可キモ毫モ取テ信據スルニ足ラサルナリ抑是等ノ證憑ト雖モ婦生存スル時ハ猶ホ未ダ對質辯論ヲ免カレサル者トス然ルニ其辯論ヲ行フ能ハサルニ及テハ則チ裁判ノ障礙トナル可キナリ

然レモ犯姦ノ訴ヲ受ケタル婦ノ從犯(共犯)タリト嫌疑セラレタル者ノ死去ニ至テハ之ト異ナレリ共犯人死スルトモ姦婦ニ對スル訴ハ消滅スルヲ無カル可シ蓋シ姦婦ヲ罰スルヤ未ダ必シモ共犯人ノ發露スルヲ俟タサルナリ○共犯人裁判言渡以前ニ死没セル場合ハ恰モ其姦婦ト現行犯ノ際ヲ認メラレタルニ方リ未ダ其誰タルヲ識別セサル前逃走シタル場合ト同一ナリトス

〔第三十二號〕〔第二〕破○害○者○ノ○棄○權○若○ク○ハ○私○和○○破○害○者○ノ○告○訴○ヲ○俟テ始テ公訴ノ起ル可キ場合ヲ嘗テ看過シタリシカ此際ニ於テ若シ

其告訴ヲ願下ルカ被害者其私益ニ就キ私和ヲ爲ス時ハ最早檢察官ニ於テ公訴ヲ實行シ又ハ繼續スルヲ能ハサル可シ是レ道理ノ自カラ然ラシム可キ所ナリトス○嘗テ指示シタリシ罵詈譏諷姦通ノ場合等即チ本則ノ適用ヲ受クル者トス

然ルニ佛國ニ在テハ法律ニ於テ右ノ原則ヲ斯ノ如ク明瞭ニ制定セサルカ故ニ或ル場合ニ附テハ一タヒ告訴ニ因テ公訴ノ起ル時ハ其告訴ヲ願下ルトモ公訴ハ決シテ消滅ス可キニ非スト主張スル者アリ

〔第三十三號〕〔第三〕既○決○裁○判○ノ○効○民○刑○裁○判○ノ○施○行○ニ○就○キ○一○大○原則トスル所ハ裁判定一タヒ破棄ス可カラサル者トナルニ及テハ之ニ効力ヲ附シ其裁判ヲ以テ眞理ト看做ス可キニ在リ
〔附言〕格言ニ曰ク既決裁判ハ眞理トシテ認定ス可シト

夫レ人類ハ其心神未ダ短處アルヲ免カレス從テ其誤謬ニ陷ヒルコト
 甚カラス是ヲ以テ裁判官モ自家ノ誤謬ノミナラス事實ヲ察知スル
 コハ間々證人、鑒定人等ヲ要スルコト因リ是等ノ人ノ爲メニ誤ヲ來タ
 スコト有ル可キナリ然レモ裁判上ノ決斷タル之ヲ爭議シテ底止スル
 所ナケレハ或ハ誤謬ヲ去テ眞理ニ就クコト有ル可キモ亦却テ眞理ヲ
 失シ誤謬ニ陷ルコトナキ能ハス○加之訴訟ヲ終結スルノ期ナシ國民
 各社會ニ對シ又相互ノ間ニ於テ危懼ノ念慮ヲ懷キ毫モ安堵スルコ
 能ハサルニ至ラン

抑、既決裁判ノ効力タル原ト一ノ推測眞理ノ想像ニ外ナラスト雖モ
 法律ニ於テハ純然タル眞理ノ位地ヲ附シ裁判官ヲシテ遵奉セサル
 ヲ得サラシム蓋シ刑事ニ關シ裁判官其心證ヲ作ルニ方リ證據ノ爲
 メニ拘束セラル、ハ獨リ既決裁判ノ場合ノミナリ

然レモ既ニ裁判ヲ經タルノ故ニ公訴不受理トナルニハ上訴ノ途窮
 盡シ若クハ上訴ヲ行フ可キ期限ノ滿盡セルニ因テ其裁判確定シタ
 ルヲ要ス○若シ夫レ故障、控訴又ハ上告ニ因リ上訴裁判所ニテ其公
 訴猶ホ審理中ナル時ハ現ニ其是非ヲ爭議スル者ナレハ既決裁判ノ
 効ヲ提述スルコト能ハス

又既決裁判ノ効ハ假令ヒ未ダ確定トナラサルモ既ニ強大ニシテ裁
 判所ヲシテ公訴裁斷スルコトヲ得サラシムルニ足レリ○例之ハ一事
 件ニ附キ闕席裁判ヲ行ヒ而シテ其裁判ニ對シ故障ノ申立ヲ爲スヲ
 得可キ時又ハ始審廳ニ於テ對質裁判ヲ行ヒ而シテ其裁判ニ對シ控
 訴ヲ行フコトヲ得可キ場合等ニ於テ故障若クハ控訴ニ依リ此種ノ上
 訴ヲ掌管セル裁判所へ其公訴ヲ附スルコトヲ爲サスシテ更ニ他ノ裁
 判所へ全ク新ナル者トシテ出訴シタリ○此際ニ於テハ土地ノ異ナ

ルヨリ大抵其裁判所ハ管轄違ナル可シト雖モ第一篇ニ記載セル如ク數箇ノ裁判所共ニ管轄ヲ有スル場合ニ於テハ更ニ訴ヲ附セラレタル裁判所管轄違ノ故ニ其訴訟ヲ却下スルニ非ス則チ既決裁判アリタルカ故ナリ是ニ由テ觀レハ凡ソ既決裁判ハ上訴アラサル以上ハ未タ之ヲ執行スルヲ得スト雖モ同一ノ事件ニ附キ都テ新訴ヲ行フノ妨碍トナルニ足ル可キ効力ヲ有スル者ナリ

又上訴審理中他ノ裁判所ニテ訴ヲ附セラレタル時其訴ヲ却下ス可キハ最早既決裁判アリタルノ故ニ非スシテ第二、第三及第四篇ニ記載セル管轄ノ抵触アルヲ以テナリ(參看第二百六十一條乃至第二百六十三條、第三百十八條乃至第三百二十九條及第五百九十八條以下)然レモ本條第八條ニハ只、確定裁判ノミヲ掲ケ敢テ既決ノ効力ヲ有スル諸般ノ裁判ノコトニ言ヒ及ホサ、ルニ係ル是レ本條ハ裁判所ニ

於テ管轄ヲ免脱ス可キ場合ヲ悉皆言フ者ニ非ス止ク其重大ニシテ公訴ノ消滅ス可キ場合ノミヲ定ムル者ナルカ故ナリ

夫レ既決裁判ノ効力タル如何ニ重大ナリトモ又其既ニ確定シタリトモ其訴訟ニ關係シタル被告人ノ外利害ヲ及ホスヲ能ハス○是ヲ以テ一主犯若クハ一從犯ニ對シ又ハ主從兩犯ニ對シテ裁判ノ言渡アリタリトモ之カ爲メニ自餘ノ主犯又ハ從犯ニ對シテ毫モ起訴スルノ妨碍トナラス又假令ヒ最初訴訟ノ際ニ在テ他ニ罪犯ノ在ルヲ發覺セサリシ時タリトモ敢テ異ナルヲナシ是等ノ人ニ對シテハ未タ裁斷アラサルヲ以テ公訴ハ依然全存ス可シ○然レモ或ハ一被告人ノ無辜ナル旨ヲ認定シタル裁判、餘類ノ無罪タル可キ證據トナルヲ往々之レ有リ例之ハ犯姦ノ罪アリトテ訴ヘラレタル婦女無罪ノ言渡ヲ受ルニ於テハ其共犯ナリトノ嫌疑ヲ蒙ムリタル者亦從テ

訴ヲ受ルヲ免カル可シ又主犯ニ對シ竊盜罪ノ訴ヲ起シタル時物
件ノ滅盡ハ災異ニ因ル等ノ證アツテ盜罪ノ無實ナル旨裁判セラ
ルニ於テ竊盜從犯ト思量セラレタル者モ亦訴ヲ免カル可シ

〔第三十四號〕〔第四〕

新法ニ據リ刑罰ノ廢止○從前罰ス可キノ所行

モ最早刑律ヲ以テ之ヲ責ムルニ足ル可キ危害ヲ社會ニ及ホサスト
看做スニ及テ法律ニ據リ之ニ對スル刑罰ヲ全ク廢止スルヲアリ
日本新刑法ノ如キハ悉ク從前ノ刑罰ヲ採用セサリシ是ヲ以テ本項
ノ場合其實例ナシトス可カラス○此場合ニ在テ新法頒布ノ際其所
爲未タ裁判ヲ經サルニ於テハ之ヲ罰スルヲ能ハス公訴ハ其目的ト
スル所ヲ失スルニ因リ消滅ニ屬ス可シ○又若シ既ニ刑ノ言渡アリ
タル者ナレハ刑法ニ循ヒ其刑消滅ニ歸ス可キナリ(看第六十八條第
四項)

〔第三十五號〕〔第五〕

特赦○特赦ノ事ハ既ニ刑法註釋中之ヲ敷衍シ

其恩赦ト多少類似スル所アレトモ二者共ニ之ヲ同一視ス可カラサ
ルヲテ説キタリ抑、特赦トハ法律ニ據リ罰ス可キ或ル所行ニ對シ都
テ訴ヲ起スヲ禁止セル國君ノ仁惠ヲ謂フ

此國君ノ大權タル何レノ邦國ニ於テモ見ル所ノ者ニシテ恩赦ト等
シク最美ナル主權ノ一ナリトス蓋シ此特權ノ勢力ハ法律ヨリ強大
ニシテ偏ヘニ仁惠ニ出ル者トス

凡ソ此大權ヲ施スハ概テ國事犯ニ關スル重輕罪事件ノ際ニ於テス
○其所爲既ニ終リ國家ノ秩序ヲ恢復シ社會ノ傷害微少ニシテ刑罰
ヲ行ハノヨリ寧ロ仁惠ヲ施スコソ却テ鎮撫ノ効ヲ奏ス可キ時特赦
ヲ行フハ其利得大ニシテ至善至美ノ政略ト謂ツ可キナリ
特赦ハ(希臘原語ノ意義ニ據レハ)忘失^{オビフ}ヲ命シ犯罪ヲ消盡ス○是ヲ以

テ罪犯ノ全員又ハ一部分ニ對シ未タ起訴アラサル時ハ遂ニ又之ヲ行フコト能ハサル可ク既ニ着手シタルナレハ之ヲ絶止シ又既ニ刑罰ノ言渡アリタルナレハ之ヲ消滅ス

其忘失ノ効力法律上實ニ大ナルコト更ニ罪ヲ犯ストモ特赦ニ遇フタル罪人ハ再犯ト看做サル、コトナキニ至ルナリ

然ルニ恩赦ニ至テハ之ト異ナリ敢テ舊罪ヲ消滅セス唯刑罰ヲ止ムルノミ○本條恩赦ノコトヲ謂ハサルハ其處刑後ニ非スンハ施サ、ル者タルニ因ルノミ

〔第三十六號〕〔第六〕

期滿免除○期滿免除ハ法律ノ恩典ニシテ法律上犯罪ノ忘失ヲ命スル所ハ特赦ト其効果ヲ等クスル者トス

其本旨トスル所ヲ推スニ時日ノ經過ハ犯罪ノ證據ヲ湮滅シ釀生シタル罪惡ヲ消解スト云フニ在リ○蓋シ歲月ヲ經ル久シケレハ起訴

ヲ行フモ確證ニ乏シク遂ニ放免ヲ爲スニ至ル可ク又若シ調書其他

犯罪ヲ證明シ處刑ノ根基トナスニ足ル可キ當時ノ檢證調書等アル

時ハ即チ被告人コ利ナル證據即チ無罪ノ證據消滅スルノ患アリ○

加旃多少忘失シタル所行ヲ評揚シテ之ヲ罰スルモ社會ノ爲メコハ

最早利益トスル所ナシ且ツ刑罰ノ主旨トスル所ハ衆庶ノ畏懼ヲ安

定シ本人ノ復ヒ罪科ヲ犯スヲ警シムルニ在レハ時日ノ經過ニ因テ

既ニ畏懼ノ念ヲ靜安シ且ツ犯人嗣后復ヒ罪ヲ犯シタルコトナキ以上

ハ刑罰ヲ適用スルニ復ヒ目的トスル所ナキ者トス○又時日久シキ

ヲ經ルトモ社會未タ必シモ其權ヲ失ハス社會ニ代ハル者期滿免除

ノ中斷ト稱スル處分ヲ行フテ以テ永ク其權ヲ保存スルコトヲ得中斷

ノコトハ第十四條以下第十六條ニ至テ之ヲ說述規定ス○是ニ由テ之

ヲ觀ルニ期滿免除ノ理由トスル所ハ社會其權ヲ行ヒ得可クアリ

ニ之ヲ行ハサリシハ則チ好シテ之ヲ抛擲シタリト認ムルニ在リト謂フモ敢テ不可ナカル可シ

期滿免除ハ起訴ノ際ニ於テ其定期既ニ滿盡スルニ於テハ直ニ公訴ヲ棄却セシム蓋シ期滿免除トハ拉丁原語ノ意義ニ據ルニ本案ノ審理ニ先チ豫メ斷定ス可キノ手續ヲ謂フ

プレジデント

刑法(第六十九條以下)ニ一種ノ期滿免除ヲ記載セリ則チ罪犯遂ニ其刑ヲ逃ル、ニ方リ言渡シタル刑ヲ消滅セシムル者是ナリ○此種ノ期滿免除タル既ニ裁判ノ宣告アリシコナレハ舉證ノ困難曖昧等ニ基ク者ニ非ス止テ其犯罪既ニ忘失ニ附シ其犯人モ亦等シク忘失ニ屬シ因テ刑戮ヲ行ハンヨリ寧ロ憫諒ス可キノ近キカ故ニ刑罰ヲ執行スルモ社會ニ對シテハ毫モ利益アラサルコ因ルナリ
以上二種ノ期滿免除ハ日本ニ於テハ寧ロ新定ノ法制タリ然レモ諸

邦國ノ法制中共良美ナル者ヲ見ルニ舉ク皆ナ此設ケ有ラサル所ナシ故ニ新刑律ニモ亦之ヲ採取シタリ

第九條

〔第三十七號〕 夫レ私訴消滅ノ原因タル公訴消滅ノ原因ニ比スレハ

エグスタンション カウズ

必然多キヲ能ハス

第一刑ノ廢止及ヒ特赦ノ若キハ其中ニ包含スルヲ能ハサルナリ抑、此二様ノ處分ハ主權ヲ總攬スル者ノミ獨リ能ク之ヲ命スルヲ得可ク其効ハ止テ犯罪ヲ罰スルノ權ヲ社會ニ殺ク有ルノミ決シテ犯罪ヨリ起リタル損害賠償要求ノ權ヲ被害者ニ褫奪スルヲ能ハサルナリ○被告人ノ死去モ亦敢テ其民事上ノ義務ヲ消滅セス苟クモ相續人タル者ハ財產ヲ減少セル責任ヲ擔當スルニ非スンハ之ヲ收受スル能ハサルヲ以テ其民事上ノ義務モ亦相續人ニ於テ之ヲ負擔ス可

被害者ノ死去モ亦其訴權ヲ消滅セサルヲ以テ原則トス何トナレハ其權ハ原ト減少毀損ヲ被リタル其財産ニ附着スル者ナレハ依然相續人ニ移轉ス可シ

然レモ或ハ犯罪ニ因リ生シタル損害被害者一身ニ止マリ敢テ其財産ニ及ホサス隨テ亦相續人ニモ及ホサ、ルヲアリ是レ罵詈譏毀ノ罪有夫犯姦ノ罪其他總テ特リ名譽ノミヲ毀損スル犯罪等ノ場合ニ於テ其實例ヲ見ル者トス○是等ノ場合ニ在テモ猶ホ被害者生存中ナレハ道義上ノ損害ノ爲メニ其名聲ヲ汚辱セラレ其結果トシテ財産上ニモ損害ヲ布キ及ホシタル旨ヲ申立テ之ヲ證明スルヲ得例之ハ官職ヲ失ヘルノ類是ナリ又其損害特ニ名譽上ニ止マルモ之ヲ賠償スルニ金員ヲ以テセソフヲ要求スルヲ得且ツ又金員ノ外他ニ賠償

補ノ資トナル可キ者無カル可シ而シテ被害者出訴ノ後ニ至テ死去スル時ハ其相續人之ヲ繼續スルヲ得○然レモ其未タ訴訟ヲ起ササル間ニ死去シタル時ハ相續人同様ノ權利ヲ有セス蓋シ其損害ヲ被ラサルカ故ナリ

然レモ被害者本人ニ對シテ行ハレタル犯罪相續人ニモ影響ヲ及ホシ其名譽上ノ損害被害者ト等シク少ナリトモ殆ント相類スル場合ニハ相續人自カラ賠償ヲ要求スルノ權アリトス例之ハ被害者ヲ誹謗シテ其資産ハ横奪ニ成レリト言ヘル類ノ如シ斯ノ如キノ場合ニ於テハ其資産ヲ繼承スル相續人モ亦均シク名譽ヲ毀損セラレタリト看做スヲ得

夫ノ被害者ノ死去犯罪ニ基ク時ノ如キハ殊ニ其例ノ一層著シキ者ナリトス此場合ニ在テハ其死去ニ因リ私訴ノ消滅スルヲナキハ勿

論反テ之ヲシテ發生セシムル者ナリ就中被害者本人ノ死去其相續人ヲシテ活路ヲ失ハシムルニ至ラハ相續人コソ乃チ直接ニ犯罪ノ爲メニ損害ヲ被ムリタル者ト謂ツ可キナリ○又假令ヒ相續人ニ非ストモ苟モ死者ノ血族姻族ニシテ法律上若シハ實際死者ノ扶助ヲ仰ヒテ以テ生活スル者ナレハ損害賠償ノ訴ヲ起スヲ得

若シ此際其相續人又ハ權利ヲ有スル者數名アル時ハ各自特別ニ要償ヲ付與スルヲ得又裁判所コテハ要償ノ額チ一ニシテ親族中餘ノ徒ヲ給養ス可キ者一人ニ盡ク皆ナ之ヲ賦與スルヲ得可シ○

唯、禁ス可キハ親族若シハ相續人各自其訴ヲ分テ交之ヲ起スヲ是ナリ凡ソ親族若シハ相續人要償ノ訴ヲ起サント欲セハ即チ皆ナ一致共同スルカ又ハ總員ノ名義ヲ以テ之チ一人ニ委任ス可シ

抑、既決裁判ハ原ト其性質純ラ相對有限ナル者タリ然ルニ此點ニ關

シテハ大ニ其疆域ヲ擴張シ其訴訟ニ關係セサル者ニ至ルマテ其効チ及ホスニ似タリト實ニ其レ然リ然リト雖_ハ親族ニ關スル諸事ニ就テハ一種特別ノ原理アレハ右ノ場合ニテモ亦之ニ依循セサル可カラス則チ一家族ノ一人ハ餘ノ人ニ代テ諸權ヲ行フヲ得而シテ之ニ對スル裁判ノ利害ノ如キハ又餘ノ者ノ利害トナル可キ者トス之ヲ名ケテ正當ノ辯護人ト謂フ（法律ニ循フ辯護人ノ謂ナリ）

其他ニ於テ私訴消滅ノ原因三箇アリ其中末項ニ掲ケタル期滿免除ノミ獨リ説明ヲ要スル者トス

既決裁判ノ効ハ別ニ異ナルヲナシ唯、上段ニ記載セル擴張アルノミ又本條ハ都テ私益ニ關スルヲ以テ被害者ヨリ單ニ棄權ヲ爲シ又ハ條件ヲ附シタル棄權即チ私和ヲ諾スルニ於テハ公訴ノ發スルヲ待タスシテ起ル場合タリトモ私訴ハ直ニ消滅ニ屬ス可シ

第十條

〔第三十八號〕 夫レ期滿免除ノ期限ヲ定ムルヤ其他法律上ノ期限ト等シク、少シシ擅横ニ涉ルヲ免カレサル所アリ○因テ之ヲ道理ト公義トニ照シ考フルニ止タ其期ノ長短ニ失スルヲ避クルアルノミ○蓋シ其長ニ失スルニ於テハ罪跡ノ證據湮滅スルニ至リ訴ヲ起ストモ其局遂ニ無罪放免ノ言渡ヲ爲スノ外ナカル可ケレハ寧口始ヨリ訴ヲ起サ、ルニ如カサルナリ又若シ無罪ノ證據湮滅ニ歸スル時ハ誤テ無辜ヲ誅戮シ其害一層重大ナル可シトス○又若シ其短ニ失スル時ハ法廳ノ事ヲ處スルニ急遽ヲ專ラニシテ亦前段二箇ノ弊害ニ蹈ヒルヲ免カレス則チ一ハ證據ヲ採集スルノ時ニ乏シク爲メニ有罪ヲ誤テ無罪トシ一ハ豫審吟味ノ急速ニ過キ遂ニ無辜ヲシテ冤罪ニ陷ヒラシムルニ在リトス

抑、公訴ノ期滿免除ハ之ヲ刑ノ期滿免除ニ比スルニ其期較短ナルハ其理由ノ同シカラサルニ因ル是レ上段已ニ説述シ又下文ニ再説スル所ノ如シ○且ツ刑ノ期滿免除ニ至テハ刑期愈長ケレハ其期限モ亦愈長ク公訴ノ期滿免除ト異ナリテ其期限ヲ設クルヤ犯罪ノ各項ノミニ就テセサルカ故ニ僅々刑ノ三項ニ準シテ設クルモ未タ全シトセズ殆ント各刑毎ニ其期限ヲ有スル者ノ如シ(看刑法第七十條)夫レ法律カ期滿免除ヲ設クルハ原ト犯罪忘失ノ推測ニ出ルヲ以テ其刑期愈長ケレハ其犯罪ヲ忘失スル愈緩ナル可シト看做シタルニ因ルノミ是レ實ニ能ク道理ニ適合スル所ナリト謂フ可シ然ルニ公訴期滿免除ノ期限ニ至テハ之ヲ分ツニ只、犯罪ノ三大區別即チ違警罪、輕罪及ヒ重罪ノ三項ニ準シタルノミニシタ敢テ各區別中輕重ノ程度ニ應シテ之ヲ細別スルヲナシ其理由トスル所ヲ考フル

新法

ニ只、起訴アリタルノミニテ其犯ス所輕罪タル可キカ將タ重罪タル可キカノ一點ハ舉證ノ輕重ニ依リ之ヲ知ルヲ得可シト雖モ之ニ科ス可キ刑罰ニ至テハ僅カニ臆測ヲ以テ之ヲ定ムルヲ得可キノミ六箇月、三年及ヒ十年ノ期限ハ社會ヲシテ犯罪人ニ對スル權利ヲ保全セシメ併セテ國民、疎忽ノ訴ヲ蒙ムルノ患ナク之ヲシテ安全ナラシムルコ足ル可キ者ト認メタリ

〔第三十九號〕 本條末項ニハ犯罪ノ時ト起訴ノ日トノ間ニ新法ヲ設ケテ以テ期滿免除ノ期限ヲ改正シタル場合ヲ規定ス○此際ニ於テハ其期限ノ増展シタルト減縮シタルトヲ問ハス訴ヲ起スニ就キ常ニ新法ニ依循ス可キ者トス

此法則タル輕々一目シ去ル時ハ法律ハ既往ニ溯ラス、殊ニ新法ノ較、嚴ナルニ於テハ猶ホ且ツ然リト云ヘル原則ト其相牴觸スルニ似タ

ルヲ怪ム者アル可キナリ然レモ刑事ニ關シテ既往ニ溯ラサル可シトノ原則ヲ適用スルハ被告人其獲得シタル權利ヲ維持スルニ附テノミナリ故ニ刑罰ヲ科セラル、ニ方テハ犯罪ヲ行ヒタル時ノ法律ニ定メタル範圍内ノ刑ニ非スンハ之ヲ受クルヲナシト雖モ被告人ハ犯罪ノ時ヨリ直ニ特定ノ期限内ニ非スンハ追捕ヲ被ムルヲナカル可シトノ權ヲ有セリトハ到底維持シ難キノ説ナリトス但、起訴セントスルニ方リ現行法ニテ其罪ニ對シ起訴ヲ禁シタル時ノミ此權ヲ有ス○然レモ犯罪ト公判トノ間ニ新法ノ制定在テ裁判制度及ヒ訴訟手續ヲ一層整備シ爲メニ犯罪ノ證據ヲ採集スルニ確實ナル途ヲ得且ツ急遽ヲ避クルヲ得ル時ハ則チ新法ヲ適用スルヲ以テ正理ニ適合スル者ト謂フ可キナリ

右ノ原則タル第二十九條ニ於テ再ヒ之カ適用ヲ見ル可シ且ツ該條ニハ一層之ヲ擴張シタリ

第十一條

〔第四十號〕 凡ソ通常民事ノ期滿免除タルヤ多少時日ノ經過スルニ及ンテ負債主ヨリ之ヲ申立ツルニ於テハ其果シテ義務ヲ辨濟シタルカ又ハ其他ノ方法ニテ之ヲ免脱シタルカヲ直接ニ證明スルノ任ヲ免カレシムル者ニシテ概テ其期限長久ナリトス○歐洲諸邦ニ於テハ羅馬法以來ノ慣例ニテ大抵三十年ヲ以テ其期限ト定メタリ然レモ犯罪ヨリ生スル私訴ノ期滿免除ニ至テハ較之ヲ短縮シテ公訴ト其期限ヲ同シフス○其理由トスル所ヲ解スルヤ蓋シ難キコ非ス之カ法律ノ深意ヲ繹スルコ苟モ若干ノ時日ヲ經過スルニ及テハ犯罪スラ尙ホ且ツ之ヲ充分ニ證明スルコ難シト認ムルカラハ民事

ナリトテ重經罪事件ヨリモ之カ證據ヲ得ル容易タル可キノ理ナク又確實タルヲ得可キノモ非サルナリ

〔第四十一號〕 凡ソ民事ノ期滿免除ハ幼者並ニ受治產禁者ニ對シテ

ハ假令ヒ法ニ依遵シテ後見人ヲ附シタル時ト雖モ其効ヲ有スル者

ニ非ス幼者並ニ受治產禁者ハ其代權人法廷ニ於テ其權ヲ申立ルヲ

怠タリシトモ猶ホ其債權若クハ所有ノ諸權ヲ保有スル者トス○無

能力者ノ爲メニ期滿免除ノ中止スルトハ是レ之レノ謂ナリ○然ル

ニ犯罪ノ爲メニ損害ヲ被ムリ之ニ因リ生シタル民事上ノ權利ニ至

テハ則チ同シカラス○其理由常ニ同一ナリ時日久シキヲ經ルニ及

テハ復ク犯罪事件ニ就キ確證ヲ舉グルノ難キヲ是ナリ

且ツ被害者ノ丁年タルト幼者タルトチ問ハス法律ニ民刑ノ期滿免

除ヲ同一ニセサル時ハ檢察官ノ求刑ヲ爲ス能ハサル犯罪事件ヲ民

事法廳ニテ證明スルコトアル可シ果シテ然ル如キアラハ實ニ嫌疑ス可キノ甚シキ者タリ

〔第四十二號〕 然レモ期滿免除ノ未タ經過セサルニ在テ公訴ニ附キ處刑ノ言渡アリタル時ハ此例ニ在ラス
コンダムナシモン

此場合ニ在テハ被告人ニ對シ犯罪事件ノ證憑盡トク備ハレルニ因テ私訴ノ目的トスル所ハ止タ要償ノ多寡ヲ定ムルニ在ルノミ然ラハ上ニ指示シタル如キ困難モナク隨テ弊害モアラサル可シ是ヲ以テ其期限ハ通常民事ノ期滿免除ニ準セシメタリ

第十二條

〔第四十三號〕 犯罪ニ因リ害ヲ被リタル者公訴ニ附キ定メタル期滿免除ノ期限内ニ訴ヲ起スヲ怠ルトモ猶ホ他ニ其目的ヲ貫通スルノ方法アリ則チ被告人ニ歸スルニ單ニ民事上ノ過失ノミヲ以テシテ

自己ノ被ムリタル損害ヲ法廷ニ訴フル是ナリ即チ彼ノ盜罪ノ場合ニ於テ所有權ヲ鳴シテ以テ其物件ヲ取戻サント訴フルノ類ノ如シ
○蓋シ被害者犯罪ノ犠牲ト爲リタルヲ以テ單ニ民事上ノ過失ニ因リ損害ヲ被リタル者ヨリ反テ之ヲ薄待スルコトヲ得サルヤ瞭々タリ唯、其注意ス可キ所ハ法文ニ掲ケタル如ク被告人ニ歸スルニ犯罪ヲ組織セル故意ヲ以テス可カラサルコトナリトス○若シ之ニ違フ時ハ裁判所ニテ之ヲ抑制シ而シテ猶ホ命ニ從ハサル時ハ期滿免除ニ因リ其訴訟不受理タル可キ旨ヲ言渡ス可シ又若シ裁判言渡書中其理由ヲ掲グルニ方リ罪ヲ被告ニ歸スル事項ヲ記載シタル時ハ法律ニ違ヒ既得ノ期滿免除ニ反スル者タルヲ以テ其裁判ヲ破棄ス可シ
以上述フル如ク日本法案ハ本條ヲ以テ佛法中爭議論難シテ未タ決セサル一問題ヲ斷定シタリ

第十三條

〔第四十四號〕 凡ソ期限ヲ算計スルヤ其日期ノ始マル點即チ起算ノ日(何日ヨリ)ヲ定ムルヲ以テ緊要ナリトス最終ノ日即チ結算ノ日(何日ニ至ル)ニ至テハ別ニ困難トスル所ナシ結算日トハ定マリタル時ノ期日ヲ終ル者ヲ謂フ○期滿免除ニ就テハ其期限、犯罪ヲ行フタル日ヨリ起ル可キヲ道理ノ自カラ然ラシムル所ニシテ又其日ヲ以テ期限内ニ算入スルモ本然至當ノコトナリトス○此成規タル當ニ被告ニ利アルノミナラス亦道理ニ照シテ之ヲ考フルモ其然ラサルヲ得サル者アリ何トナレハ犯罪ヲ行フタル日ニ於テ既ニ起訴スルノ權ヲ生シ且ツ實際其日ヨリ起訴セサルコト甚タ罕ナレハナリ

〔第四十五號〕 繼續犯罪ニ關シテハ此點ニ附キ未タ必シモ其規則ヲ舉テ悉ク異ニスルニ至ラサレトモ其之ヲ適用スルニ於テ少シク之

チ差異スル所アリ則チ此種ノ犯罪ニ就テハ其止息セル日ニ至テ始メテ期滿免除ノ起ル者トスル是ナリ

凡ソ繼續犯罪タル其類多カラス○公益ニ關スル罪ヲ以テ之ヲ言ヘハ一揆内亂ノ罪、法ニ背ク軍器兵糧ノ運搬若クハ所藏スルノ罪、度量衡偽造ノ罪、違法ノ集會、浮浪ノ罪等ナリトシ私益ニ關スル罪ヲ以テ言ヘハ無故人ヲ監禁スルノ罪等ナリトス

二三ノ犯罪ニ就キ此點ヨリ觀察チ下スニ其性質頗ル疑ハシクシテ論議ス可キ者アリ贓物隱瞞ノ罪ノ如キ初メ之ヲ託セラル、ニ方リ既ニ其罪ヲ得ルチ免カレスト雖モ亦贓物占有ニ就テモ其罪ナシトス可カラス幼者誘拐ノ罪ノ如キモ亦然リ然リト雖モ右二個ノ場合及ヒ其他之ニ類似セル場合ニ於テハ其犯罪ハ初メ不正ノ所行ヲ爲シタル時ノミニ在テ成立スル者ト謂ツ可ク其繼續ノ性質ヲ帶フル

ハ誘拐變シテ監禁トナリ贓物隠瞞ノ際ノ如キハ其物件再三移轉シタルコアルヲ要ス然レモ贓物ノ移轉ハ其罪繼續ト謂ハスシテ寧ロ連續ト謂フ可シトス

連續犯罪ハ屢^{シユツクセシフ}誤テ繼續犯罪ト混同スル所ノ者ニシテ其性質固ヨリ

異ナルコナク其罪惡ヲ行フノ目的ニ至テモ亦相同シクシテ多少ノ

時日ヲ隔テ累次犯ス所ノ罪ヲ謂フ貨幣贗造及ヒ行使ノ罪、乞丐ノ罪、

禁制物賣買ノ罪及ヒ平素行フニ非サレハ法律ニテ之ヲ罰セサル罪

即チ彼ノ法ニ背キ醫術ヲ施シ又ハ收生術ヲ行フノ罪ノ類是ナリ

總テ上文説述シ來リタル場合ニ在テハ期滿免除ノ起算法ヲ異ニシ

テ被告人ニハ不利トナル者ナリ蓋シ其犯罪日夜間斷ナキ者ニシテ

所謂ル繼續犯ナル時ハ則チ其罪惡ノ底止セサル限ハ決シテ期滿免

除スルコトヲ得ス若シ又多少ノ時間ヲ經テ累行セル者ニシテ所謂ル

連續犯ナル時ハ一犯罪ノ在ル毎ニ更ニ其期滿免除ノ起算ヲ新ニス
是ヲ以テ其犯罪中初ノ二三ハ既ニ期滿免除シタルニ最終ニ近キ者
ハ尙ホ未タ免除セサルコト有ル可シ

第十四條

〔第四十六號〕 本條ノ目的トスル所ハ期滿免除ニ因リ社會ニ弊害ヲ及ホスコトヲ防クニ在リトス則チ起訴ノ手續ヲ行フテ以テ期滿免除ノ經過ヲ中斷セシムル是ナリ
抑、期滿免除ノ中斷ハ第十一條ニ記載セル中止ト混同ス可カラサル所ノ者タリ

中止ハ期滿免除ノ經過ヲ一時阻止スルノミニテ昔日既ニ經過シタル日子ハ之ヲ保チ前後ノ日數ヲ併シテ通算スル者ナリ故ニ其効ハ只、期滿免除ニ必要ナル時日ニ間ヲ容ル、ニ在ルノミ○中止ノ効チ

有スルハ止テ通常民事ノミニ在リ而シテ其之ヲ適用スルハ無能力者ノ爲メニスルヲ最モ多シトス蓋シ期滿免除ハ幼者ニ對シテ經過スル者ニ非ス總テ無能力者ハ之ヲ中止セテ其權ヲ失フノ患ナシ○左レド第十一條ニハ犯罪ニ因リ損害ヲ被ムリタル者ハ假令ハ幼者タリトモ之ニ對シ期滿免除經過ス可キ旨ヲ記載シタリ又其理由ニ至テハ嘗テ該條ヲ釋キタル時ニ於テ之ヲ述ヘタリキ

然ルニ期滿免除ノ中斷ニ至テハ其効頗ル重大ニシテ既ニ經過シタル日子ノ利得ヲ失ハシムルナリ故ニ期滿免除一タヒ中斷スルニ於テハ更ニ其期限ヲ起算ス可シ○是ヲ以テ檢察官銳敏ナレハ十年三年若クハ六月ノ期限經過セサル間ニ於テ起訴ノ手續ヲ行ヒ以テ期滿免除ノ經過ヲ阻止スルヲ得可シ斯ノ如クセハ則チ犯罪ヲシテ忘失ニ歸セサラシムルニ因リ社會ノ權利ト被害者ノ權利トヲ併セテ

之ヲ保全スルヲ得可シ

是ニ由テ之ヲ觀ルニ期滿免除ハ概チ犯罪ノ全ク發覺セサル場合ニ非スンハ經過スルノ効無カル可シ蓋シ此際ニ在テハ期滿免除ヲ設ク可キノ理由ニアリ則チ斯ク久シク發露セサル犯罪ナレハ刑罰ノ一原素タル危懼、恐怖ヲ惹起セサルト證據ノ如キモ未ダ曾テ搜索セシ^{カリス}有ラサルニ因リ其愈^{エンキエチユドアラム}湮滅ニ歸ス可キトノ二點是ナリ

且ツ夫レ第十四條ニ據ルニ起訴ヲ行フヤ未ダ必シモ本犯ヲ指名スルヲ要セス凡ソ其罪發覺セサル時ハ其名亦知レサルヲアリ左レハ三年若クハ十年等ノ期限將サニ經過シ去ラントスルニ方リ期滿免除ヲ中斷シ以テ第十六條ニ循ヒ更ニ第一期ト同一ノ期限間其權利ヲ保全セント欲セハ則チ犯罪事件ニ就キ證人ヲ訊問シ又嫌疑ノ屬スル者アラハ同事件ニ就キ之ヲ訊問スルヲ以テ足レリトス

被害者ノ起訴モ亦公訴ニ其効ヲ及ホス可シ但其刑事裁判所ニ起訴
シタルヲ要ス又若シ豫審ニ着手シタル時ナレハ豫審判事ノ處分各
期滿免除ヲ中斷スルニ足レリ

○第十五條

〔第四十七號〕 訴訟手續ヲシテ無効ニ歸セシムルニ足ル可キ原因二
个アリトス若シ此原因アルニ拘ハラヌ其手續ヲ有効ナラシムル時
ハ法律ニテ訴訟手續ヲ擔保スルモ竟ニ徒法ニ屬スルヲ免カレサル
可シ其原因ノ一ハ則チ法式ニ背クニ因ルノ無効トシ一ハ則チ其手
續ヲ行ヒ若クハ之ヲ受ケタル官吏ノ管轄違ニ因ルノ無効トス

夫レ裁判官若クハ裁判所ヨリノ召喚狀、勾引狀、追捕狀、調書等法律ニ
規定シタル主要ノ書式ニ照依セサル時ハ法式ニ於テ無効タル者ナ
リ又右ノ書狀ハ法律ニ於テ之ヲ發スルノ權力ヲ附シタル官吏ニ非

サル者之ヲ作ルカ又ハ法律ニ於テ指定シタルニ非サル裁判官若ク
ハ裁判所カ被告ヲ呼出スニ於テハ管轄違ニ因リ無効タル可シ

抑右ノ書類タル若シ二个ノ點ニ附キ適法ナル時ハ期滿免除ヲ中斷
スルノ効アリト雖モ前段ノ理由ニ據リ無効ナルニ於テハ即チ及フ
所遠ク中斷ヲ無効トスルニ至ル可キ乎

日本法案ハ此點ニ就キ一ノ區別ヲ設ケタリ是レ民事ニ關シテハ佛
國ニテモ民法ニ明定セル所ニシテ其道理ニ適合スルカ故ニ判決例
ヲ見ルニ刑事ニ於テモ亦之ヲ施用セリ(參看佛民法第二千二百四十
六條及第二千二百四十七條)

其所謂ル區別トハ法式ニ因リ無効タルノ手續ハ期滿免除ヲ中斷セ
サルヲ是ナリ若シ此區別ヲ定メサルニ於テハ不充分カ又ハ書式ニ
違フヲ甚シキノ手續モ尙ホ都テ期滿免除ノ中斷ヲ致ス可シ果シテ

然リトセハ其正理ニ悖戻スルノ甚シキヲ嫌忌スルニ堪ヘサル可シ
○加之法式ナル者ハ法律ニテ明瞭ニ制定スル所ノ者ナレハ之ヲ遵
奉スル敢テ難キニ非ス○之ニ反シ管轄違ニ因リ無効タルノ手續ハ
期滿免除中斷ノ効ヲ有ス可キ者タリ

此差異タル其理由ヲ探究スルニ蓋シ官吏若クハ裁判所ノ管轄ハ訴
ヲ起スノ始ニ在テ之ヲ識ル容易ナラサルニ因ル且ツ管轄ノ事ハ本
案ノ裁判ニ就テ其關係スル所大ナリト雖モ起訴發端ノ手續ニ至テ
ハ敢テ重要タラス又被告人管轄違ノ裁判官又ハ召喚スルノ權力ヲ
有セサル官吏ヨリ召喚ヲ受ケタリトモ其嫌疑ヲ被ムリタル所以ハ
之ヲ詳知ス可ク之ヲシテ自カラ其無罪タルヲ恃マサラシムル爲メ
ニハ社會ノ權充分働キタリト謂フ可キナリ

第十六條

〔第四十八號〕 期滿免除一タヒ中斷セルニ於テハ起訴ノ最後ノ手續
アリタル時ヨリ更ニ其期限ヲ起算ス可シ○然レモ法律ハ其手續明
確ナル日附ヲ有スルニ非スンハ准行ス可カラスト定メ以テ此點ニ
就キ爭議ノ起ルヲ防キタリ○加之明確ナル日附ナキ訴訟手續ハ法
式ニ於テ無効タル可ク從テ中斷ノ効ヲモ生セサル可シ

〔附言〕 佛國ニハ手續ニ確定ノ日附ヲ附スル方法三個(民第千三百
二十八條)アレトモ官吏ノ認證ノミ茲ニ適用ス可キ者ト認メタリ
然レモ交_レ起訴ヲ行ヒ以テ底止スルヲナク公訴ノ權ヲ保全スルカ如
キハ法律ニテ禁スル所タリ蓋シ時日ノ經過スルニ及テハ有罪無罪
ノ兩證憑トモ減少湮滅スルヲナキ能ハサルニ因ルナリ
是レ第十條ニ定メタル期限ニ二倍セル歲月即チ違警罪ナレハ一年
輕罪ナレハ六年又重罪ナレハ二十年ヲ經過スルニ及テハ則チ期滿

免除確定ス可シトスル所以ナリ

第十七條

〔第四十九號〕 凡ソ公益ヲ旨トシテ定メタル法律ノ條例ハ訴ヲ受ケタル裁判所ニ對シ訴訟ノ如何ナル形狀ニ至リタルニ論ナク又訴訟關係人中何人ヲ問ハス咸トク之ヲ申立ツルヲ得加旃裁判所ニ於テハ殊ニ出願スル者ナシトモ職權ヲ以テ之ヲ宣告スルヲ得法文ニ就テ之ヲ見ルニ右ノ原則タル期滿免除ニ關シテ之ヲ適用シタリ又既決裁判、特赦、管轄違及ヒ公訴ニ對スル不受理ノ申立等ノ事ニ附テモ均シク之ヲ適用セリ

又法文ヲ按スルニ期滿免除ニ至テハ特ニ大審院ヨリ職權ヲ以テ言渡スヲ得可シト言ヘリ抑、期滿免除ノ申立ハ單ニ法律上ノ故障タルニ非ス二个ノ事實ニ係ル者アリ則チ經過シタル時日ノ數ト中斷

處分ノ有無トチ審理スル是ナリ○然ルニ大審院ハ純ラ法律ニ係ルノ論點ノミチ決スルヲ以テ其職掌ト爲シナガラ本條ニ限り斯クマテ其職權ヲ擴張セシハ上ニ述ヘタル如ク公益ヲ主旨トセル際ナルニ因レリ

第十八條

〔第五十號〕 本條ハ最早民事原告人ノ私訴ニ關スル各項ト異ナリテ犯罪ニ因リ生シタル損害賠償ノ事ヲ規定スル者ニ非ス反テ民事原告人共理由ナクシテ公訴ヲ起シタルニ因リ被告ニ被ラシメタル損害ヲ賠償ス可キノ事ヲ斷定スル者ナリ

抑、法律ハ犯罪ヲ發覺シタル者ニ告發ヲ許シ犯罪ノ爲メニ害ハレタル者ニ告訴ヲ許スト雖モ其惡意ハ勿論重過失アルニ於テハ之ヲ罰セサルヲ得ス

新法

彼ノ誣告ノ若キ即チ一ノ犯罪ニシテ其輕重ニ至テハ其誣テ他人ニ
デレンシヤシヨ、カロムニユーズ
 歸シタル所爲ノ輕重ニ應ス(看刑法草案第三百九十五條以下)○是ヲ
 以テ告發人若クハ告訴人ノ惡意ハ爲メニ被告ニ加ヘタル損害ヲ賠
 償ス可キ民事上ノ義務ヲ發生ス可シ○又熟思スレハ則チ其無實ナ
チアリカシヨ、シビール
 ルヲ知ルヲ得可キニ輕躁、忽略、忘爲ニシテ告發、告訴ヲ爲シタル者
レシエルト、エンブリユダニス、ジイリテ
 亦同シトス唯、其程度較、輕キヲ有ルノミ○是レ法律ニ於テ普通ノ文
 字ニ從ヒ重過失ト稱スル所ノ者ナリ
ルールド、フホート
 重過失ハ裁判所ニテ之ヲ定ムルニ惡意ニ比スレハ頗ル難シトス何
 トナレハ惡意ニハ程度ナシト雖モ過失ニ至テハ其輕重ニ大小アレ
 ハナリ○是ヲ以テ裁判所ハ其時宜ノ摸樣ヲ察シテ以テ事實ノ性質
 ト犯人ノ心術トヲ勘査シ併テ被告人ノ被ムリタル損害ノ輕重ニ依
 リ多少ノ吟味ヲ要ス可キ犯罪ノ輕重ヲ審悉セサル可カラス

本條第一項ハ被告人處刑ヲ受ケサル場合ヲ規定ス其場合タル一ハ
 豫審中ニ在テ其冤罪タルヲ迅カニ認定セラレ免訴ノ言渡ヲ受ケタ
 ル際トシ一ハ公判廳ニ至ルニ及テ始テ其無罪ノ證充分ナルヲ得テ
 放免ノ言渡ヲ受ケタル際ナリトス
 又被告人全ク無罪タラス又ハ之ニ歸シタル所爲偶、法律ノ罰スル所
 ニ非サルニ因リ不問ノ言渡ノミヲ受ケタル際ニ在テモ猶ホ其告發
 告訴スル所惡意若クハ重過失ニ因リ事實ニ過當セルニ於テハ損害
 ノ賠償ヲ要ムルヲ得可シ○例之ハ狩獵誤テ人ヲ殺シ或ハ傷シル
 者アリタル時ト死者ノ相續人若クハ被傷者或ハ告發人ハ犯人ニ歸
 スルニ故殺若クハ故意創傷ノ罪ヲ以テスルノ類ナリ○斯ノ如キ場
ラミシード
 合ニ於テハ被告人其輕忽ノ罪免カレ難シト雖モ告訴人告發人ニ於
アレツシユール、ボロンテール
 テモ其重過失又ハ惡意ニ因リ被告ノ名聲ヲ損傷シ剩ヘ之ヲシテ久

シテ拘留ノ苦ヲ受ケシメタレハ損害賠償ノ責ヲ免カレサル可シ
デクシヨシヨシトシテ
 且ツ告訴人共訴訟ヲ執拗固守シ濫リニ無理不當ノ上訴ヲ行ヒ遂ニ
 ニ敗訴スルニ至ルカ若キアラハ其責任益々重キヲ加フ可シ○蓋シ上
 訴ノ濫用タル第一拘留時間ヲ遷延スルノ患アリテ又假令ヒ保釋ヲ
 許可スルトモ召喚ノ都度出廷ヲ要シ或ハ保釋金ヲ命セラル、リベラテ、プロヒソワール
レキシヨシル可シシテ竟ニ其弊害アルヲ免カレス
カウシヨシ
 右ノ事項ハ告發人ニ關スル者ニ非ス止テ民事原告人ノ事ニ係ルノ
 ミ蓋シ被告ニ利アル裁斷ニ對シ上訴ヲ行フノ權有ル者ハ獨リ民事
 原告人ノミナリ

第十九條

〔第五十一號〕本條ニハ刑罰ノ適用並ニ民事原告人ト被告人トノ相
 互ノ民事上ノ利益ヲ審理スルニ附キ刑事裁判所ノ二個ノ管轄ヲ定

ム○抑、刑事裁判所ハ告訴告發人ノ惡意或ハ重過失ヲ査定スルニ緊
 要ナル元素ヲ有ス○左レハ被告人損害賠償ノ訴ヲ起スニ於テモ寧
エレメン
 ロ刑事裁判所ニ爲スコソ望マシキヲナリトス○然レモ民事ノ途モ
 本來順當ノ者ナレハ敢テ之ヲ梗塞ス可カラス○且ツ刑事裁判所未
 タ私訴ヲ受ケサルニ於テ本案ノ裁判ニ附キ關係ヲ脱シタルニ及テ
 ハ民事裁判所ノミ獨リ其訴ヲ受ク可キ者トス○本案ノ裁判ニ至ル
 ヲ要セサル時モ亦同様ダリ即チ本條第三項ニ記スル所ノ如シ

第二十條

〔第五十二號〕裁判官不當ノ起訴ヲ爲シタル場合ニ於テ之ニ對シ濫
 リニ民事上ノ責任ヲ以テ迫ルコトアラハ遂ニ其精勤敢爲ノ心ヲ屈撓
 シ無辜ニ對シテ起訴ヲ始メシコトヲ恐レ躊躇然掣肘ヲ爲メニ有罪ヲシ
 テ刑罰ヲ遁レシムルニ至ラン是レ法律カ勉メテ避ケサル可カラサ

ル所ナリトス○被告人假令ヒ或ハ一旦無罪タルニ近シト認ムルモ
尙ホ疑シキ所アルニ裁判所ニテ起訴ヲ爲サ、ルハ至當ノコトニ非サ
ルナリ現ニ起訴ノ趣旨トスル所ヲ見ルニ疑惑ヲ氷解シ之ヲ明白ニ
スルニ在ラスシテ何ツヤ

唯裁判官ノ責罰ヲ免カレサル所ノ者ハ擅ニ拘留ヲ命シ或ハ之ヲ遷
延シ憎惡ニ出テ畏懼ニ因リ賄賂ニ穢サレ不正ノ刑罰ヲ科シ若クハ

國民權ニ悖戾シ或ハ法律ニ禁制責罰スル所爲ヲ行フ等ナリトス

佛國法ニ據ルニ是等ノ場合ニ於テハ裁判官ヲ相手取ルコト(ブリーズ、
ア、バルチー)ヲ准シタリ「ブリーズ、ア、バルチー」ノ語ハ其意義極メテ微

妙ニシテ其由テ來ル所遠ク羅馬法ニ在リトス蓋シ裁判官公平ナル
判斷人タルヲ止メテ自カテ訴訟ニ關係スルノ謂ナリ即チ羅馬ニ於

テモ之ト同趣意ノ語アリ其語詞殆ント相ヒ類セリ曰ク裁判官自己ノ

訴訟ヲ爲スト

且又裁判官ノ過失重大ニシテ犯罪ヲ組成セル場合ノ外ニ尙ホ之ニ
民事上ノ責任ヲ負ハシムルコト足ル可キ重過失ノ場合ナキニ非ス

然レモ本法典ハ故テ此種ノ條例ヲ設ケス只大審院ニ准ルニ裁
判官ノ過失ニ出ルカ爲メニ原裁斷ヲ破棄シタル時ハ則チ告戒、譴責

或ハ懲戒ヲ爲スヲ以テスルノミナリ(看第五百七十五條及第五百七
十六條)

又此場合ニ在テ其裁判破棄ニ歸スルトモ之カ爲メニ嘗テ損害ヲ被
リタル者ヨリ裁判官ニ對シ賠償ヲ要求スルコトヲ准スハ蓋シ義理ニ
背ク者ニ非サル可シト雖モ上段ノ理由ニ基キ法律ハ斯クノ如キニ
及フヲ要セサル可シト看做シタリ

〔第五十三號〕書記ニ至テモ其懈怠ニ因リ訴訟關係人ニ直接ノ損害

ヲ惹キ起スコアリ然レモ法律ハ另ニ之ヲ規定スル所ナク只普通法ニ放任セシノミ故ニ書記ハ其過失ニ因リ生シタル損害ニ附テ其賠償ノ責ニ任ス可シ蓋シ書記ハ裁判官ニ非ス其職掌トスル所ハ都テ法式ニ關スルヲ以テ其區域ノ明確ナル之ヲ守ルニ於テ毫モ難キヲ有ラサルナリ

法律中書記ノ責任アル場合數个ヲ掲載セリ其中第二十八條、第三百七十四條、第三百七十七條及ヒ第四百零九條等ノ場合即チ是ナリ

○第二十一條

〔第五十四號〕 法律ハ此ヨリ總則中他ノ一ノ法則ニ移テ之ヲ規定ス之ヲ前條ニ掲クル者ニ比スルニ本案ニ關係ヲ有スルハ較輕キモ實際上其利益タル頗ル大ニシテ其主旨トスル所ハ日常ノ困難晦澁等ヲ避ケシムルニ在リ○其効力ノ及フ所ヲ知ラント欲セハ其諸條ヲ朗

讀スルヲ以テ足レリトス

新法草案ハ起訴及ヒ辯護ニ關シ裁判所並ニ訴訟關係人ニ於テ遵守ス可キ期限ヲ制定スルニ尤モ其精詳ヲ盡シタリ○其期限タル概シテ短少ナル者トス

茲ニ法律ノ旨趣ヲ考フルニ起訴及ヒ公判ニ就キ時日ノ遷延其度ヲ過キ又ハ倉皇急遽ニ流ル、ノ二害ヲ併ニ避ケントスルニ在リ○是レ其期限ヲ算計スルル精確詳細ヲ極ムル所以ナリ

凡ソ期限ヲ算計スルニ其初日ヲ加算セサル所以ノ者ハ其一日ヲ全フスルニ足ラス多クハ其日盡ルニ近クシテ之ヲ利ス可キノ人之ヲ利スルヲ能ハサルカ故ナリ○唯、期滿免除ニ關シ變則ノ設ケ有ルハ其反テ被告人ノ利益ト爲ルニ因ル(看第十三條)○之ニ反シ其最終ノ日ハ期限ニ算入ス可シ但權利ノ實行ニ就テハ其全ク盡クルヲ待ツテ要ス

故ニ被告人其裁判ニ對シ上告ヲ行フニ就キ裁判宣告ノ日ヨリ三日ノ期限ヲ與フ可シト定メタル時ハ宣告ノ日ハ之ヲ扣除スト雖モ宣告後第三日ノ終ルニ及テハ其期限盡キタリトス可シ

又期滿免除ノ經過スルニハ最終ノ日全ク盡ルヲ要スト謂フトモ裁判所ノ習慣ヲ酌量シテ其意義ヲ解セサル可カラス蓋シ裁判所書記局及ヒ其他ノ諸法衙等夜半ニ至ルマテ一己人ノ爲メニ事務ヲ執ル者ナク規定時刻ニ至レハ速ニ閉鎖スル者トス○是ヲ以テ最終ノ日ニ上訴ヲ行ハント欲スル者ハ書記退局時刻ニ先ツテ其旨ヲ申立テサル可カラス○此際ニ在テハ二十四時ヲ以テ一日ト爲ストノ規則ヲ直ニ適用スルヲ能ハス

然レモ法律ニ期限ヲ定メタルノ趣意權利ノ執行ヲ制限スルニ在ラズシテ一ノ訴訟手續ト他ノ一ノ訴訟手續トノ間ニ經盡セシムルヲ

命スルニ在ル時ハ一日毎ニ必ス其整全ナルヲ要ス是レ概シテ其條項毎ニ明記スル所ナリトス假令ヒ明記スル所ナキモ本條ニ照シテ之ヲ斷定セサル可カラス(看第四百三十六條、第四百三十七條及第四百四十三條)

又法律ニ問ヲ置ク可キ時刻ヲ定ムルノ場合アリ二十四時間四十八時間ト謂フカ如シ(看第三百三十三條、第三百三十六條、第三百八十八條)此場合ニ在テハ別ニ疑問ノ起ルヲナシ唯、期限ヲ算計スル一時毎ニスルマテナリ

期限最後ノ日定例ノ祭日ニ值ル時一日ノ増展ヲ許ルスノ條例ハ原ト仁惠ノ趣旨ニ基ク故ニ期滿免除ノ如キハ之ヲ増展スレハ反テ被告人ノ不利トナルヲ以テ増展ヲ爲スヲ無シ

然レモ祭日最終ノ日ニ值ラサル時ハ期限ヲ増展スルヲナシ○是ヲ

以テ其期限僅カニ三日ナルコ初メ二日共ニ祭日タリトモ法律ノ期限ヨハ一日モ増展アルコナシ是レ蓋シ關係人毫モ不測ノ損失ニ罹ルノ患ナキカ故チ以テナリ

日本ニ於テ現今ノ慣例トスル所ハ裁判廳及ヒ其他ノ官衙トモ一週ノ末ニ半日ノ休暇ヲ賜フ斯クノ如キ場合ニ一日ノ猶豫ヲ與フルコ無キハ關係人等能ク意チ用ヒ官衙ノ尙ホ事務ヲ執ルニ在テ訴訟手續ヲ爲スチ得可ケレハナリ

法律上一月並ニ一年ノ期日ハ刑法ト同一ニ定メタリ(看刑法草案第六十一條)

○ 第二十二條

〔第五十五號〕 凡ソ訴權或ハ上訴等權利ヲ實行シ又ハ關係人或ハ證人トシテ法廷へ出頭スル等ノ義務ヲ遵守スルニ附キ法律ニ定メタル

期限ハ其人居住ノ地若クハ十里以内ノ地ニ於テ其手續ヲ行フ可キ通常ノ場合ニ適用スル者ナリ○然ルニ其距離往々遠隔ニシテ其人ノ旅行或ハ書類送達等ヲ要スル時ハ經過ス可キ里程ノ遠近ニ應シウホワイヤシュ アンボワイデビエス 期限ヲ増展スルチ以テ本然至當ノコナリトス○凡ソ此増展ノ事タル何レノ法條ニテモ期限ヲ定ムル者ハ暗ニ其意ヲ包含ス

〔附言〕 一里ハ歐洲ノ一「リユ」ト大約相同シ即チ二「キロメートル」八百九十一「メートル」ナリ

每十里一日ノ増展ハ頗ル大ナルチ覺ユレハ異日減少スルコアル可キモ現今普通ノ旅行方法ニ照ス時ハ其當チ得タル者トス又陸路ヲ取ルモ海路ヲ取ルモ共ニ往復ヲ爲スチ得可キコ多カル可シ○法律ハ陸地ニ就テ計算ス可キチ命シタリ是レ其終始連續スルチ以テナリ

然レ此島地ヨリ島地へ渡航スルヲ要スル時ハ每一日經過ス可キ里程ヲ半減セリ是レ即チ其期限ヲ二倍スルニ等シク一日五里詰ノ割合ト爲ル者ナリ

又送達書類遠隔ノ地へ交付シ或ハ回答ヲ要シ若クハ遠地ニ在ル關係人書類ヲ差出シ或ハ自身出庭ス可キヲ有リ是等ノ場合ニ於テハ其距離ヲ通過スル二度ニ及ヒ所謂ル往復ヲ要スルヲ以テ其期限ヲ二倍スル者ナリ○上告（フールボリ、アンカッサシオン）第五百七十三條及ヒ裁判管轄ヲ定ムルノ訴（アレ、エルトロル）第六百二條ノコトニ就キ其實例ヲ見ル可シ

總テ著名ノ地彼此ノ距離ハ官其里程表ヲ製シテ之ヲ示ス○勿論其距離ハ都府村邑間ニ於テ算定シタル者ニテ決シテ其人ノ居住セル處ニ就テ之ヲ求ム可カラス唯其人ハ何レノ府何レノ邑ニ在ルカヲ知ルヲ以テ足レリトス

又外國間ノ期限ニ至テハ特別法ヲ設ケ數國ヲ聯テタル各區毎ニ期限ヲ定ム可シ是レ外洲諸國相互間ニ實行スル所ナリトス○是等外國ト日本トノ旅行ハ往復トモ更ニ異ナル所ナキカ故ニ諸外國ニ於テ日本トノ間ニ定メタル期限ヲ取テ之ヲ用フルヲ得可シ

〔第五十六號〕然リト雖モ外國ニ在テ罪ヲ犯シ而シテ其罪日本ニ於テ處斷ス可キ刑法（第五條以下）ニ記載シタル特別ノ場合ニ於テハ犯罪ノ日ヨリ日本ニ於テ訴ヲ起スノ日ニ至ルマテ悉ク之ヲ期滿免除ノ期限中ニ算入シ敢テ兩國間ノ距離ニ應シテ増展ヲ行フヲナシ○蓋シ期滿免除ハ原ト忘失ヲ以テ主旨トスルヲ見レハ距離ノ遠隔忘失ヲ遲延セサルハ楮テ置キ其却テ之ヲ速カナラシムルヲ會得ス可シ

第二十三條

新法

〔第五十七號〕 凡ソ訴訟關係人其期限實際不足ニシテ之ヲ遵奉スル
 ノ難カリシ旨ヲ陳シ之ヲ證明セント欲シハ敢テ難キニ非サルナリ左
 レド法律ハ期限ノ精密ニス可キヲ以テ原則ト定メ之ニ違フ時ハ失
 權ヲ來ス可シトセリ然レモ亦一二ノ變則ヲ設クルヲ必要ニシテ就
 中上訴ノ如キハ關係人ノ爲メニハ裁判上ノ決斷ニ對スル最後ノ方
 法ニシテ其期限刑事ニ關シテハ頗ル短少ナルカ故ニ之ニ就キ變則
 ヲ設ケタリ○該變則タル第三百六十三條及ヒ第三百六十四條ニ記
 載スル所ナリトス

○ 第二十四條

〔第五十八號〕 凡ソ訴訟書類ハ關係人チシテ舉トク之ニ服從シ又ハ至
 當ノ理由アラハ法律上之ニ對抗スルヲ得セシムルカ爲メ法律ハ勉
 メテ之ヲ知ラシムルヲ要ス○然レモ之カ爲メニハ單ニ送達通知ノ
シキフヒカシヨシ、ノチフヒカシヨシ

ミチ以テ足レリトセス尙ホ能ク法式ニ循フテ該交付通達ノ精確且
 ツ正實ナルヲ保證セサル可カラス

歐洲諸國就中佛國ノ如キハ各裁判所ニ宣誓附屬シタル一種ノ官吏
 ナル使吏ニ於テ書類ノ送達ヲ掌トル者トス○使吏ハ正本一通ヲ作
 リ送達ノ旨ヲ記シ其送達ヲ要メタルノ人若クハ裁判官ノ氏名ヲ示
 シ送達ノ旨ヲフヒカシヨシ往々判決書ノ謄本ヲフヒカシヨシタリヲ錄シ及ヒ送達ヲ受ケタル人
 ノ盡ス可キ義務ヲ掲ク○又使吏ハ訴訟關係人ニ正本ヲ交付シス唯
 正本該本ハ送達ヲ爲サシメタル者ノ手ニ遺存スト同一ナル謄本ノ
 ミチ交付シ而シテ正本及ヒ謄本ニ其交付シタル旨並ニ之ニ關スル
 一切ノ狀況ヲ附記ス

〔附言〕 佛語「ウヰツシエー」(使吏)トハ「ウヰス」ナル古語ニ由來フ「ウヰ
 スハ門ノ義ナリ蓋シ使吏ハ法廷ノ門ヲ衛リ公廷審理中秩序ヲ監

是等ノ法式タル少シク繁劇ナル可ク隨テ多少ノ遲延失費ヲ生セサルニ非サレトモ日本ニ於テ悉ク之ヲ除却スルヲ得サリシ所以ハ被告人又ハ民事原告人等必ス其知ル可キ事件ヲ知ラスト稱シ殊ニ期限經盡ニ因リ其失權ヲ來ス可キノ際ノ如キニ於テハ其弊ノ一層劇シカル可キヲ以テナリ○果シテ然ル如キアラハ事實ノ摸稜ト瞬^{エンセロチチエド、}遂ト愈^{ラントウレ}大ナルニ至ル可キナリ

然リト雖モ檢察官ヘ爲ス可キ通達ニ至テハ書記ノ簡單ナル通知アルヲ以テ足レリトス是レ蓋シ檢察官ハ惡意ヲ挾ムヲナキヤ疑ヲ容レス且ツ書記トノ往復モ平常容易ナルニ因ルナリ

又時トシテ或ハ關係人ニ對シ書記ノ書翰ヲ以テ通知ヲ爲スノヨコテ足レリトスルヲアリ○但、該書翰タル郵便局ヘ委任シテ書留^{レセヒツセ}ノ手

續テ用ヒ以テ其到着ヲ確實ナラシメ且ツ書留簿中ニ受取人其證ヲ具存スルアルヲ要ス

〔第五十九號〕日本法案ハ本件ニ關シ使吏ヲ採用セス使吏ナル者ハ日本ニ於テ未ダ曾テ設置アラヌ又恐ラクハ設置セサル可シ既ニ其設置アル諸國ニ於テモ其費用多ク又弊害ノ生スルアルヲ以テ之ヲ廢止センヲ企圖セリ○是ヲ以テ日本ニ於テ送達事務ヲ掌トル者ハ書記ナリトス○又此事項ニ附テハ宣誓シタル屬吏又ハ特別ノ官吏ニ命ジ書記其責ニ任ス可シ

此點ニ就テハ行政規則ノ設ケ有ルヲ緊要トス

凡ソ書記ハ其管轄地外ニ出テ事ヲ處スル能ハサルカ故ニ他管ノ書記ニ書面ノ文體ヲ通報シ之ニ請求囑託シテ送達及ヒ交付ヲ爲サシム○斯ノ囑託ヲ受ケタル書記ハ受託ノ故ヲ以テ事ヲ理スルニ因リ

其旨ヲ書面へ記載ス可シ

法律ハ其條項中送達ノ爲メ他ノ官吏ヲ命スルコト有ル可キ場合ヲ豫メ陰示シタリ○是レ豫審判事ヨリ發シタル勾引狀ヲ公力者ニ委任シテ交付セシムル場合ノ外他ニ多ク其例ヲ見ルコトナシ公力者ヲ命スルノ理由ハ之ヲ解スル難カラサルナリ(看第四百四十七條)

第二十五條

〔第六十號〕 草案ハ佛法ト異ナリ正勝各一本ヲ用ヒスシテ正本二通ヲ用フ可キヲ命シタリ○是レ止テ其各稱ヲ異ニシタルコト過キスト雖モ事實ニ照シテ之ヲ考フレハ其當ヲ得タル者トス○蓋シ佛國ニ所謂ル贖本ナル者ハ素ト正本ト同一ノ事項ヲ記載シ其署名モ異ナラサレハ第二ノ正本ト謂テ毫モ不可ナルコトナシ
凡ソ書類ハ直ニ關係人ニ交付スルヲ以テ其住所ニ送達スルニ優レ

リトスル所以ノ者ハ本人ニ於テ其送達ヲ受ケタル事件ヲ了知スルノ確實ナルニ因ル是ヲ以テ本人所在ノ地何處タリトモ本人之ヲ受クルコトヲ諾シタル時ハ直ニ之ニ交付ヲ爲スコトヲ得但シ其署名認印ヲ以テ其承諾ヲ證シ若クハ其之ヲ拒絕シ或ハ之ヲ爲ス能ハサル時ハ其旨ヲ記載シテ以テ之ヲ證明ス可シ

又假令ヒ現住所不分明ナルトモ之カ爲メ敢テ送達ヲ爲サシムル者ノ障碍ト爲ルコト無カル可シ○受取人其住所ヲ不分明ナラシメタルハ多クハ其過失ト謂ツ可ク且ツ若シ之ヲ以テ送達ヲ爲スノ障碍タルニ足レリトセハ故ラニ其住所ヲ隱瞞スル者比々續出スルニ至ラソ○是ヲ以テ送達ハ其前ノ分明ナル住所へ爲ス可シ何トナレハ凡ソ移住セントスル者ハ率テ自己ニ關スル一切ノ送達事宜ニ就キ前住所へ特ニ囑託ヲ爲ス可ケレハナリ

戸長へ交付ヲ爲スハ送達ヲシテ有効ナラシムル最後ノ術策ナリト
ス○而シテ法律ハ該官吏ニ命スルニ成ル可ク速ニ名宛人へ書類ヲ
送致ス可キヲ以テス

令狀帶行人自カラ其任ヲ盡シタリト申立ツルモ未タ以テ破フル可
カラサル確證ト爲スニ足ラス○佛國ニ於テハ使吏ノ申立此點ニ關
シ及ヒ其他ノ職ヲ行フニ方リ相違ノ證憑舉クルニ至ルマテ信實ノ
者ト看做ス

日本ニ於テハ小吏ノ申立斯ノ如ク權力ヲ有スルヲ許サス然レモ其
誠實ト精勤トニ至テハ之ヲ推測スト雖モ總テノ方法ヲ用テ反對ノ
證據ヲ舉グルヲ許シタリ

交付ノ時日ヲ記載スルハ出廷若クハ上訴ヲ行フ可キ期限ノ經過ニ關
スルニ因リ實ニ緊切ナリトス又交付ヲ爲シタル人ノ記名モ次條ノ

場合及ヒ闕席裁判ノ通知等ニ關シテハ殊ニ其重要ナルヲ日附ト異
ナラス（看第四百十五條）

〔第六十一號〕 其制裁ハ嚴重ナリ則チ書類ノ無効ニ屬スルヲコシテ
既ニ關係人ヲ保護スルニ充分足レリト謂フ可シ

又法律ニハ別ニ明言スル所ナシト雖モ書類ノ一旦無効トナルカラ
ハ書記ノ自費ヲ以テ更ニ之ヲ改作セサル可カラス且ツ遲延ノ爲メ
關係人中ノ一方ニ損害ヲ加ヘシナラハ之ニ科スルニ民事上ノ責任
ヲ以テス可シ

末項ノ場合ニ至テハ無効ノ制裁ヲ附セス○然レモ書記正本一通ヲ
其局へ返付セス剩サヘ之ヲ紛失スル如キアラハ亦民事上其責ニ任
セサル可カラス

第二十六條

新法

〔第六十二號〕 或ル日子又ハ或ル時刻ニ於テ送達書類ノ交付ヲ爲ス時ハ或ハ其紛失シユール易ク又ハ名宛人ノミニ眞ノ交付ヲ爲スニ至リ既ニ遅延ニ及フノ恐レ莫シトセス

日子ニ就テハ祭日及ヒ休日ハ人多ク其住居ヲ離レ他行スルニ因リ之ヲ扣除スルヲ以テ至當ナリトス時刻ニ至テハ交付ノ爲メニ民衆ノ静息ヲ妨碍スルコトナキヲ要ス○右ノ趣意ヲ達スルニ最モ簡易且ツ確實ナル制限ハ日ノ出沒ヲ取ルニ在リ日ノ出沒ハ其時刻日毎ニ變スルトハ雖モ亦自カラ確定セルアリ而シテ書類ヘハ交付ノ時刻ヲ附記スルヲ以テ法律ノ遵奉ヲ審驗スルコトヲ得可シ何レノ場合ニ於テモ名宛人現在シテ扣除ノ時日タリトモ自カラ送達ヲ受クルヲ肯シタル時ハ其交付有効タル可シ
本條ヲ終ルニ臨ンテ須ラク注意ス可キコト有リ法律ニ命シタル法式

第二十七條

チ悉ク守ルニ於テハ名宛人實際送達ヲ受ケサル旨ヲ主張スルコト能ハス○或ハ其事實眞ナルコトアル可キモ對手タル者法ヲ守ルニ於テハ苟モ自己ニ關セサル事故ノ爲メニ害セラル、コト有ル可カラス

〔第六十三號〕 此ニ於テモ亦法律ハ主要タル者ト看倣シタル法式ノ違背ニ因ル無効ノコトヲ規定ス

凡ソ日附ナキノ書類ハ不充分ナリトス蓋シ書類ノ効力タル之ヲ作リタル時期ニ關スルコト多シ是ヲ以テ免職或ハ辭職ノ官吏ハ其職務ヲ去リタル後ニ至テ書類ヲ作ルコト能ハス○抑官吏ハ其管轄地外ニ於テ職ヲ行フコト能ハサレハ場所モ亦官吏ノ管轄ニ其影響ヲ及ホス可シ○署名モ亦書類本文ヲ認ムル者屬吏タルコト多キニ因リ一層緊切ナリトス且ツ何レノ場合ニ在テモ署名ナキ書類ハ止テ草稿ト看

做スチ得ルニ過キサルナリ

每葉ニ順序ノ番號(丁數附)及ヒ花押(省略ノ署名)ハ書類具成ノ後詐欺
チ企ルヲ防クヲ以テ目的トス蓋シ丁數ノ編記ハ紙葉ノ撤去ヲ防
キ花押ハ紙葉ノ變換ヲ防クニ在ルナリ

官衙ノ印章若シハ印紙ヲ用フルハ萬邦普通ノ慣例ニシテ書類出處
ノ保證ヲ增加ス蓋シ該印章等ハ之ヲ署名ニ比スルニ偽造較難ク且
ツ偽造ノ罪モ亦頗ル重シトス○又官印ヲ捺スヲ能ハサル場合ニ就
キ切要ナル變例ヲ設ケタリ

人民ノ私印ニ至テハ署名ト共ニ之ヲ捺スノ慣習永ク日本ニ存スル
ヲ望ム可キヲナリトス然レモ私印ハ詐欺ヲ以テ之ヲ捺スルノ易キ
カ故ニ之ヲ以テ署名ニ代用スルハ至當ナラス○然レモ若シ其人署
名スルヲ能ハサル時ハ官吏或ハ特撰ノ證人ノ面前ニテ其印ヲ捺シ

而シテ其旨ヲ附記ス可シ

第二十八條

〔第六十四號〕 正本或ハ謄本ヲ作ルニ方リ追加、刪除、改正等ヲ要スル
ヲアリ○法律ハ更ニ正本又ハ謄本ヲ淨書スルヲ命セサレトモ亦書
類具成ノ後變造ヲ爲スノ詐欺ヲ制遏スルノ防備ヲ爲セリ○是レ文
字ノ改竄即チ一字面へ他ノ文字ヲ記スルヲ禁スル所以ナリ故ニ若
シ文字ヲ改メント欲セハ或ハ行ノ間ニ插記シ若シハ欄外ニ添記シ
或ハ單ニ之ヲ塗抹ス可キノミ而シテ各變更ハ之ヲ施シタル處へ起
案者ノ認印又ハ花押ヲ捺ス可シ又若シ文字ヲ削除シタル時ハ只之
ニ畫線スルノミニシテ須ラク其文字ノ尙ホ讀ミ得ルヲ要ス且ツ書
類ノ紙尾ニ無効トシテ抹殺シタル文字ノ數ヲ附記ス可シ
變改シタル書類ノ謄本中ニハ謄寫人直ニ本文ニ適法ノ追加ヲ記入

新法

シ及ヒ適法ニ抹殺シタル文字ヲ削除スルヲ得然レモ削除ノ字數ヲ
附記スルヲ要ス若シ其變改規則ニ戻ル時ハ之ヲ書類ノ本文へ記入
シテ尙ホ其文字ノ讀ミ得可キ者ハ之ヲ本文ヨリ削除ス可カラス亦
特ニ其反則ナル旨ヲ記載ス可シ

以上ノ諸法或ハ必要ノ者ナレトモ瑣末ニ屬スルヲ以テ前條ノ場合
ト異ナリ敢テ其書類ノ無効ヲ來タサス然レモ官吏ニ對シ罰金ヲ科
ス可有ル可シ

又正本若クハ謄本ノ起案者常人タル時ハ違則ノ變改ヲ無効トスル
ノミニテ其罰既ニ足レリトス

尤モ起案者ニシテ過失アルノ證ハ固ヨリ之ヲ舉ケサル可カラス○
其違則ノ記入書類ノ本文ト手跡ヲ同シフスルニ於テハ其舉證容易

ナル可シト雖モ文字ノ塗抹ニ至テハ管ニ之ヲ證スルノ難キノミナ
ラス恐ラクハ遂ニ之ヲ證スル能ハサルヲ有ル可シ殊ニ書類變造ニ
附キ利アル者ニ於テハ書類ヲ作りタル後ニ至テ塗抹、刪除スルヲ有
ル可キナリ

第三十九條

〔第六十五號〕 夫レ法律ハ既往ニ溯ル可カラストノ原則ハ諸法中刑

ノ、レト、ロ、ア、ク、チ、ヒ、テ、

法ヲ以テ之ヲ遵守スルノ最タル者トス故ニ刑法草案第三條ニ於テ
該原則ヲ公示シタリ

或ハ法廳ノ構成管轄及ヒ刑事ノ訴訟ニ關スル法律ニ於ケルモ亦同
シカル可シト思惟スル者モ有ル可シ○然ルニ日本法案ノミナラス
諸外國ノ法律ニ至ルマテ舉トク該法律ニ附テハ法律ノ反致ノ効ヲ
採用セリ

レト、ロ、ア、ク、チ、ヒ、テ、

抑、裁判所ノ構成、其管轄及ヒ訴訟ノ手續ナル者ハ社會ノ利益ト併セテ被告人ノ利益ヲ旨トシ眞理發見ニ至ルノ方法タルニ過キサル者ト思料ス可シ○是ヲ以テ立法官タル者實際ノ經歷ニ藉リ右ノ點ニ關シ全部又ハ幾部ニ附キ舊制ヲ改正スルヲ有ルハ偏ニ新制新法ニ從ヘハ社會ト被告トノ利益ヲ保護スルニ益、厚キヲ得可シト看做シタルニ因ル然ラハ則チ舊制舊法ハ直ニ其勢力ヲ失フ可キナリ又被告人共犯罪舊訴訟法時代ニ在テ行フタル者ナレハ舊法ニ循ヒ裁判セラル可シト主張スルヲ得ス○蓋シ被告人ハ新法ニテ錯誤ノ原因ナリト認メタル方法ヲ維持スルノ特權アルヲナシ○純然タル刑律ニ附キ其犯罪以後ニ定メタル刑罰較、重キ時ハ則チ被告人ニ於テ其責、前ヨリ太々嚴ナリシナレハ謹テ其本分ヲ守ル可キナリト謂フヲ得可シ是レ法律ハ其嚴責ヲ科セサル所以ナリ然リト雖モ

某々ノ裁判官ニ依リ某々ノ手續ニ依テ裁判セラレ、ナレハ嘗テ犯罪ヲ行ハサル可キナリト謂フヲ得ハ公理ニ背キ人心ニ悖ルト謂ハサル可カラス

茲ニ採用セル原則ノ結果トシテ新法律ニ上訴ノ權ヲ改定セハ(本法ニ採用セル如シ)即チ之ヲ行フヲ得可シ但、上訴ノ目的タル裁判、新法頒布ノ際ニ及テ既ニ破棄ス可カラサル者トナラサルヲ要ス之ヲ翻ヘシ從來採用セシ上訴ノ途ヲ廢絶スル時ハ未決ノ被告復ヒ其權ヲ行フヲ能ハス左レト斯ノ如キ場合ハ本法ニ見サル所ナリ又若シ新訴訟法ノ頒布ノ際ニ方リ起訴ニ附キ已ニ舊法ニ循ツテ着手シタル手續ハ之ヲ繼續ス可シ○此場合ハ本法頒布ノ際必然生スルヲ有ル可シ

異邦ノ論者中二三ノ輩ニシテ前述ノ說ヲ可ナリトスレトモ訴訟法

ハ其本原ナル法律ト同シク決シテ既往ニ溯ル者ニ非スト主張スル者アリ其説ヲ見ルニ抑法律ハ既得ノ權利ヲ剝奪スルノ力アルニ非サレハ既往ニ溯ルト謂フ可カラス是レ實ニ不正ノ事ニシテ吾人ノ避ク可キ所ナリ而ルニ茲ニハ既得ノ權利アルヲナケレハ反致ノ効モ有ルヲナシト

夫レ斯ノ如キ言語ヲ用フルノ理論ハ文字上ノ議論ニ過キサレノミ抑法律ハ其頒布以前ニ遂ケタル事件ニ適施セハ則チ既往ニ溯ル者ナリト謂ハサル可カラス○尤モ既得ノ權利ニ對シテ其法律ノ効ヲ溯ラシムル如キハ正理ノ容レサル所ナルヲ注意ス可シ然ルニ訴訟法中ニハ既得ノ權ナキニ因リ之ヲシテ既往ニ溯ラシムルモ有効ナリトス

第三十條

〔第六十六號〕 抑本法ハ管轄及ヒ訴訟手續ヲ定ムル普通法ナリ○其趣旨トスル所ハ従前同事件ニ附キ普通法タリシ舊來ノ法令ト慣例トニ代ルニ在リ○又既ニ陸海軍律、出版條例、稅關規則等特別ノ或ル犯罪ニ關シ其特別ノ法律ナリ

刑法ニハ既ニ刑罰ノ事ニ就キ従前ノ法律ト將來ノ法律トヲ區別シ是等特別法ノ適用ヲ規定シタリ〔第十條〕

本法モ亦同様ナル區別ヲ設ケタリ則チ現時既ニ管轄及ヒ訴訟手續ノ普通法ニ牴觸スル特別法ハ新普通法ニモ亦牴觸シ引續テ其力ヲ保存ス可シ

將來新法ト對照シテ制定スル特別法ハ明ニ其牴觸スル旨ヲ掲ケサル時ハ都テ新法ヲ認准シタル者ト看做ス

第一篇

責罰裁判所

以下刑事裁ノ構成及ヒ管轄
レゾレシヨ
タルガニサシヨ
コンベダンス

岩野新平譯

通則

ザスボシヨ、コンミユンス

要旨

ソノメール

第六十七號 裁判所ノ構成及ヒ管轄ニ係ル總則ノ重要ナル事ザスボシヨ、コンミユンス

〔第六十七號〕外國ノ諸法典ニハ民事刑事ノ諸裁判所ノ構成及ヒ管轄ノ總則ヲ記載スル稀ニシテ特別ノ法律中ニ非サレハ之ヲ見ルヲ得ス而シテ其總則タルヤ他ノ規則ニ據リ半ハ廢止セラレタル者ナレハ之ヲ研究シ之ヲ適用スルニ附キ甚タ困難ナリ

佛蘭西ニ於テハ現今裁判所ノ構成及ヒ管轄ノ基礎ハ第一帝政ノ法律ニ淵源ス(佛治○千八百八年三月三十日、千八百十年七月六日及ヒ八月十八日ノ勅令、千八百十年四月十日ノ法律)然レモ特別法ハ該法

律ニ一部分ノ變更ヲ爲セリ而シテ千八百三十二年治罪法ノ全部ヲ
審查シ千八百五十六年其一部(自第七十九條至第二百十六條)ヲ審
査シテ其變更ノ二三ノ者ヲ之ニ記入シタリ

日本草案ハ之ニ注意シテ此重要ナル事項ヲ詳記セリ蓋シ該事項ハ
法典ノ目的タル訴訟手續ヲ理會スルニ必要ナルヲ以テナリ就中管
轄ノ事モ最モ重要ナル者トス何トナレハ管轄違ノ裁判所ヨリ言渡
シタル判決ハ概シテ無効ナルカ故ニ爲メ屢終審ノ判決ニ甚シキ
遲緩ヲ生シ且ツ無益ノ費用ヲ生スルニ至レハナリ
草案ニ於テ裁判所ノ構成及ヒ管轄ニ關スル重立タル法則ハ佛蘭西
ノ法律ニ符合ス就中民刑兩法廳ノ合一即チ犯罪ノ輕重ニ從ヒ其審
判ノ權ヲ民事裁判所ノ等級ニ應シテ許與スルカ如キハ最モ其符合
スル者トス

陪審官ノ組織及ヒ其管轄モ亦佛蘭西法律ヲ摸擬セリ然レモ總テ是
等ノ點ニ附テハ著シキ改良ヲ爲セリ

草案ハ各裁判所ノ構成及ヒ管轄ヲ各別ニ記載スルノ前ニ通則ノ名
義ヲ以テ各種ノ刑事(附言アリ後ニ記ス以下之ニ倣フ)裁判廳ニ通用
スル規則ヲ記載ス吾人ハ既ニ此記載方ノ便利ナルヲ指示シタリ

(第六號)

(附言) 此處ノミナラス、其他裁判廳、犯罪ノ起訴、公犯ニ關スル法則
ノ所ニ用ヒタル「[○]シリミ[○]子[○]ル[○]」(刑事)ノ形容詞ハ違警罪、輕罪及ヒ重
罪ノ事項ニモ用ユ可キヲハ敢テ注意スルニモ及ハサル者ナリ故
ニ此語ハ本書ノ題辭ニ於ケルカ如ク屢、沉博ノ意義ニ用ユ元來此
語ハ羅典語ノ「[○]クリマン[○]」ナル語ヨリ來ル「[○]クリマン[○]」ハ重罪ノ意義ヲ
有シ亦特ニ訟告ノ意義ヲ有スル者タリ

通則

アツキユザン

第三十一條 普通ノ刑事法廳ハ民事法廳ニ合一シテ同一ノ院及ヒ裁判所ニ屬ス(ドロー、コンセン、ガユスチスベナル、レイユニー)○草第六十一條、第六十六條、第七十五條、第八十六條、第九十三條、第一百一條○佛治第三百三十九條、第四百七十九條、第五百二十二條、千八百十年四月二十日ノ法律

陸軍及ヒ海軍ノ裁判所ノ構成及ヒ管轄ハ別段ノ法律ニ據リ規定セラ(バルチキユリエール)ル(治第二十九條、○草第四十八條、○千八百五十七年六月九日ノ陸軍裁判所ノ佛蘭西法典、千八百五十八年六月四日ノ海軍裁判所ノ佛蘭西法典)

裁判所ノ區劃 第三十二條 各等級ノ裁判所ノ位置及ヒ區劃ハ司法卿ノ申立ニ依リ(マクレ、シエーシエ、エタンシエ、プロボシツシヨ)皇帝ノ勅令ヲ以テ定メラル可シ(治第三十二條)

判事ノ任官 各等級ノ本官判事及ヒ補員判事ハ右同一ノ法式ニ從ヒ任セラル可シ(シユーシユ、チチユール、シユーシユ、シユプレアン)

(治零)

檢察官 第三十三條 各院又ハ裁判所ニ政府ノ目代即チ檢察官一人ヲ置ク(治第三十三條、コンミセール、チユ、グーベルマン、ミニシテール、ピラブリツク)

檢察官ハ一人若クハ數人ノ補員ヲ置クヲ得
院及ヒ輕罪裁判所ノ檢察官吏ハ判事ト同一ノ法式ニ從ヒ任セラル可(トリヒユノ、コレクシヨシニテール)

任官 違警罪裁判所ノ檢察官吏ノ任官ハ第六十三條ニ規定セララル可シ(治零、○千八百八年三月三十日ノ佛國勅令、千八百十年ノ法律)

檢察官ノ職務 第三十四條 刑事ニ附キ檢察官ノ職務ハ左ノ如シ(フオンクシヨ)

- 一 犯罪ヲ搜索スル事(ルツセルゼイ)
- 二 豫審及ヒ公庭取調ノ所爲ト犯罪ニ附キ法律ノ適用ト判事ニ(アンストリユクシヨ、フロセチユール、アツブリカツシヨ)請求スル事(ルツネリール)
- 三 法廳ノ命令及ヒ判決ノ執行ヲ爲サシムル事及ヒ概シテ法廳ニ(デシシヨ、エキセキユツシヨ)

通則

於テ社會ノ利益ヲ保護スルヲ(治第三十四條)○草第百二十二條以下、第百二十八條以下、第百三十八條以下、第四百三十二條以下、第百六十二條以下、○佛治第二十二條以下、第二十九條以下、第百六十五條、第百七十七條、第百七十一條以下、第三百七十六條)

續キ

書記

第三十五條 檢察官吏ハ常ニ院及ヒ裁判所ノ公廷ノ立會ハサル可カラス然レモ檢察官吏ハ判事ノ評議ニ出會ス可カラス但、此二箇ノ場合ニ違フ時ハ凡テ判決ハ無効ナリトス(治第三十五條)○草第五百三十二條第五項○佛蘭西千八百八年ノ勅令第八十八條、佛治第二百二十四條、第二百七十三條)
第三十六條 院及ヒ裁判所ニハ一人又ハ數人ノ補員書記ト一人ノ本官書記アリ(治第三十六條)

任官

書記及ヒ其補員ハ司法卿之ヲ任ス但、司法卿ハ書記及ヒ其補員ノ屬ス可キ裁判所又ハ院ニ具申ヲ求ムルヲ得(治零)○草第六十五條、第七十一條、第八十二條、第八十八條、第九十六條ノ二、第百四條○佛訴訟法第四百十條、千八百八年ノ勅令、千八百十年ノ法律)

續キ即チ職務

第三十七條 書記又ハ其補員ノ一人ハ公廷及ヒ豫審ノ所爲ニ立會フ可シ書記又ハ其補員ハ公廷始末書又ハ調書ヲ作ル可シ(治第三十七條)書記及ヒ其補員ノ差支ノ場合ニ於テハ補員判事又ハ本官判事代理ヲ爲ス可シ(治零)

書記ハ裁判言渡書ノ正本及ヒ其他法廳ノ書類ヲ保存ス可シ(治第三十七條)○草第百六十二條、第三百六十六條以下、第百二十九條以下○佛治第六十二條、第三百六十九條、第三百七十條、第三百七十二條、第六百條、第六百一條)

通則

管轄○始審及
ヒ終審

第三十八條 公訴及ヒ私訴ニ附テノ始審及ヒ終審ノ裁判管轄ハ各等級ノ裁判廳ノ爲メニ控訴ノ權ニ關スル第三篇ノ法則ニ據リ規定セラ
ル可シ(治零○草第三百九十六條、第四百二十四條○佛治第七十二條
以下、第九十九條)

管轄○犯罪等
級

第三十九條 犯罪ノ等級ニ基ク管轄ハ左ノ如ク之ヲ規定ス

違警罪ハ違警罪裁判所ニ依リ裁判セラル可シ

輕罪ハ輕罪裁判所ニ依リ裁判セラル可シ

重罪ハ重罪裁判所ニ依リ裁判セラル可シ

各等級ノ犯罪
ノ併合

然レモ若シ同一ノ人カ同時ニ重罪及ヒ輕罪又ハ輕罪及ヒ違警罪ノ訴
ヲ受ケタル時ハ其罪附帶セストモ最上等ノ裁判廳ハ二種ノ犯罪ノ裁
判ノ爲メニ管轄ナリトス(治第三十八條)

然レモ若シ附帶セサル下級ノ犯罪ノ豫審完全ナラサル時ハ受理シタ

ル裁判所ハ職權ニ依リ又ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ依リ其犯
罪ノ裁判ヲ管轄裁判所ニ送ルコトヲ得(治零○草第三百十五條、第三百七
十六條以下、第四百六條以下、第四百三十一條以下、○佛治第三百十七條
以下、第七十九條以下、第二百十七條以下、第三百六十五條、千八百七十
三年一月二十七日ノ法律)

附帶ノ犯罪 第四十條 左ノ者ハ附帶ノ犯罪ト看做サル可シ

一 同一ノ時及ヒ同一ノ場所ニ於テ一人又ハ集リタリ數人ニ依リ
犯サレタル數罪

二 異ナレル時又ハ異ナレル場所ニ於テ互ニ通謀シテ種々ノ人ニ
依リ犯サレタル數罪

三 同一ノ人又ハ他ノ人ノ犯罪ノ執行ヲ容易ニシ又ハ其無罪ヲ確
保スル爲メ犯シタル數罪(治第三十九條○草第三百四十九條、第
三十一條)

通則

四百三十二條第二項、第五百六十八條○佛治第二百二十六條、第二百二十七條、第五百二十六條、第五百二十七條、第五百四十條

管轄即チ犯罪ノ場所

第四十一條 同シ等級ノ裁判所ノ間ニ於テハ豫審及ヒ公判ノ爲メノ管轄ハ罪ヲ犯シタル管地ニ依リ定メラル可シ

捕獲ノ場所

然レモ若シ犯罪ノ場所ニ附テ不分明ナル時ハ管轄ハ被告人ノ捕獲セ

ラレタル區域内ノ裁判所ニ屬ス(治第四十一條○草零○佛治第二十三

條、第二十四條、第二十九條、第三十條、第六十三條、第六十九條)

續キ

第四十二條 若シ數箇ノ裁判所ノ管轄内ニ於テ同時ニ又ハ繼續シテ

同一ノ罪ヲ犯シタル時ハ是等ノ裁判所中被告人ノ捕獲セラレタル地

ノ裁判所ハ豫審及ヒ公判ノ爲メニ撰取セラル可シ

異ナレル管轄内ニ犯サレタル異別ノ數箇ノ犯罪ノ場合ニ於テモ亦右

ニ同シ(治第四十一條○草第四十條ノ第二項)

續キ

第四十三條 若シ犯罪ノ場所ニ因リ管轄ナル數箇ノ裁判所管轄外ニ

被告人ノ捕獲セラレタル時ハ被告人ハ是等ノ裁判所中最モ近キ裁判

所ニ送ラレ及ヒ入監セラル可シ

然レモ若シ令狀ニ依リ捕獲ヲ爲シタル時ハ被告人ハ右ノ令狀ヲ發シ

タル判事ノ前ニ送ラル可シ但、第三百三十七條ノ適用ヲ除ク(治第四十二

條○草第三百三十六條○佛治第九十八條、第百條)

續キ

第四十四條 數箇ノ裁判所ノ管轄ナル場合ニ於テ若シ前以テノ捕獲

ヲ許サレサル時又ハ若シ前以テノ捕獲ヲ爲サ、リシ時ハ第一番ニ豫

審又ハ公廷ノ取調ヲ始メタル裁判所獨リ管轄ナリトス(治第四十三條

○草第四十五條)

從犯ノ管轄 第四十五條 從犯ハ主タル犯人ヲ裁判スル爲メニ管轄ナル裁判所ニ

依リ裁判セラル可シ

數人ノ主犯 若シ種々ノ裁判所ニ依リ裁判セラル可キ數箇ノ主タル犯人アル時ハ
是等ノ裁判所中第一番ニ事件ヲ受理シタル裁判所ハ其裁判ノ爲メ撰
取セラル可シ

取除カレタル
場合

一項及ヒ二項ノ場合ニ於テ高等法院及ヒ大審院ノ管轄ニ關スル例外
并ニ陸軍及ヒ海軍ノ法律ニ據リ記載セラレタル例外ハ遵守セラル可
シ(治第四十四條○草第九十八條○佛治第三百七條、第三百八條第五百
一條)

管轄即チ種々
ノ裁判所

第四十六條 若シ前數箇ノ場合ニ於テ此法典中後ノ法則ニ一致シテ
裁判管轄ヲ定ムル訴ヲ爲セシコナシ許多ノ裁判所カ同一ノ事件ヲ受
理シ而シテ同一ノ被告人ニ對シ二箇又ハ數箇ノ裁所アル時ハ裁判セ
ラレタル物ノ効ハ第一番ニ確定トナリタル裁判ニ存ス(治零○草第五
百六十四條)

續キ即チ外國
ニ於テノ犯罪

第四十七條

外國ニ於テ

於テ犯シタル罪ニシテ日本ニテ罰ス可キ者ナル

時ハ管轄ハ被告人ノ捕獲ノ在リタル區域内ノ裁判所ニ屬ス

若シ闕席ニ因リ裁判セラレ得ル所ノ犯罪ニ關スル時ハ管轄ハ被告人
ノ分明ナル最終ノ住所ノ裁判所ニ屬ス

此住所ノ無キ時ニ於テハ第四篇ノ第三章ニ一致シテ裁判管轄ヲ定ム

ルノ訴ヲ爲ス可シ(治第四十五條○草第六百四條○刑草第四條乃至第

八條○佛治第五條乃至第七條)

第四十八條

續キ即チ商船
内ノ犯罪

商業船ノ中ニテ

犯サレタル罪ニ對スル管轄及ヒ訴訟ノ

法式ハ特別ナル法律ニ據リ規定セラル可シ(治第四十六條○草零○佛

千八百五十二年三月二十四日ノ法律)

治安裁判官ノ
犯罪

第四十九條 治安判事、治安裁判所ノ政府目代又ハ書記ニ依リ犯サル

ル違警罪ハ輕罪裁判所ニ依リ控訴ナク裁判セラル可シ

縣ノ判事ノ犯

右ノ官吏ノ他ノ犯罪ハ通例ノ管轄ノ裁判所ニ依リ豫審セラレ及ヒ裁判セラル可シ(治零〇草零〇佛治第四百七十九條)

第五十條 若シ上ニ記シタル身分ノ官吏カ縣ノ裁判所ニ屬スル時ハ其被告トナル所ノ違警罪ハ其屬スル所ノ裁判所ニ依リ控訴ナク裁判セラル可シ

此場合ニ於テ裁判所ハ少クトモ三名ノ判事ノ數ニテ組立テサル可カラス

若シ被告人カ檢察官ナル時ハ政府目代ノ職務ハ裁判所ノ判事ニ依リ盡サル可シ

若シ被告人カ本官書記又ハ補員書記ナル時ハ書記ノ職務ハ補員判事ニ依リ盡サル可シ

若シ右同一ノ官吏カ輕罪ノ爲メニ訴ヘラル、時ハ豫審及ヒ公判ハ控

訴院ノ刑事局ニ屬ス但、終審ノ裁判ヲ爲ス者トス

若シ重罪ニ關スル時ハ豫審ハ右ノ局員ヨリ爲ス者トス(治零〇草零〇

佛治第四百七十九條以下、第四百八十三條以下)

控訴院ノ判事ノ犯罪

第五十一條 若シ控訴院ノ判事一人又ハ其他ノ官吏ノ一人カ違警罪

ノ被告人ナル時ハ被告人ハ該控訴院中其屬セサル局ニ依リ裁判セラ
ル可シ又若シ被告人カ二箇ノ局ニ在ルチ得ル時ハ合併シタル二局ニ
依リ裁判セラル可シ

若シ被告人カ政府目代又ハ書記ナル時ハ政府目代又ハ書記ノ職務ハ
前條ニ言ヘルカ如ク盡サル可シ

若シ控訴院ノ官吏ノ一人ニ依リ又ハ第九十八條ニ指示シタル者ノ一
人ニ依リ犯サレタル輕罪ノ公判ニ關スル時ハ管轄ハ大審院ノ刑事局

ニ屬ス可シ

通則

豫審ハ右ノ局ノ官吏ニ依リ爲サル可シ

右同一ノ人ニ歸セラレタル重罪ノ豫審ニ附テモ亦右ニ同シ(治零〇草

零〇佛治前ニ同シ)

續キ

第五十二條 總テノ場合ニ於テ下等又ハ控訴ノ裁判所ノ官吏ニ歸セ

ラレタル重罪ハ普通法ニ一致シテ重罪裁判所ニ依リ裁判セラレ可シ

然レモ若シ被告人カ控訴院ノ官吏ナル時ハ重罪裁判所ハ大審院ヨリ

指示セラレ可シ而シテ若シ被告人カ縣ノ裁判所ノ官吏ナル時ハ重罪

裁判所ハ控訴院ノ三名ノ官吏ニテ組立ラル可シ(治零〇草零〇佛治前

ニ同シ

大審院ノ判事
ノ犯罪

第五十三條 若シ大審院ノ判事又ハ大審院ノ檢察官カ違警罪又ハ輕

罪ヲ犯ス時ハ其裁判ハ該院中其被告人ノ屬セサル局ニ屬シ又若シ被

告人カ兩局ニ屬スル時ハ合併シタル兩局ニ屬ス

續キ

若シ右ノ官吏ニ歸セラレタル重罪ニ關スル時ハ其豫審ハ該院ノ判事

ノ一人ニ屬シ而シテ公判ハ高等法院ニ屬ス可シ

大審院ノ書記ニ附テハ其犯シタル違警罪及ヒ輕罪ノ裁判ハ該院ニ屬

ス大審院ハ又重罪ノ豫審ヲ豫當シシヤルセ而シテ重罪ノ公判ハ重罪裁判所ニ

送ラル可シ(治零〇草零〇佛治前ニ同シ)

第五十四條 前ノ數條ニ依リ又ハ總テ他ノ特別ナル場合ニ於テ豫審

判事政府目代又ハ書記ノ職務ヲ盡サ、ル可カラサル院又ハ裁判所ノ

官吏ハ該院又ハ裁判所ノ長ニ依リ指示セラレ可シ但、別段他ノ方法ニ

定メラレタル場合ハ此限ニ在ラス(治零〇草第二百九十條、第二百九十

二條、第三百二十五條、第五百五十四條、第五百九十條、第六百八條〇佛治

前ニ同シ)

管轄違ノ特別
ナル場合

第五十五條 重罪又ハ輕罪ノ豫審ニ干預シタル判事ハ該犯罪ノ公判

ニ干預シタル判事ハ該犯罪ノ公判

通則

ニ加入スルヲ得ス而シテ攻撃セラレタル判決ニ干預シタル判事ハ他
ノ裁判所ニ爲シタル上訴ノ公判ニ加入スルヲ得ス違フ時ハ判決ヲ無
効トス(治零○草第三百三十條、第五百九十一條○佛治第二百五十七條、
第四百三十一條、第五百三條)

此法則ハ闕席裁判ニ於ケル故障、哀訴ニ適用セス(治第四十七條○草第
二百六十條、第二百七十四條、第三百九十二條、第四百十四條、第五百二十
九條、第五百七十七條、第六百十四條、第六百十二條)

管轄ノ裁判 第五十六條 陪審官ヲ除キ凡テ事件ノ裁判ヲ求メラレタル豫審又ハ
公判ノ裁判廳ハ本案ノ事件ノ終審ニ裁判セラル可キ時ト雖モ其管轄
ナルヤ否ニ附テノ判決ヲ爲スヲ得可シ但、後ニ示サル可キ順次ノ上訴
ノ方法ハ格別ナリトス(治第四十八條○草第二百四十二條、第二百五十
八條、第二百七十六條、第三百十六條、第三百十七條、第三百九十六條、第四

百十九條以下、第五百三十二條ノ第三項○佛治第二百九十九條第一項、
第四百八條ノ第二項、第三百十三條)

然レモ裁判所ハ第四篇ニ掲ケタル場合ニ於テ裁判拒絕ノ罪トナルコ
ナク大審院ヨリ爲シタル管轄送付ニ反對シテ管轄違ナリト言渡スヲ
得ス(治零○草第五百六十條、第五百六十九條、第五百七十條、第五百九十
一條、第五百九十八條以下、第六百十四條以下)

續キ即チ拋棄
停止

第五十七條 管轄送付ノ場合ノ外ニ於テ若シ裁判所カ管轄違ナリト
言渡ス時ハ裁判所ハ直ニ事件ヲ拋棄シタル者トス但、法律ニ定メラレ
タル上訴ハ此限ニ在ラス(草第二百四十二條)
若シ裁判所カ管轄ナリト言渡シ而シテ其判決カ控訴又ハ大審院ヘノ
上告ヲ受ケタル時ハ裁判所ハ始メタル豫審ニモセヨ又公判ニモセヨ
之ヲ停止又ハ繼續スルコトヲ得可シ但、法律カ停止ヲ命令スル場合ハ此

通則

限ニ在ラス(治零〇草第二百五十九條、第二百六十二條、第二百六十七條、第二百七十條、第三百十六條、第三百二十三條、第三百五十二條、第三百五十九條ノ二、第三百六十五條、第五百三十六條)

管轄違即子刑ノ言渡、罰

第五十八條 何レノ刑ノ言渡モ被告人ノ身分、犯罪ノ性質、及ヒ等級、犯罪ノ犯サレタル場所ニ因リ管轄ナル裁判所ニ非サレハ及ヒ無効トスル罰ヲ以テ記載シタル法式ニ從フコ非サレハ之ヲ有効ニ言渡スヲ得ス但、總テ訴訟ノ時ニ施行セラル、法律ニ從フヲ要ス

適用ス可キ新法

裁判所ノ始審及ヒ終審ノ管轄及ヒ控訴又ハ其他上訴ノ方法ニ於ケル權利ヲ規定スルハ右同一ノ法律ニ從フ者トス(治零〇草第二十九條) 第五十九條 被告人ノ身分、犯罪ノ性質又ハ等級ノ上ニ基キタル管轄違ハ控訴ニ於テモ大審院ニ於テモ始メテ雙方ノ各ニ依リ對抗セラル可ク又ハ補ハル、ヲ得

ヲレボトセ

犯罪ノ場所ニ附テノ管轄違ハ右同一ノ雙方ノ者ニ因リ對抗セラル可ク又ハ職權ニ依リ補ハル、ヲ得然レモ本案ノ辯論前ナルヲ要ス其辯論ノ後ニテハ其管轄違ハ上訴ノ裁判所ニ於テモ受理セラレ得ス(治零〇草第六條、第五十八條)

管轄違、法式ナキ事、無罪

第六十條 無罪、免訴、又ハ不問ハ法式ノ不遵奉ニ附キ又ハ犯罪ノ場所ニ基キタル管轄違ニ附テモ決シテ攻撃セラレ得ス然レモ若シ裁判所カ被告人ノ身分、犯罪ノ性質又ハ等級ニ附キ管轄違ナル時ハ裁判ハ此事實ノミノ爲メニ控訴ニ於テ取消サル可ク又ハ大審院ニ於テ破毀セラル可シ而シテ訴ハ全キ者トシテ管轄ナル裁判所ニ爲サル可シ(治第四百十一條〇草第五百三十七條〇佛治第四百九條)

アキツトマン、ミース、ナール、ド、ブルシユ、ツツ、アブリユツシヨ、イン、フセル、ツツ、ヨ

要旨

通則 要旨

第三十一條

第六十八號 佛蘭西ニ於テ刑事法應チ民事法應ニ合一スルノ根元〇合一ノ便益〇合一ノ便益ハ日本ニ於テモ同一ナル事

第六十九號 刑事法應ト民事法應トノ合一アレントモ混同アラサル事

第七十號 高等法院ヲ除キ特別ノ裁判廳ニハ合一ノアラサル事

第三十二條

第七十一號 裁判所ノ區域ヲ定ムル事

第七十二號 本官判事及ヒ補員判事ヲ任スル事

第三十三條

第七十三號 檢察官吏即チ檢事、檢事長ノ事〇任官ノ事

第三十四條

第七十四號 檢察官ノ職務

第七十四號ノ二 檢察官ノ一體及ヒ分ツ可カラサル事

第三十五條

第七十五號 檢察官ノ公廷ニ立會フ事及ヒ其評議ニ出會セサル事

第三十六條

第七十六號 書記ノ任官

第三十七條

第七十七號 書記ノ職務

第三十八條

第七十八號 管轄及ヒ管轄ノ困難ナル事

第七十九號 管轄ノ五箇ノ種類〇越權ノ事

第八十號 始審及ヒ終審ノ管轄

第三十九條

第八十一號 犯罪ノ等級ニ附テノ管轄

第八十二號 附帶犯罪ノ場合ニ於テノ例外

第四十條

第八十三號 附帶ノ三箇ノ種類

第四十一條

第八十四號 場所ニ附テノ管轄、佛蘭西法典ノ三箇ノ管轄ナル裁判所

判所

第八十五號 日本草案ニ於ケル犯罪ノ場所ノ裁判所ノ管轄

第四十二條

第八十六號 種々ノ場所ニ於テ犯シタル犯罪、捕獲ノ地ノ裁判所ノ管轄

第四十三條

第八十七號 右種々ノ場所ノ外ニ於テ捕獲スル事、管轄判事中最

モ近キ判事ニ送ル事

第四十四條

第八十八號 捕獲ノ無キ時ニ於テハ先ニ起訴ニ著手シタル裁判所ヲ撰取スル事

第四十五條

第八十九號 從犯ハ主犯ノ判事ノ管轄ナル事

例外

第九十號 數人ノ主犯

第四十六條

第九十一號 同一ノ事件ニ附キ起訴ノ多キ事、管轄牴觸ノ申立、管

通則 要旨